

78
45

編三第書叢洋東

西

藏

東洋叢書發行の趣意

日露の戦況漸く進み、東洋の天益と多事ならんぞす、此時に際して、東洋諸國の歴史、風俗、地理、人情等に通ずるは、實に今日に於ける急務と信ず、是れ本書發行を企てたる所以なり、されば本書は平易通俗を旨とし、又多方面に向つての材料を輯めむとす、江湖の諸君本旨のある所を諒せられ、偏に世に勸められんとを希ふ、

緒言

英露の西藏に注目すること久し、而して昨年來形勢急轉し、兩國の争鬪漸く甚し、若し露をして一旦此の天險の地に據らしめば、拉達克、泥泡耳、不丹の諸國は、忽ち餓驚の好餌たらむのみ、而して印度も亦終に保つこと能はざらむ。若し英をして此の地を得しめむか、青海、新疆復た清國の有にあらす、而して露領土耳其斯坦の勢危からむ。而して清の積弱にして、藏の蒙昧なる、彼等が鷗臬の欲を防遏すること能はざるや必せり、果して然らむか世界の均勢は忽ち其の平を失ひて、東洋の禍亂を惹起し、我が日本も亦獨り安然たるを得ざるに至らむ、然り而して人の多く西藏に注目せざるは何ぞ。

吐蕃の疆、喇嘛の盛、史學研究の好題目なり。建珠、丹珠、龐然數百千卷、文學宗教の寶窟なり。圓顧者柄を乗りて黑衣朝野に遍く、兄弟一婦を擁し

一婦數夫に事ふ、社會研究の好資料なり。廣袤幾千里、高山大河參差縱横、生齒幾千萬、珍禽奇獸、異木怪草、金銀珠玉、地學博物の好材料なり、是れ皆學者、文人、實業家の宜しく講究すべき所、然り而して人の多く西藏に注目せざるは何ぞ。

人は西藏を不可思議國といへども、余は世人の不可思議なるを異しむ、我が西藏研究會員某氏、此の書を編み以て西藏研究の一助に資せり、是れ實に西藏に關する著書の嚆矢なりと謂ふべし。庶幾くは、世人が此の書によりて益々研究の歩を進め、余か怪訝の念を散し、不可思議國の祕密を暴き、以て政治、學文、實業等に資せんことを、其の英たらむか、露たらむか、將た英たるべからず、露たるべからざるかは、一に世人の之を知る深淺如何によりて決せんのみ、書成るに及んで一言することしかり。

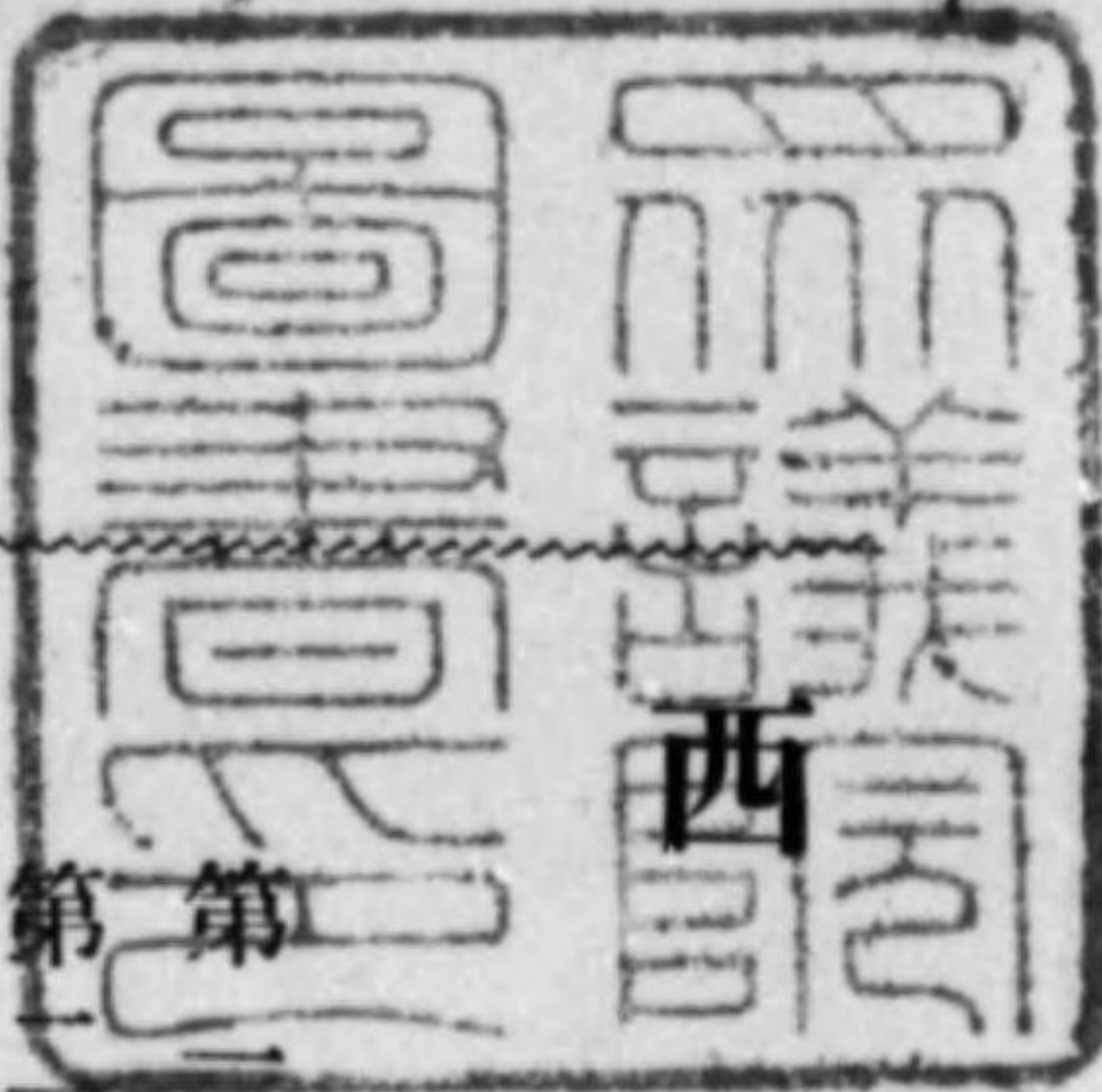
明治三十七年三月

太田保一郎しるす

西藏

凡例

- 一 本書は、簡短正確に西藏の事情を社會に紹介せんが爲に纂述したるものなり。故に喇嘛の教旨に涉れる専門の事項は、梗概を示すに過ぎず讀者諒せよ。
- 一 本書は、トラウエル、エンド、アドヴェンチュワ、イン、チベット中の前半及びロツクヘル氏の著書、西藏圖考等を参照して纂述せり。
- 一 纂述者は、世の中等教育に従事せる諸君及び其の學生諸子が、此の多趣有望なる國土の研究に一層留意せられんことを望むこと切なり。



目次

第一章 不可思議國……………一

第二章 關に攀ぢ上ること……………九

第三章 チャン地方及び其の破稜……………一一

 チャン地方の形勢……………一三

 チャン地方旅行の苦難……………一五

 チャン地方の寒氣……………一七

 チャン地方の夏季と冬季……………一九

 摩牛の効用……………二一

 チャン地力は大河の源なり……………二三

第四章 西部西藏……………一八

目次

(1)



- 天候
- 耕作地用水工事
- 皮船
- 西部西藏の道路
- 通信方法
- 拉達克の首府

第五章 國の中心……………三三

- 中帯及び南部西藏の形勢
- 雅魯藏布江

第六章 拉薩府……………二五

- 活佛達賴喇嘛
- 拉薩府に入りし西人
- マンニング氏の法王謁見
- サラット、チャンドラダス氏の入府
- 拉薩の市街地圖創作者



- 拉薩府の家屋
- 普陀落の宮殿及び大招寺
- 達賴喇嘛の引接
- 拉薩市の大法會
- 活佛の轉生

第七章 西藏鎖國の理由……………四六

- 喇嘛及び支那人の猜忌
- 支那官吏の狡猾
- 支那の勢力
- 支那勢力の衰微

第八章 商業輸出入品……………五三

- 茶及び其の飲用法
- 支那茶の強賣と其の運命
- 絹綿布

目次

哈達及び賄賂

主要なる道路

第九章 喇嘛教の起源及び發達

喇嘛とは何ぞ

喇嘛教の起源及び發達

第一期 起源

第二期 巴特瑪繼巴幹師

第三期 朗達磨王の破佛

第四期 アチーサ師の宗教改革

第五期 喇嘛教大に忽必烈に用ひらる

第六期 宗喀巴の改革

第七期 現状

札什喇嘛及び大喇嘛、喇嘛の勢力

第十章 西藏神學

西藏の經典

教旨

普通の佛菩薩

轉法輪即ち輪廻の摸形

第十一章 僧侶及び僧院

僧服

念珠

寺院の所在地

重要なる寺院

其の一 別蛛寺

其の二 黄金寺

其の三 札什倫布寺

其の四 薩斯迦廟

其の五 多爾吉姆宮即ち金剛豬尼寺

目次

其の六 雍和宮

其の七 クムバム寺

其の八 ウルガの喇嘛廟

其の九 ヒミス寺院

禮拜

喇嘛の訓練

第十二章 西藏の人情風俗……………一〇〇

不潔の習慣

家屋

家具と守り神

氣質

婚嫁

裝飾

敬禮

小兒に對する風

兒童教育

喇嘛の雙陸ツゴ

護符及び豫言者

療病法

律法

葬禮

工藝

六字の陀羅尼ツロニ

祈禱筒

祈禱壁

第十二章 言語、文字……………一二四

言語

文字

目次

第十四章 政治……………(八) 一二五

中央政府の組織

政治上の地方區分

第十五章 人種 史略……………一二七

人種

史略

第十六章 輓近の旅行者……………一三四

歐米の旅行者

スウェン・デイン氏

中央亞細亞地圖の變更

西藏高原の横斷

馬背に伏して行く

馬死し駱駝斃る

雪中の砂漠を行く

拉薩府に入らんとす

西藏軍に圍まる

再び拉薩進入を企つ

羅布泊附近の廢墟

死海

本邦の入藏者及び河口慧海師

歐米人探險旅裝

テラー嬢の探險旅裝及び探險

強盜に襲はる

最後の厄難

附錄 青海地方風俗及び喇嘛……………一四八

達里珠 西藏市の見物

達里珠及び大喇嘛の轉生

達里珠の殿堂及び喇嘛の家屋

目次

沙彌及び僧服
 格隆カロン
 男子の風俗
 女子の風俗
 市場の有様
 言語、氣候、物價、家屋
 家族の有様
 婚姻及び夫婦の愛情
 余が借りし家
 人は慢に人を害せず
 西藏人は宗教人民なり
 西藏婦人に誘はれて達里珠殿堂を見る
 少女の火傷を療す
 宗教行列
 目次畢

西 藏

西藏研究會纂述
 太田保一郎校補

第一章 不可思議國

西藏國は、地球上の祕密國たるのみならず、復た世界中、岩石の最大最高なる所にし
 て、其の全軀は、高く雲漢の上に聳え、氷雪の壘壁中に隠れ、人烟稀薄にして、禿山雪嶺
 の外、目を遮さるものなく、漠々たる曠原には、肌を裂くが如き寒風吹き荒み、轉た
 旅人の腸を斷たしむ、住民普通の衣服は、甚だ大なる羊の毛革にして、其の裏に羊毛
 を用ふるに非らざれば、此の酷烈なる寒氣に堪ふること能はざるなり。嗟此の地形、
 嗟此の寒氣、是れ實に外敵を防ぐ自然の要害なり。嗚呼亞細亞の中心にありて、地中
 海と同緯度の地を占めながら、吐蕃トキタン以來廿世紀の今日に至るまで、尙ほ地球の表面
 上、最も纒に知られたる、最も神祕國の土地たることは、豈驚くべき至りならずや。

國の三方の側面は、岩石巍峩として峙ち、宛も海岸に激せる波濤の如し、何者も敢て之を踰越すること能はざりしなり。されば、古來富強なる數多の帝國、其の四周に崛起し、一盛一衰、興廢數多度なりしも、其の怖るべき雷の如き響きは、徒に洞窟の内にありて、少しも此の懸崖の内に聞えず、蹻蹻たる波濤は、其の一泡沫をも、此の高原の黒き額を濡すこと能はざりしなり。是を以て、長夜の夢は長へに永く、桃源の樂尙濃にして、此の高原の住民は、常に不注意なる冷眼もて有ゆる出來事を瞥見したりき。

此の國の西と南とは、印度平原の美麗なる、バノラマ輝けり、其の内には數多の巨象、帝王の華麗なる進軍、ラジプト(Rajput)モゴル(Mughol)帝國、及び英人の主權の競争等、實に人の視んと欲し、知らんと欲する所の活劇あり。而して、此の世界の屋上に住せる粗野なる種屬には、毫も痛痒を感ぜざりき。顧みて東方を視れば、亦支那の大帝國ありて、治亂興廢固より一にして足らず、而して此の種屬には亦同様の冷眼を以て之を看過したりき。斯の如くにして、ポーランド(Poland)西藏のことは、其の膝下に、各色の生命の咆へ跳り舞ふに係らず、綠せる草深き高原中に眠れる、犖犖なる石像

の如く、常に依然として、唯四方を睥睨するのみなりき。

我が國に於て、西藏の事情を知る者は極めて少く、近藤守重曾て喇嘛考を著し、以來、邦人の此の國に關する著書を公にしたる者なきは、豈遺憾ならずや。近時河口慧海師、此の國を探檢し、其の旅行記は、時事新報等の新聞にて公にせられしは、世人の熟知する所にして、其の擧の勇壯なる、夫の印度の大旅行家サラットチャンドラダース氏の探檢に比して、多く遜色あるを見ざるなり。然るに師の記行は、新聞紙上に登載せられたるのみにて、未だ一部の書籍として出版せられざれば、該新聞を讀まざるものは、今尙西藏に關する觀念の充分ならざるを奈何にせん。今や英露の此の國に關する争は、日に漸く其の熱度を高めんとするに方り、等しく東洋に位する我が國人にして、之に不注意なること、豈夫の草原の石像の如くなるを得んや。然れども人の眼は蝦蟇の如し、活動する者にあらざれば、之を視ること能はざるなり。而して西藏は活動せざるなり、永く眠れるなり、人の之に注意せざりしも亦強ち咎むべきにあらず。されば、西藏は如何なる所かとの問題は、一般に等閑に附せられたるも亦宜なりと謂ふべし。英國の西藏探檢者テラー嬢の會て故國に歸りし際の如きは、

英蘭及ひ蘇格蘭の各教會は、競ひて此の問題に就きて、嬢の講演を懇望したりしが、一記者、當時の有様を記して、曰く世人の知識は、甚だ幼稚にして、孟浪の臆說揣摩を逞うし、或は西藏を以て英國の北方に在るものとし、或は之を阿非利加洲の中央にありとし、或は之を太平洋中の一小島なりとせり、斯る無學無識は、決して驚くべきに非らず、我等が學校に在りし當時にありては、西藏に關する書籍は、唯ハック氏(White)の著せる、韃靼、西藏及び支那旅行と題する一書ありしのみ、其の書は頗る世人に珍重せられたりと雖ども、眞面目に其の説ける所を採用せんと試みしものは殆どなかりき、抑ハック氏の筆は、頗る巧妙なりしかども、正確なる事實の説明者としては、殆ど氏の所説に信を措くこと能はざりき、是を以て其の説の奇にして文の妙なるに拘らず、此の書は、當時の學校にて採用するものなく、従ひて、西藏は世界の地圖上に、唯一個の盲目の姿に印せられたりき、斯くて、此の國の實際の研究は、最近二十年來の事にして、此の國の事實をして、普く世人に知らしめたる書籍は、僅に最近十年此方出版せられたるものなり云云、嗚呼、英國に於て既に然り、我が國民の之に注意せざりしも亦宜なりと謂ふべし、然れども其の政治、風俗、人情、社會、歴史、地理、產物

は決して忽にすべからざるものあり、是れ西人が危険を冒して、屢々其の探檢を試みし所以なり、實に廿世紀の世界は、決して西藏人をして、長夜の夢を貪らしむること能はず、而して、我が日本國民のみ、獨り之を對岸の火災視して、安然たらんことを欲するも豈得べけんや。

歐米諸國の探檢家が、物し、幾多の快活緻密なる記録は、我等が此の地方に行きて、目前其の不可思議なる諸條件を目撃するが如く、其の實況を開示して、復た餘蘊なしと謂ふべし、此の地は、吾人の容易に行くこと能はず、又容易に視ること能はざる所にして、恐くは千人中一人も、其の實況を目撃すること能はざるなり、而るに各探檢者が、其の身命を顧みず、珠を逆鱗の淵に探りて、之を吾人の觀覽に供せるは、豈深く謝せざるべけんや。

吾人は、古來幾多の探檢者の恩を謝せんとするに方り、先づ、此の地の形勢、及び氣候、其の特異の位置等、自然の特性に由來せる困難、及び國民の心臟を循環せる、封鎖排外の精神より起る所の一層大なる困難あることを知らざるべからず、今日、西藏人の精神界を左右する所のものは、主として隣邦より輸入したるものに

係れり、其の住民は、元來天然力を以て、破壊的作用を有する惡魔の如く思惟し、之を畏敬崇拜し、之を慰めんが爲には、食人的の禮式を以てしたることありき、然れども、こは其の往古の事なり、既に千年以前より、印度の溫和なる佛教を輸入し、國民一般に之を信仰するに至れり、但其の所謂佛教は、印度教の多量を混じたるものにて、固より純粹の佛教にはあらず、若し強ひて、我が國の宗派に就きて、其の類似せるものを求めば、其れ或は我が真言宗に近きものと謂ふべきか、此の特殊なる佛教の由來を尋ねれば、實に一個の小説的にして、西藏開國の英主、特勒德蘇隆贊 (Tsolg Tsalu Chan po) が泥泡耳國 (Nipal) の艶美なる皇女と、唐の嬋妍なる文成公主、貞觀十五年、西曆六百四十一年とを娶りし時、并せて其の宗教をも輸入せしを以て始とす。

西藏は、喇嘛の土地なり、喇嘛と云ふ語は如何なる意味なるか、喇嘛とは僧侶なり、此の僧侶は、百人、千人、若くは五千人も、宏大なる家屋内に群集せり、固より一棟の大屋にあらねど、而して、其の家屋の内部は、夫々許多の房室に區分せり、家屋の構造は、恰も岩窟内に於ける要塞の如く、厚壁兀然として峙ち、之に穿てる窄き窓は、さながら眉を顰めて、周圍の茫々たる原野を冷笑するが如し、蒙昧怯懦なる俗人は、此の宏壯

華麗なる僧院の門前に在て、見るもいぶせき陋屋の中に、多人數雜居し、其の日常の作業は、唯喇嘛の生活を容易ならしめんが爲めに、年中孜々として、田野を耕やし、羊群を看守するのみ、喇嘛の權力は、宗教的威力を以て、深く國民の腦裏に膠着し、到底脱離すべからざる關係あり、故に各家族は、少くも寺院内に一人の代表者を有せり、時としては、二人若しくも三人の代表者を有することも、亦決して稀ならず、されば、

第 一 全國民の六分の一は、喇嘛なるか、若くは其の見習なりと云ふ、教育は、専ら僧侶の教育に止り、建築の苟も見るべきものは、唯殿堂及び寺院に限れり、國民唯一の宗教的儀式は、祈禱輪 (Prayer wheel) を廻轉すること、六字の陀羅尼を念誦することあるのみ、斯くて、喇嘛は、其の掌に國民の身心を制御して、非常の權力を振へり。

西藏の土地は、實に天國の如し、莊嚴なること謂ふばかりなし、此の地は、金色燦爛たる殿堂、各所に輝き、地味は肥えて、翠綠滴らんとする牧場に富み、晴透にして寒冷なる天に對しては、白き裸躰の胸部を曝せり、若し日當り、其の谷を逍遙せば、成熟せる穀類の黄金色を呈するを見るべく、河流に掉せば、其の砂礫の粒々是れ黄金なる



喇 嘛

を見るべし。然れども、亦千古不變の後景は全く旅人の視域を脱すること能はず何

なる幽鬼の實在にあらずして、何ぞや。此に因りて是れを觀れば、西藏は、全く是れ一

第二圖



四部西藏
の高山に
て圍繞さ
れたる砂
漠の高台
の概形

ぞや、千歳の雪を頂ける、皚々たる高山の頂の
莊嚴なる、其の間に飛翔せる鷲の婆娑たる、其
の光景は、到底筆舌の及ぶ所にあらずれども、
吹雪すさめる荒原に參差たる隊商の忽ち奇
寒積雪の裡に凍死するが如きは、決して他に
視ること能はざる現象なり。又、喇嘛の奇異不
潔なる服裝して、人の大腿骨もて製したる喇
叭を吹きながら、手に頭蓋骨にて製したる鼓
を携え、漠々たる原野、寥々たる山谷の裏に立
て、其の舞臺の上に周旋せる有様は、蒙昧蠢愚
の人民を愚弄して、驚倒せしめ、恐怖せしめ、又
其の心臓の血液を凝固せしむべき、不可思議

個の不可思議たるを免かれざるなり。

第二章 閩に攀ち上ること

此の禁秘國の閩に攀ち上らんには、唯ヒマラヤ山に躋るの一方あるのみ、ヒマラヤ
山は、南方に脹れて、峻しき傾斜をなし、西藏高臺を扣壁として、印度平原より俄然隆
起し、僅かに百里以内に、一萬七千呎の高さに達し、世界中にて、最高最大の階段をな
せり。此の階段には、數多の山脈重疊し、深き罅隙を以て、其の間を區分せり。此の罅隙
こそ、即ち旅人の必ず踏むべき所なれ。之に攀ち登るには、凡そ一週間の時日を要し、
身體極めて疲労し、神氣頗る沈鬱す。夫れ炎熱燬くか如き氣候に、長時間避難所なき
山脊の峻岨を踏みて、從つて攀つれば、從つて下り、一登一降、際限なく殆ど何の得る
所なきが如し。而して峻崖絶壁の谿谷は、蒸發氣多き植物の繁茂せる所にて、非常な
る炎暑の爲めに、一種の瘴氣を醸し、人の氣息を壅塞して、熱病の死の陷阱に陥らし
む。又處に依りては、谿間の中に、氷田の流れありて、寒冷なる風を起し、冷氣忽ち襲ひ

(10)

て身體爲に戰慄するに至る、此の氷田の上に築ける美しき小屋に憩ひて、椅子に腰掛くれば、山路の險に悩み、暑熱の苦に疲れたる旅人をして、殆ど蘇生の思あらしむ。此の登山の困難辛苦は、固より容易ならぬ事なれども、迢り／＼て最後の峻坂を登り詰めたる時の愉快さは、此の困難を償ふて餘あるべし。吾人若しヒマラヤの絶頂に立ちて、來りし方を顧みなば、天を摩せる高嶺、劔を植たる峻峯は、雲烟の間に聳え、斷崖絶壁其の中に隠顯して、陸離たる光彩を放てるを望むべく、若し夫れ北方遙に前途を望めば、斷雲長にかゝりて、一斷一續、無數の峯巒、鋸齒の如く相峙てるを見るべし。馬を吳山の第一峰に立つ、尙誇るに足れり、況や是れ此の山、實に世界の第一たり、我此の頂に立つ、天下の快感何ものか之に若んや、然れども、遼遠なる無數の山嶺の間は、即ち古來人類の未だ曾て踏査せざる所、恐るべき氷田と、地表の裂罅とは、神斧鬼工の秘密にして、人の輒く窺ふことを許さず、唯其の最も深き凹處こそ、纔に人類の足跡を印して、此の秘窟に通ずる唯一の門戸たるなれ。我が攀ち登りたる所は、幾條の通路中、最も容易にして、且つ最も低きものたりしも、尙其の高度、歐洲第一の高峯、白山（White Mountain）の高さに髣髴たるを思はゞ、以て此の國に入ることの、極めて困難なるを

想像するに足らん。此等の雪を以て覆はれたる、廣大無數の山嶽は、千早振る世の始より、いとも靜かに眠れるものにして、何人も來りて此の寂寞を破り、其の夢を驚しし者はあらざるなり。歐米幾多の眼光は、不言の間に、此の奇怪にして寂寞たる光景の上に注ぐと雖も、また能く此の神秘的關門を破りて、秘窟の秘を探りしものあらざるなり。

第三章 チャン(Chang)地方及び其の破稜

地理學上西藏の中北兩帶の大部分を占めて、其の中心たる所は、即ち西藏人の所謂チャンタン(Chang Tang)地方なり。チャンタンとは北方の曠原の義なり、此の地を實見せば、其の歴史と地理とは、人をして最も興味を感ぜしむるに足るべき各事物の關鍵たらむ。チャンは、野獸に委せられたる、大なる寒き高臺にして、之を除きたる西藏國の外部は、只此の高臺の破稜たるに過ぎず。チャン地方の明瞭なる觀念は、細かに地圖を視ば得らるべし、然れども、古來此の國の地圖は、其の描寫極めて不精密に

して唯其の概要を知るに止まれり、抑此の高臺は、北方より突出し、一様に西方に延ひて、ヒマラヤ山の結節をなせり、ヒマラヤ山は南方に向ひて脹れ出で、東方は延き支那の國境に達せり、此の兩側の表面は、數多の大河の作用、氷田の削鑿、雨水の洗滌の爲めに、數百哩の間は侵蝕せられて、起伏凹凸し、峻崖深谷をなせり。

チャン地方は、驚くべき高度を有すれども、其の面は比較的平垣なり、輒近に至りて、旅人は各方面より、此の地方を通過せしもの多し、第十八驛騎兵大尉ウエルビー(Mellby)及びマルコルム(Malcolm)は、西紀一千八百九十六年の夏、西より東に向ひて此の地を旅行せり、ウエルビー氏曰く、余は此の地を旅行せしに、四ヶ月間玉葱より丈高き植物を見たることなく、又殆ど四ヶ月間は平均一萬六千呎の高所に宿り、十四週間以上人影を見たることなしと。

印度方面のレー(Tah)より支那のタンカル(Tankar)までの距離は、約二千哩にして、其の旅程は五ヶ月半を要すべし、ウエルビー氏の此を旅せし時は、途中常に「ラビー」と云ふ小犬を伴へり、此の道路を概言すれば、幅廣く豁谷も亦大なり、然れども、時に一萬六千呎の高さに達する所ありて、毎四五日の後には、則ち豁谷を横過せざるべ

からず、此の地の旅行に就きて、一つの困難と云ふべきは、途中水に乏しきこと是なり、チャン地方は湖水に富み、中には随分大なる湖水あれども、哀哉其は悉く鹹水湖にして、固より飲むべくもあらねば、探検者は、毎日水を得んが爲めに、井を穿たざるを得ず、泥泡耳國(Nippon)及び西金との大貿易品たる西藏の岩鹽は、實に此等の湖水より得るものにして、現に湖岸の濕地には、殆ど純粹なる鹽の結晶を見ること稀ならず。

チャン地方の北方の氣候は、吾人の實に堪へ難きものなり、日中には、華氏驗溫器百十度の高度に昇り、夜中は、濃霧中に在りても、二十五度の極寒に降下せり、是れ此の地は空氣極めて清淨稀薄にして、天空の甚だ晴朗なるに由來せり、總て、西藏を旅行するものは、必ず其の天色の透徹青色にして、驚嘆すべきものあるを發見すべし、冬期此の地方を吹き渡る嚙むが如き寒風は、何等の織物を以て身軀を包むも、之を拒むこと能はず、毛布羅紗の如きも毫も身を温むるに益なく、唯獸皮のみは能く此の間の防寒用に適せり、然れども之に用ふる獸皮は、硬強にして毛を被ふるものたらざるべからず、大尉ウエルビー氏は、斯の如き凜烈なる奇寒の爲めに、一夜に九頭の

驛馬を亡へりと云ふ。西紀一千八百九十五年リツツルダール(Littledale)氏が、北方よりチヤン地方に來りし時は、一百六十頭の動物を伴ひて出發したりしに、其中唯二頭の小馬と六頭の驛馬とのみ纔に生きて還へりたるのみ、他は悉く途中に斃死せりと云ふ。又此の地方の空氣は、常に乾燥せるが故に、旅人は口渴き、咽喉乾き、鼻孔は焦げ爛れ、皮膚は霜傷の爲めに裂けて、非常なる痛苦を感すべし。空氣の稀薄にして乾燥し、寒冷にして純潔なることは、是の如くなれば、其の報酬として肉類の如きは、能く長時間の保存に堪へ、良しや乾燥の極粉末となるに至るも、決して腐敗の憂なれば、之を貯ふると至りて便なり。テラー嬢は、曾て此の地方より、羊の乾燥せる肋肉を印度に送りしに、其の肉は殆ど骨に縮着し、ベンガルの海暑蒸すが如き平原を經たる後と雖へども、決して腐敗することなかりき。嬢は此の肉を調理せんには、先づ水に浸たさるべからず、水に浸せば分量増加し、脆軟にして其の味も誠に佳真なりと云へりき。

(一四)

チヤン地方の南方は、延きてテングリノル(Tengrinor)即ち天海の畔に達せり。此にてヒマラヤ山の内壁と合し、四時白雪を頂ける宏大なる山嶺をなせり。此の廣大なる

第三圖



四時白雪を頂ける高峰

地方には、常住の人民なし、其の原野は、只夏季の短期間のみ密に茂れる草に奇しき花を着け、宛も絨氈を敷けるが如く、茫々として際涯なき一大牧場となり。野生の馬、驛、羴牛、山羊及び羚羊の類、無數群聚して、此に其の幸福なる

生活を楽しめり。此の夏季間は、遊牧の種屬(Tamias)の集ひ來て、此の獸畜を看守し、群獸此

の綠氈の上に戯れ遊べりと雖ども、一び冬季の迫れるを知るや、忽ち此の地を去りて、廣濶なる平原、また一獸畜の影を止めず、只寒雲の漠々たるを見るのみ、而して寒風一び吹き來れば、此迄鮮綠なりし草木、一時に乾枯して其の硬きこと恰も骨の如く、針金の如し、されば、夏季の外、年中荒廢して、人獸の跡を印せず、荒涼の風景、實に旅客の腸を斷たしむ。北極恒寒地方にも、尙ほ年中生存せる野生動物あるを見れば、此の地の現象、實に奇怪千萬と謂ふべきなり。西紀一千八百九十一年に西藏國を通行せし、英國陸軍大尉ボーウエル氏 (Bower) は、此の差異の起れる基因を探討して、唯脂肪の分量如何にあること論結せり。

西藏國の模範動物は犛牛 (Yak) にして、其の産地はチャン地方なり、該牛の容貌は、尋常の牡牛に似たれども、首より脊に亘れる鬣ありて、長き旄毛を其の兩側に垂れたり、其の毛深き尾は、一の商品として輸出せること、普く人の知るところなり。犛牛は、巨大にして、且つ醜き獸類なれども、此の國にては、最も必要なるものにて、荷物の運搬は、一に此の動物に依れり。騾及ひ驢を侵して斃死せしむる所の山病、及び心臟病の如きも、此の獸を侵すこと能はず、且つ山羊の如く、足元確かなる動物なれば、食鹽

及び磚茶の大塊等、他動物の決して駄し能はざる重荷をつけて、危険極まりなき場所を、苦もなく運搬するは、到底他の家畜の企て及ばざる所なり。此の獸は、人に曳かるゝことなく、自ら徐々として進行し、行商は常に其の後に従ひ、吹雪を犯し、高き山路を辿り行く、其の歩行は甚だ緩慢なれども能く久しきに堪ふべし。又、其の肉は、西藏國民の主要なる食物にして、チャン地方にては遊牧民の食料は専ら之に依れり、大尉ウエルビー氏は、其の脂肪を煮結めて、一種の糖菓を製せしに、其の風味至つて良好なりしと云へり、其の乳は牛乳よりも滋養成分に富み、此より精良の「バタ」を製し得べし、此の「バタ」は新製のものよりも、却て古くして酸敗したるものを宜しと云ふ。西藏人は、新しき酒を嗜みて、古き「バタ」を好み、此の地方の住民は、食事毎に茶に「バタ」を混して飲用すれば、「バタ」は片時も缺くべからざる必需品なり。犛牛の毛皮亦用途頗る廣し、之を地中に置けば、六十年若しくは百年をも保存し得べしといふ。木材は、西藏國中極めて稀なり、特にチャン地方には殆ど皆無の有様なれば、犛牛の乾燥せる糞を以て薪炭に代用せり、之を土語にて「ジョー」(Jo) と稱す、遊牧の民は、之を蒐聚して、寒氣を防がん爲めに、常に天幕の周圍に堆積せり、天幕も亦此の動物の粗

チヤン地
源は大
河なり

なる黒色の毛を以て、能く織りたるものにて製せり、之を通常の囊布に比すれば、大に粗慥なれども、強靱にして能く久しきに耐ふ、牦牛の毛は、各種の製造品に供し、針金の如く堅きを以て、除塵眼鏡を製して、雪の爲めに眼の盲することを防禦せり。
チヤン地方は怪物の分水界なり、印度支那及び緬甸の地圖を形成せる數多の大河は皆源を西藏に發し、長さ不規則なる堀割をなせり、殊に東方に著し、地圖上此の國の形狀は長大なる骸骨の手狀をなし、其の手指は皆悉く上方に屈曲して、其の中心を壓するの狀あり、此の起伏によりてなれる谿谷及び傾斜面は、即ち當國の主要なる部分にして、最も人烟稠密なる所なり、之に反して、他の部分は、嵯峨たる山岳、常に雪を頂きて、各所に峙てる所の高地にして、其間彼方此方に平坦の場所、愛すべき谿谷、及び茂れる森林なきにあらず、許多の流河は實に其の源を此に發して、平原を下し、其間には幾多の沼澤多くして、自然に人畜の陷穽をなせり。

第四章 西部西藏

天候

耕作地用
水工事

チヤン地方は、西方ヒマラヤ山に連る、ヒマラヤ山の南側は、峻しく急下して、印度平原に達せり、其の間、平地少く、斷崖絶壁の地多し、其の一角には、拉達克(Ladakhi)及びバルチスタン(Baluchistan)地方あり、時としては、之を中部西藏、或は小西藏とも呼べり、當地は、其の風景の佳絶なるを以て、最も世に著名なり、河水は何れも急流をなし、氷雪融解して、其の源をなせり、地草木に乏しく、唯斷崖の絶頂より墜下する雪氷の摩擦に耐へて、纔に生き残れる草の、巖石に固着せる外、毫も草木を見ること能はざるなり。

此の地方には雨なし、土耳其斯坦の砂漠より、吹き來る風の細微なる塵埃を伴へるが爲めに、天色銅赤色を呈し、天候常に朦朧たり、其の雨なきは、中部ヒマラヤ山峙立して、印度洋より來る濕氣を帯びたる雲を遮りて、抑留するに基けり、此の因由によりて、西部西藏の全部をして、乾燥磽确の地たらしめたり。

二萬一千方哩の面積中、耕作に適する地は、唯僅に一百方哩に過ぎずと云ふ、各種の利用厚生設備を悉くして、此の地を耕作し、灌漑の目的を以て、數多の精巧なる水道を設けたり、次に示せる圖は、即ちナイト(Night)氏の書けるものにして、谿谷に向

つて傾斜せる秃山の其の勾配急峻なるに拘らず、澗水の面を抜くこと數百呎の嶮
岨なる岩壁の中腹を穿ちて、視力の達せん限り、淡綠色をなせる地平線の蜿蜒とし
て帯の如く、山肩を繞りて、連續せるもの、是れ即ち灌溉の用水に供せんが爲め、山腹

に設けたる堀割にして、殆ど人の到り難き高所難所に
至るまで之を築造せし困難と、規模の大なるとは實に
歎賞の外なし而して其の修繕も亦非常の耐忍と勞力
とを要することは、吾人が意料の外にあるべし。

見俯しては雪崩の山腹を急轉直下して河流に墜落して激浪を起せるを見ると、又
曰く余は、輕き數本の棒を組合せて、骨格とし、之に四十枚の山羊の皮を補綴して作
りたる筏を見たり、此を中流に泛へて、人々思の儘に漕ぎ廻したりしかば、余は頭を

皮船

第四圖



西部
西藏
イス
カ
の
景色

余は屢々怒號するが如き鈍き音を耳にし、仰ては數百
尺の高山の絶頂より、注下する細かなる雪の小瀑布を

動かして、左顧右眴するの勞を須むずして、恣に周圍の景色を賞覽するを得たり、
余は河の兩岸に奇岩妖石の横はりて、人をして一見戰慄せしむるものあるを見た
り、其の風景は、余が乗れる筏の飛ぶが如き進行と共に、時々刻々變幻極りなく、或は
宏大無邊なる岩石の岬角突出して、巨浪之に激して怒號するあり、或は綠園の細長
扁平なる岬角、深潭の灣を封して、蒼々たるあり、而して其の後方の秃兀たる丘陵及
び雲漢に聳ゆる雪峰と相掩映して實に仙境とも稱すべき前景をなせりと、校補者
云ふ皮船は、西部西藏のみこれあるにあらず、全國之を用ふと知るべし。

道路は固より地勢によりて設けたり、西部西藏の道路は、比較的善良なりと稱せら
る。此の通路は谷合に設け、進むに従ひて漸次に狹隘となり、時としては、絶壁に架せ
る棧道を通りせざるべからず、而して、途中許多の溪流には、西藏流の繩橋を架せり、
繩橋は三本の鐵鎖よりなり、通行人は其の一本を足にて踏み、二本を兩手に握りて
通行するなり、此の繩橋は、深さ百呎以上の岩の罅隙に懸りて、之を渡るときは、劇し
く左右に動搖し、人をして、心悸し膽寒からしむ、此の繩橋も時に雪崩に絶たれ、洪水
に洗ひ去られて、行通を絶つことあり、校補者云ふ道路の崎嶇たるは全國皆然りと

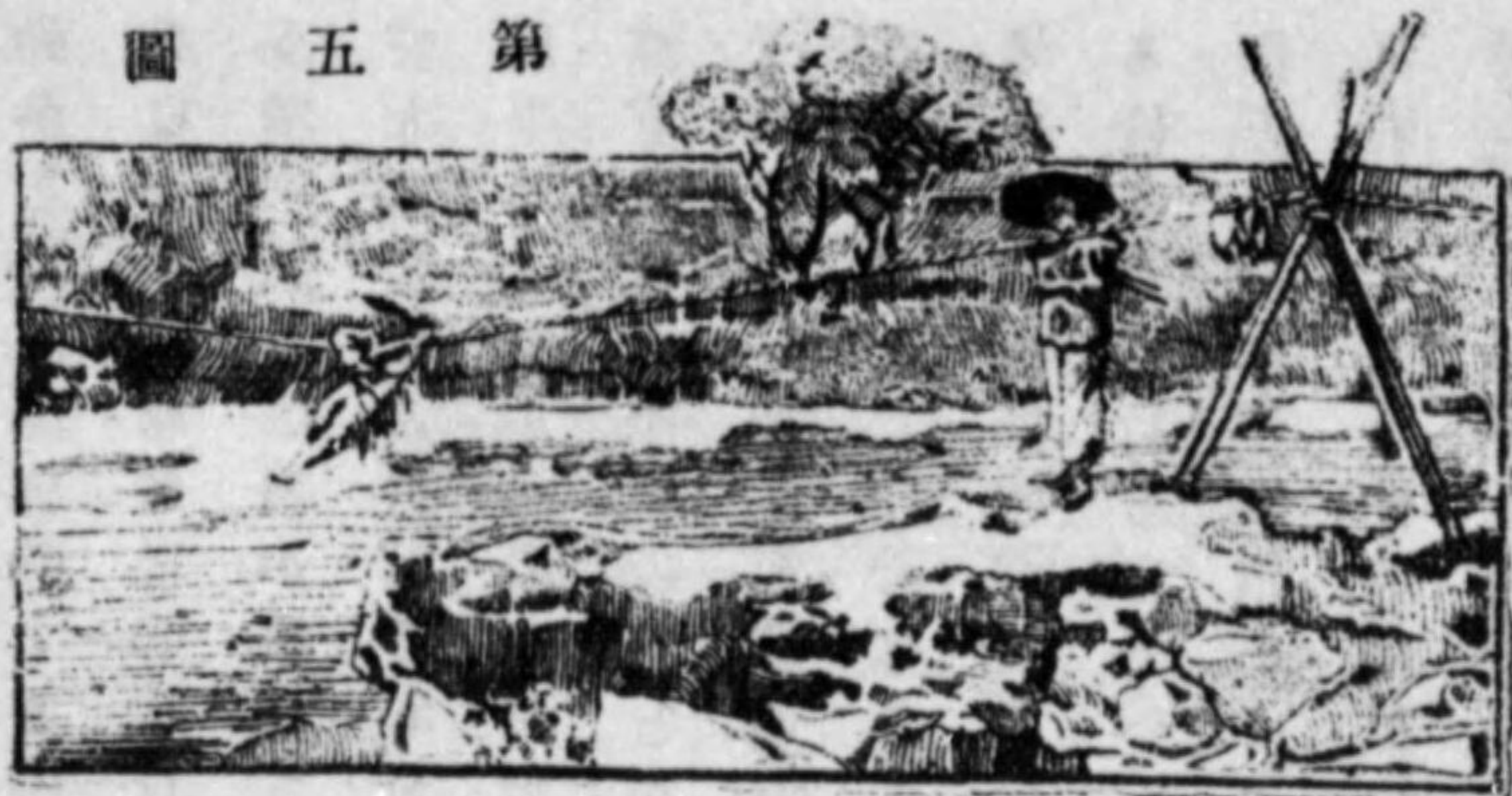
西部西藏
の道路

知るべし

(三三)

ラダックの
首府

第五圖



打箭
爐附近
に架
せる
橋

道路既に此の如し、随ひて信書の取遣りも、極めて不
確實にして、且つ危険なり。若し此の繩橋の消失せる
ことあらんか、然るときは石に信書を結び付け、之を
彼岸に投ず、故に往々對岸に達せざるものありて、空
しく水中に消失することあるは、自然免かれざる所
なり、又一般の風習に據れば、速達便の必要なる時に
は、發送人は、信書に鷲の羽を固着して、之を表すと云
ふ、羽檄の意に基けるものにや。
ラダックの首府をレー(Ladakh)と云ふ、印度の市場と、中央
亞細亞の市場との中間に位し、双方より來る所の行
商は、此に至りて止む。夏季には、サイベリヤ、支那、西藏
の各地方、韃靼及び印度平原より、幾多の商人、許多の
駱駝、羣牛等を伴ひて、輻湊し來り、頗ぶる熱鬧を極む、

中帶及び
南部西藏
の形勢

ヤムツン
の雅魯藏布
江

此等の商人其の取引を畢へて、歸途に就く前には、一ヶ月若くは二ヶ月間、此處に休
息するを例とし、市況販販なり。拉達克及びバルチスタンは、現今は西藏領にはあら
ずして、克什米爾國(Kashmir)マハラジャ(Maharajah)の領域に屬せり、然れども其の人
民は、西藏人種なり、ラホウル(Lahoul)ジュモチ(Spiti)の二小英國領は、此の間にありて
「モラピアン」派傳導師の布教最も盛なる所として世に著名なり。

第五章 國の中心

中帶及び南部西藏は、該國中最も人煙稠密なる所にして、即ち國の中心なり、此の地
帯の夏季にありては、風光優美にして、日當り好く、谿間を流る水は、涼々として樂を
奏し、實に仙境の思あり、然れども冬季は、滿目悉く結氷して、鐵の如く凝固せり。
此を流る、大河あり、雅魯藏布と云ふ、西部西藏に發源し、ヒマラヤ山壁の北方に沿
ひて、數千里の間東方に流れ、急に南方に屈曲し、驀然として急湍をなし、七千呎を流
下して、人跡到らざる未開地に没し、再びアッサム(Assam)地方に現れ、終に著名なる

ブラマブー、ラ河となりて、印度のカルコッタに到り、ベンガル灣に注ぐ。此の人跡未到の地は、廣袤二百哩弱なり。此を探検して、此の河の上流と下流とを結合せんとすの壯舉は、遂に其の功を奏し、從來の疑點をして、渙然氷釋せしむるに至れり。此の壯舉をなしし最初の人は、生れは西藏人にして、半は印度人たる。一人の測量家なりき。此の人は、此の目的を遂げんが爲に、野人の襲撃に遭ひて、屢々其の生命を危くし、非常なる困難を受けしと雖へども、殆ど其の目的を成就せり。氏は千辛萬苦を厭はず、流に沿ひて下り、遂に一步も進むと能はざりし所に至りしかば、止むを得ず一定の形に作りたる五百本許の棒を取りて、悉く記號を附し、之を河流に投ぜり。此の方法は、固より明案たりしに相違なきも、惜哉準備整はず、更に下流にありて、流下し來る棒を看守するものなかりしかば、此の勇敢にして、奇特なる計畫も、其の結果は遂に失敗に歸するに至れり。然れども、是より後幾多の探検家は、終に雅魯藏布江を以てブラマブートラの上流なりと確定するに至れり。

チャン地方は、國の南境を去ること遠く、此の側面に於ける破稜は、全く高臺の狀を呈せず。雅魯藏布江に注ぐ許多の支流は、何れも陵夷なる谿谷をなせり。又其の間に通ずる數條の脈は、しき道路は、靈地^{ラサ}に貢物を奉納せむが爲めに四方より輻輳せる往還なり。然れども、此の道路に一切外國人の通行を禁ぜり。蓋し此の地方は、其の重要なること、固より他の地方に比すべくもあらねば、一層用心堅固に見張をなして、之を守護せるとも、彼等にありては、復た已むを得ざる所なるべし。

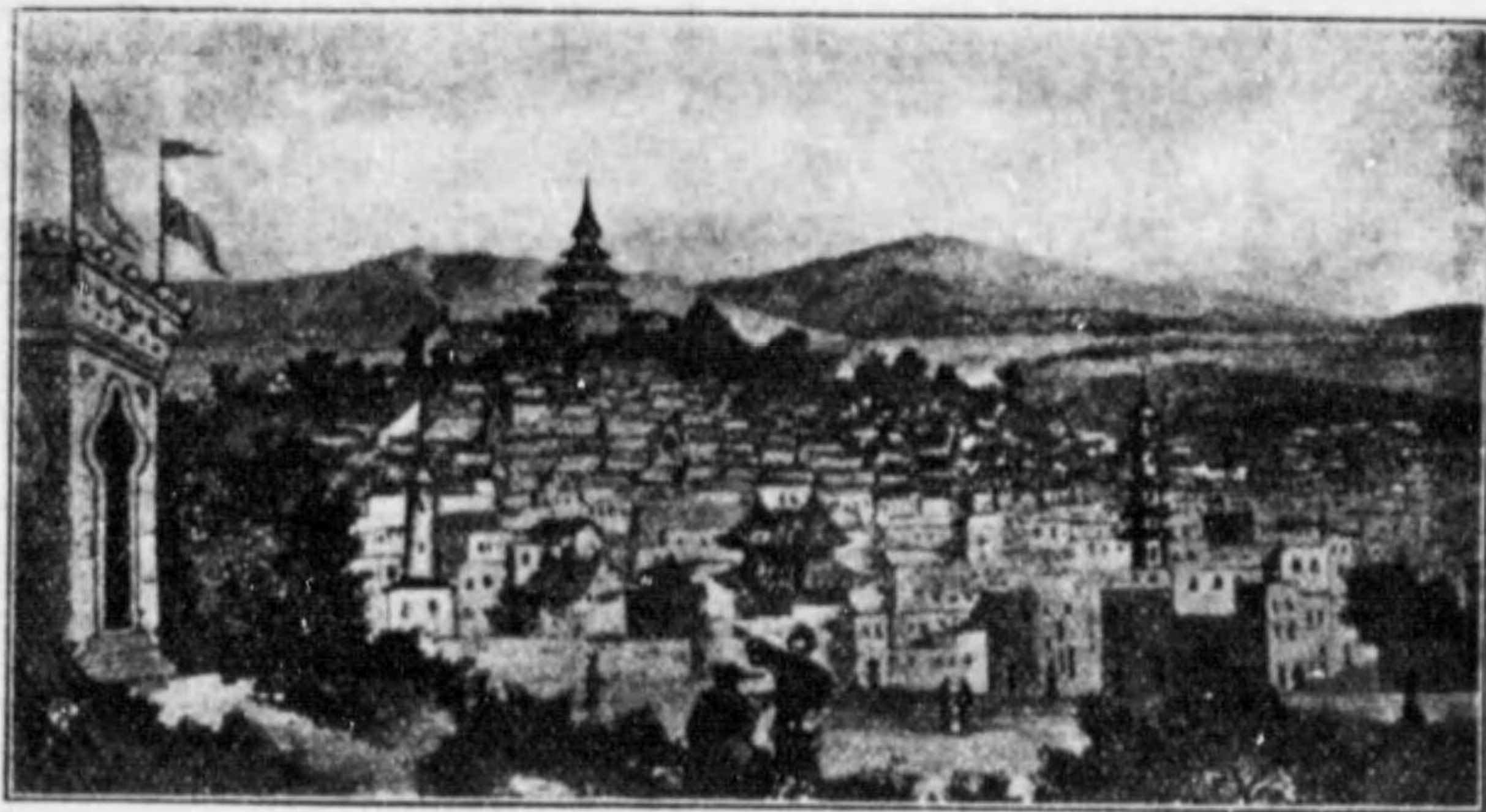
第六章 拉薩府

世界數百萬人の眼は、實に拉薩^{ラサ}府を視んことを熱望せり。此の府は北の方、遂にボルガ地方より蒙古西藏の全部に亘れる廣大なる地方に向て、其の人民の精神を左右する所の咒文を散布する神聖なる源泉たり。換言すれば、喇嘛教の大本山所在地たり。されば凝り固りの信者中には、此の地に巡禮せんが爲めに、六ヶ月間の困難なる長旅行をなし、其の途中には、世界の最も峻峻なる山嶺を越え、酷峻なる氣候に耐へ、慘忍なる劫賊と戦ひ、言ふべからざる苦難を忍びて、引接の悲願を遂げ、攝取不捨の光明を享んことを樂めり。而して此の巡禮者は、常に強壯なる男子のみならず、纖弱

なる婦女子と雖へども、一意此の靈地に參詣するの大悲願を以て、大膽にも重量の荷物を負ひ、徒歩して此の艱難なる長途の旅行に従へり。されば、哀むべし、其の多数は途上に倒ふれて、空しく白骨を無定河邊の磧に留め、徒に幽魂を六道の衢に迷はしむ。父死して葬らず、妻病んで起つこと能はず、朔風忽ち幕を吹きて、漠々たる原頭、既に人影なし、唯一部の残存者のみ纔に神聖なる市街に達して、偏に引攝の空しからざりしを喜び、罪業の頓に消滅せしを謝するのみ。

此の神聖なる市街の名は、抑何の義ある「ラツサ」とは「神の座位」と云ふ義にて、其の「ラ」は、決して「ラー」(Lha)にあらず、極樂界にある佛菩薩の子孫たる「ラー」は、其の幸福なる園中に安坐して、唯汲々として我が快樂のみを得んことのみ營々し、下界の人間には何の顧みる所なきものゝ如し。然れども、此の下界の人間も他日或は其の境遇、効績の如何によりて、此の安富尊榮の地位を得ることあらんも知るべからず。實に「ラー」は、香雲棚引ける九重の上において、外界とは何の關係なきが如くなれども、人民の之を崇敬し、之を渴仰することは、實に余輩意想の及ぶ所にあらず、但余が此に謂ふ所の「ラー」は決して其の「ラー」にあらず、此に謂ふ所の「ラー」は、一の生活躰にして、

第六圖



ラサ市の街の圖

拉薩市街の近傍なる普陀落(Lohan)の宮殿に住せる主權者なり、之を生ける觀世音菩薩(Avalokitesvara)と崇め、達賴喇嘛(Dalai-Lama)は其の化身なりと稱せり、其の宮殿の塔は黄金の延板にて葺きたれば、閃々として陽光に輝き、禮拜者をして唯之を一見せしのみにて自ら畏敬の念を起さしむ。

此の主權者の畫像は、西藏國中到る處存ぜざるはなし。然れども其の形狀は種々ありて、固より一ならずと雖ども其の多くは許多の眼及び手を有せり、是れ皆慈悲の旨趣より成れり、即ち許多の眼は人間の苦患を觀て之を憐憫し、其の許多の手は之を救濟せんとするの意を表せるものなり。拉薩府は、此の全能なる

慈悲佛の特別守護の下にあり、との唯一の信仰は、當市をして罪惡不幸の住居にあらずして、優美なる避難所たるの觀念を與へたり。佛の肖像は、黄金を以て鑄造したるもあり、黄銅其の他の金屬を以てしたるもあり、或は小塔中の岩石に彫刻したるもあり、何れも數千の禮拜者を引き、之に附屬せる金屬具、及び寶石の如きに至るまで、聖靈の宿る所にして、佛の慈悲を反射するものとせり。無感覺の肖像にさへ既に是の如し、若し有情の人をして端然として禮拜堂に立ちて、信者の眼前に實現せしめば、其の信仰果して如何にあるべき。されば、普陀落の宮中には、無感覺なる冷き石像を置かずして、呼吸し、言語し、動作して、現に生活し、溫暖なる顔に、微笑の恩波を湛へ、朗なる音聲は、其の唇頭より出て、慈悲の手は親して信徒の頭に接する者あり、幾千萬人の禮拜者は、眼前親しく此の活佛を拜す、其の幸福と満足とは、到底局外者の推想し能はざる所なり、實に拉薩府は市街にあらずして、一大伽藍なり、大喇嘛

(Grand-Lama) は是れ活佛なり、是れ大伽藍の本尊なり。

歐洲人にして、此の神聖なる拉薩府に到りしもの前後二十二人あり、悉く天主教の僧侶なり、其中フリアル、オドリツク (Friar Odoric) を以て、其の嚆矢とす、氏は西紀

拉薩府に
入りし西人

一千三百二十五年に此を通行したりしが、當時は大喇嘛なかりしと云ふ、次を、ゼシユイト派の宣教師アンドラダ氏とす、西紀一千六百二十四年印度より入り、此の國を経て支那に到り、又グルーベ、ドルビーユの二氏は、西紀一千六百六十一年、北京より西寧府を経て拉薩に入りたり、當時は第五世達賴喇嘛の時代にして、此の大喇嘛始めて達賴 (Dala) の尊號を得、佛の權化なりとて四方に喧傳せらし、大知識にぞありける。

二十有二人の中に、唯一人の英人ありき、其の名をトーマス・マンニング (Thomas Munning) と云ふ、氏が此の地に入りしは、テラー嬢が、此の市街近くまで來りし前、凡そ九十年なりき、マンニング氏は、二週間滞在したりしかど、不幸にして、此の無二の機會を、巧みに利用すること能はざりき、然れども、達賴喇嘛に謁見する殊遇を得て、吾人に興味ある報告を遣せり、是れ實に西紀一千八百十一年の十二月十七日の事なりき。

マ氏曰く、余は法王の宮殿の在る山の麓まで騎馬にて到り、プラットフォームに登りしが、數歩にして下乗せざるを得ざりき、此の所より喇嘛法王の謁見を賜ふべき

マンニング
氏の法
王謁見

應接の間に至らんには、遠くして又退屈なる登坂を躋らざるべからず、此は四百以上の段階よりなりしが、其の一部は岩石より成れる山中の石段にて、其の他は宮殿内の一階より一階に至る梯子段なりき。此の他、山に沿うて階段もなく、數歩間は行歩容易なる登りありき。遂に謁見所のある大なる「ブラットフォーム」に達し、此に暫時間休息して、贈呈品を整理し、然る後喇嘛の支那通譯官と談話したりき。

余は謁見所に入り、三度頭を地に觸れて、喇嘛法王に謁見することを得たり、然る後、貨幣及び美麗なる絹の哈達^{カダ}を手つから献上せり、次に余は帽を脱し跪坐して、法王の手を我が頭上に加へられむが爲めに、頭を差出せり、右の儀式了りて、法王の玉座近く坐を占めしに、僧官茶を出して饗せり、其の茶は極めて上品のものなりき、余が茶を飲み盡すや、否や、僧官は忽ち其の茶碗を取り去れり、喇嘛法王の美麗にして、且つ興味ある容貌、及び作法は、殆ど余の注意を惹く所となれり、喇嘛法王は當時七歳なりしが、教育行き届き、質樸にして、天真爛漫たる兒童なりき。余の視たる所に據れば、喇嘛の采丰は眞に好個の詩的にして、又裝飾的なりしが、活潑愉快なる態度を示し、其の愛嬌ある口元には絶えず微笑を漏らして、其の美しき顔面の全部を照せり

喇嘛法王の余を注視せる時は、特に其の愛嬌は温和ある笑を含めり、是れ余が恐るべき蓬々たる鬚髯を蓄へ、又眼鏡をかけて、相貌何となく喇嘛法王の可笑味^{オカケミ}を惹き起すに至りしことは疑を客れざるなり、當時彼れ余に問ふに、途中艱難辛苦に遭遇せざりしや否やを以てせり、余は直ちに對へて、曰く余は途中辛苦甚だ多かりしと雖へども、今日親しく慈眼に咫尺するを得たるは、光榮何物か之に若んや、此の光榮は既往の艱苦を償うて餘りあり、余は最早其の勞苦を忘れたりと、此の返答は大に喇嘛法王及び其の官人の歡心を博したるのみならず、余の全く一個の野人にあらずして、幾分か文雅の士たることを感ぜしめたり、斯くて、僧官は乾したる菓物を携え來り、土産物にせよとて賜へるなりとて、余が前に置かれ、余が從僕をして、之を携えて歸らしめき、余が喇嘛法王謁見せしときは、非常なる快感に打たれ、雲山萬里を隔てたる外國に在るの感覺を拭ひ去りて、全く本國に在るが如き思をなせりと。マンニング氏に次きて、此の神聖なる都府に入りし歐洲人は、佛人ハック(Heck)及びガベ(Chabot)の二人なり、此の兩人は、清國北京より來り、拉薩府に二ヶ月滞在したりしが、後遂に放逐せられたり、ハック氏は、愉快なる旅行紀に充分なる説明を加へ

サラット
チャン
ドラス
の
入府
氏

て出版せり其の紀行は、後にハヅリット(Hazlitt)氏之を英文に反譯したる、書中該都府の地圖を附せるは其の特色なり、兩人は西紀一千八百四十六年一月廿九日に此の地に到達せしが、其の最後の舞臺は稍困難なる旅行なりき、氏云いり我等と拉薩との間には唯一の山ありしが、これを吾人の曾て經驗せしもの、中にて最も峻嶮にして勞苦多きものなりき、西藏人、蒙古人は、大熱心を以て、此の山に登れり、其の由縁を釋ぬれば、此の靈山の頂に達するものは、其の誰たるを問はず、曾て行へるあらゆる罪業を消滅すと云ふに在りき、我等は午前一時に出發して、此の功德ある靈山の頂に達したる時は、未だ午前十時に至らざりき、山又山を越えて我等の大なる平原に入りし時には、太陽は殆ど西山に沒せんとする時なりき、而して右方遙に有名なる主府拉薩を望みたり、鬱蒼たる幾多の樹木は、青緑の壁と共に此の都府を圍繞し、扁平なる屋根を有せる、高さ白色の家屋、塔及び鍍金せる屋根を存せる無數の殿堂、タレラマ(Tale Lama)の宮殿の立てる、ブツダラ普陀落(Buddhalo)等、總て拉薩の概況、我等の雙眸に入れりと。

其の後三十六年を経て此の國に入りし者は、サラットチャンドラス(Sarat Chandra

第七圖



サラットチャンドラスの肖像

Dag)と稱する印度ベンガルの探検者なり、氏は印度獨吉嶺(Dayu Ling)より入りて、拉薩に旅行し、西紀一千八百八十二年に歸國せり、其の旅行紀は之を前者に比すれば記載の事項廣くして且つ詳かなり。

此の勇者の拉薩に入りし話は、頗る面白し、今其の要領を紹介せん、氏、今や拉薩府附近に進めり、非常に豊饒なるが如く視えたる平野を急行し、ダイパンディパン(Daipang)僧院を左に視、乍にして靈地の塔、及び閃々たる尖塔を眼前に望めり、此の地こそ、即ち氏が夢寐にも忘るゝと能はざりし所にして、此の大膽

なる冒險の目的物にぞあるなれ、廣濶なる平野の前に、靜かに横はれる靈地たり、隱秘學の本山たり、佛教法王の住居たる刺薩府は、忽ち目前に立てり、氏の當市の西門

に達せし時は、恰も午後十時なりき、氏は周到なる注意を以て其の着服を整へ、從者をして、佛教信者に擬して其の腰に飾帶を着けしめ、新來の法式に従ひて行列を正し、其の先導者の肩には、槍を横たへ、槍の先には小旗を翻し、獸類及び隨行員之に従ひて練り行き、氏は疲勞したりしかば、其後方にありて馬に騎して扣へたり。斯くてサラットチャンドラダスは、大膽にも不案内なる拉薩府の門に入れり、外市の主要なる街衢を通行せしに、幸にして一人も之を妨害するものなかりき、サラットチャンドラダスは、色眼鏡を懸け、其の態何となく疲勞せしが如く視えしかば、市中の遊惰者は頻りに之を注視し、又支那飲食店の門に立てる遊惰者は叫んで、曰く彼は病人なり、何そ斯る病人の多きやと、一行は兼て當市に天然痘の流行せるを知りしかば、故らに約半哩を迂回して、市の内門に行けり、茲には門番ありて、嚴に其の門内に入り來る新來者を監視せり、然れども、同行者は已に進みて、當地の中心點にまで到達したり、從者の一人は宿所を搜索し、他は悉く街側に整列したれば、往來の人々は不思議さうに其の來意を尋ねなどする折から、宿割のものも歸り來りて、暗黒なる「アーチ」の下にある不潔極まる通路を急ぎ、遂に旅宿の一室に投ずることを得

たり、是れ五月三十日の夜なりきと云ふ。

拉薩市街地圖の創作は、印度の探檢者エ、ケ(A. K.)氏の功績に歸せざるべからず、西紀一千八百六十五年、西藏政府は、歐洲人の當府に入り込むことを禁止せしを以て、英國の印度政府は、西藏出生の數多の測量家を準備して、此の土地の地圖を描寫せんが爲めに、ヒマラヤ山を越えしめたりき。

此の一隊の測量家の報告は、實に南部西藏に關する吾人の知識の基礎たるものなり、エ、ケ氏は此の首府に一年間滞在して、秘密に當市街を測量せり。

拉薩府の家屋は、外面白色にして、一見奇麗なれども、内面は極めて不潔なり、其の材料は、泥土及び日光に乾燥せる磚瓦及び石よりなり、宗門の色として、黄若しは赤色の顔料を以て、其の門戸及び窓を染めたり、室には採光孔を有し、床に置ける光澤ある香爐には、常に刺激性の烟を發する煎香を焚けり。

西方の近郊に、全部牡牛及び羊の角より成る奇怪なる家屋多し、牡牛の角は、光澤ありて白く、羊の角は、之に反して其の面粗にして黒し、此の無數の獸角を種々に結合し、各種の想像を逞うして、之を配列し、其の間隙には、灰泥を填充して、壁となせり、斯

の如き家屋は皆黒くして、市内の家の如く白色を呈せず、主要なる街衢は、廣潤清潔にして、數多の公園などありて、其の風景自ら人目を引くに足るも、町の端々、及び路次などは、實に視るに忍びざる程の不潔なり。

普陀落(Potal)の宮殿は、拉薩府の市街の入口の門より、約一哩の所にありて、美麗なる列樹路あり、此の宮殿及び本山大招商寺の周圍には、常に巡禮者の巡行ありて、其の間は、支那駐藏大臣の號砲によりて、午前四時に始り、同しく號砲によりて午後九時に終る。

大招商寺は、西藏開國の英主、即ち吐蕃王特勒德蘇隆贊(Sron Tsan Gampo)が、佛教信者たる其の妃の携帶せし珍貴の佛像を保存せんが爲めに、創めて建築せし最古の殿堂にして、市街の中央にある、極めて巨大なる建物なり、入口は東方に面し、前面には、牛毛、鹿牛及び羊の角を以て裝飾せる高さ四十尺に達する旗竿直立せり、重なる建物は三階よりなりて、黄金の板を以て其の屋根を葺けり、屋内は暗黒にして、三箇の長き廊下と、二個の十字形の廊下とありて、光線は中央の廊下の頭上の窓より來り、窓には硝子の代りに、透明の油布を使用せり、日光は唯此の窓によりて堂内に透入

するのみにて、測面には窓を備へず、本堂には、無數の寶石にて裝飾したる厚く重き十五枚の銀板を備へたり、唐の太宗は、吐蕃王特勒德蘇隆贊に與ふるに、文成公主と佛像等を以てしたりしが、其の佛像は實に宏大なるものにて、光耀尙ほ輝々たり、其の靈前には、毎日草花を手向けて、國人の信仰特に深し、建物の側面には、修道院、講堂、役僧の住家等許多の區分あり、又達賴喇嘛の爲めには、特別の一室を備へたり。

西藏の心臟たる拉薩府の實際の中心は、其の壁内にあらずして、却て壁外なる普陀落の宮殿にあり、數多の巡禮者は、大招商本堂内の大佛に草花を手向け、佛像の膝下にひれ伏して、一心に祈願を込め、難行を修めて、身軀の衰ふるを知らざるなり、又巡禮者は、佛像を景慕して之を仰き視ると雖へども、佛像の目は彼等を視ざるを奈何せん、然るに普陀落に趣きて、神聖なる丘陵の階段を登れば、光景一變して我を視、我が言を聞き、明かに我に幸福を與ふる所の、活佛の眼前に案内せらるゝことを得るなり。

次に示せるものは、珍らしき接待法に就きて、エケ氏の興味ある談話なり。

達賴喇嘛の禮拜者は、數千人ありて、一々之に接すること能はされば、特に富豪貴人

に限りて、一々簡短なる文句を演ずることあり。其の口調は、重くして、嘖聲なり。是れ其の成熟及び賢明の態度を表示せんが爲めに、殊更に練習に依りて得たる所なりといふ。達頼喇嘛は高さ六呎許の高臺上に坐禪し、赤黄色の普通の僧衣を纏ひ、其の手には、白赤黄緑及び青の總を垂れたる拂子を持てり。禮拜者は此の室に入れば、直ちに祈禱の時の如く、合掌して進行し、體を屈して、其の頭を高臺の縁につけ、心に念じて、其の願を懸くるなり。達頼喇嘛は直覺的に之を理解し、吉祥の兆として、絹布の一片を巡禮者の頭上に加へ、若しくは其の手を以て頭を摩するなり。法王より親しく頭を摩せられたるものは、至大の名譽且つ幸福として、人に誇れり。斯くて禮拜者は順次に東門より急ぎ出づといふ。此の時、達頼喇嘛の眼前に唯半分時を經過するを得たる者は極めて幸福なりとして殊に衆に誇稱すと云ふ。只富貴の人々は、特別に此の高臺に登るの許可を得ることあり。斯る輩は、達頼喇嘛の手に實際獨接する至大の幸福を受くる者なりとぞ。サラットチャンドラダスは、當時の達頼喇嘛より、特別の待遇を受けて親しく謁見したりと云ふ。其の時、達頼喇嘛は八歳なりきとぞ。氏が謁見せし當時の有様を述べれば大畧左の如し。

謁見室は、大凡八列に敷き詰めたる毛氈ありて、余は其の第三列に坐せり。大喇嘛の玉座よりは、殆ど十呎を隔て、少しく左に偏せり。室内は極めて靜肅森嚴なりき。役員は威ありて猛からず、寛容の風采を備へて、靜づくと左方より右方に歩み出て着座せり。是れ法王に次ぎて尊貴のものなりとぞ。玉座は東洋帝王の玉座に類似せる大なる聖壇にて、其の脚には獅子を彫刻せり。活佛たる法王は、八歳の兒童にて、其の上において、頭には黄色の僧冠を頂き、身には黄色の上衣を着し、吾人衆生の福を祈らんが爲めに合掌して坐禪せり。余は、此の法王の難有き加持を受けたりき。此の時、余は法王の容貌を觀んものと思ひて、數秒間御前に立ち止らんとせしに、穩かに余の背を衝きしものありて、之を許さざりき。

加持の式終りて、人々坐に就きければ、主席の執事は黄金製の茶瓶をとり、法王の金の茶碗に茶を注ぎ、四人の助役は、拜謁者の茶碗に茶を注げり。法王の茶碗を取りて、茶を喫する前に、一同謹嚴なる調子にて讚美歌を歌へり。次て我等拜謁者も茶碗を取り上げ、結構なる風味ある茶を飲みたり。其の後、主坐の大膳職は、法王の御前に米を盛れる金盆を捧げしに、法王は唯之に手を觸れしのみにて、直に之を衆人に分配

せり、余も其の一握を得て、之を手拭の一端に包めり、一同の讚美歌を歌ひし後に、此

(四〇)

第八圖



玉座に於ける喇嘛の圖

き、居士は、席次の第一列の中央より起て、法王は、觀世音菩薩の權化なることを陳へ、

の活佛
たる兒
童は、低
き不分
明の聲
にて讚
美歌を
歌へり。
右終り
て、先輩
たる尊
敬すべ

拉薩市の
大法會

無知蒙昧なる西藏人を濟度せし仁慈功德の宏大無量なることを頌む、最後に此の
居士は、此の法王の御前に進みて三拜の禮拜をなし、謹慎の歩調を取りて退却した
り、次で禮拜者一同退出し、法王も亦其の坐を退かれたり云々。
春季には、拉薩府に大法會ありて、各種の遊戯、輕業、射藝の競争、石投、綱渡り、假面踏舞、
及び宗教的行列あり、デバン僧院長は、此の際一ヶ月間西藏の王權を攝行し、國王の
禮遇を受けて、市街に臨めり。此の大法會あるときは、一般の犯罪者は特赦せられ、市
内一般に歡を盡せり、然れども、此の攝政王の下に、三十名の奉行ありて、攝政王を補
けて、鎖末なる犯罪をも厳しく之を檢舉し、重き罰金を科するが故に、幾多の人民は、
其の虐政に涕泣せり、此の科料法に依りて、該僧院は其の富を増加するなり。されば
拉薩府の住民は、此の怖るべき罰金を免かれんが爲めに、毎年其の期に臨めば、急に
白く其の家屋を塗れり、若し其の白色ならざる時は、不潔なりとて罰せらるゝの恐
あり、平常不潔なる拉薩市街も、年中唯此の時期のみは、掃除行届きて、頗る清潔なり
と云ふ。

此の大法會ある一ヶ月間は、遠近より來聚せる僧侶無慮三萬に達し、市内は其の服

色の爲めに黄變するに至る。此の僧侶の四分の一は壁内に寓せり、熱心なる信徒は、殿堂の長さを測量するが如き態度を以て、其の周圍を巡行禮拜し。婦女は、此の大法會の際に限りてのみ、大招寺内に入ることを許可せらる。市の官吏の先導せる嚴しき行列は、大招寺に到る途すがら一種の讚歌を唱へ、供奉の人々は、磚茶の少量などを狂奔せる群集中に分配せり。大招寺の内には、色彩燦然として、光輝人目を眩すべし、四百の佛像を奉安せり。就中最も神聖なる佛像の周圍には、數千人の善男善女膝行して謹恪なる禮拜をなせり。而して、夜中は數萬の燈火を點じて、煌々晝の如く、以て此の大寺院を照せり。

此の燈火器は、獸畜の脂肪を盛れる金屬製の壺にて、年中其の燈火を絶つことなし。此の脂肪は、巡禮者の供献するものなり、之に就きて面白き一話あり。

西藏國僻遠の地に、一人の貧しき寡婦あり、常に拉薩府に赴き、親しく法主の慈顔を拜せんと思ひしが、遂に巡禮となりて、拉薩府に來れり。然れども、市に到達せし時には、僅かの貯へも路用に遣ひ盡くして、佛に奉納せんにも、囊中の阿堵物全く竭きたれば、詮方なく、此の老婦は、他より、少量の獸脂を乞ひ得て、之を以て謹みて靈前に一

盞の燈明を供へたりき。然るに意はざりき。是の時法王親しく、其の場に出て給はんとは、法王は、此の老婦の供物に就きて、大に其の奇特の志を嘉納し、親しく懇切なる詞を給ひき。此の事實の遠近に達するや、一豪商之を聞き、自ら以爲へらく、一盞の燈明を供へたりし貧老の寡婦すら尙ほ斯の如くなれば、數多の供物を献納せんには、必ず法王と直接に親しく言語を交ることを得んと、即坐に此の豪商は、其の資産の饒なるに任せ、殿堂に趨きて、數噸の獸脂と數千の燈明とを献納せり。然るに法王よりは何等の感應もなかりしとぞ。

拉薩府は、西藏國中第一の製造工業の地なれば、紺屋あり、薰香の製造人あり、貴金屬の細工人あり、眞鍮の鑄物師ありて、此等の職工の製造人には、一々靈地の特産たるを表せんが爲に、神聖なる印章を捺せり。蓋し拉薩府は、全然宗教的都府にして、單に禮拜に委ねられたるものゝ如し、之を譬へば、拉薩府は奇妙に細工せられたる寶石を入れるべき小箱の如く、達賴喇嘛は生活せる寶石の如し。

然れども、此の主權者、此の活佛たる達賴喇嘛は、一方より之を觀れば、一種の捕虜に過ぎずして、纔に溫順なる運動をなして、其の時日を消費するのみ。其の年漸く長し

て世事に通ずることは、部下の喇嘛のみに喜ばざる所なり、故に其の死を必要なりとする時は、輒ち之を毒殺すること、彼等が慣用の手段なり。されば達頼喇嘛にて、老年に達せし者は至て稀なり、若し幸にして老年に達することあらば、其の現世の權力は、必ず他人の掌に歸せるものなり、而して、達頼喇嘛死する時は、屍躰は、防腐法に據りて之を處理し、其の顔には貴重なる寶石、及び黄金を以て裝飾を施すといふ、喇嘛の死後九ヶ月間は、法嗣たるべき少兒を全國に搜索し、適當の少兒を得るときは、

第九圖



達頼喇嘛の類書
頭目に於ける印章

之を以て衆生濟度の爲めに、佛即ち從前の達頼喇嘛の轉生せるものなりと稱唱せり、而して從前の實例によれば、其の少兒の兩親は、多くは極めて貧賤のものなり、此の撰拔せられたる少兒は、一定の年齢に達すれば、或る記號に依りて、混交せられたる前代各達頼喇嘛の箇人的所有物を示して、之を指摘し得るや否やを試験す、若し其の少兒、一物を指摘して、此は第何世達頼喇嘛のものなりと明言し得るときは、即ち此の小兒は、其の

第十圖



公文書の達頼喇嘛の捺印
捺印の章

の達頼喇嘛の轉生なりとして、試験に合格するなり、斯くて、合格者は、普陀落の宮殿に入り、茲に始めて、第何世達頼喇嘛と稱して、其の先代の如く、遍く衆人に禮拜せらるゝなり、是の如くにして攝政大臣は、幼弱なる達頼喇嘛を擁立して、其の權力を鞏固にせり、喇嘛の年漸く長じて、大臣の權力を阻害する時、即ち新に悲劇の來るまでは、喇嘛の命の車は容易に廻轉することを得るなり、

之を要するに、此の靈地は、管に形而上的の不可思議、及び佛像禮拜、假面舞者の地たるに止らずして、實に罪惡を封ぜる伏魔殿なり、普陀落の山も、其の道路も、其の絹布の幡幢も、其の神聖なる祭壇も、總て是れ膿血を以て汚されたるを視るのみ、而して年所を経るに従ひ、數人の轉生者一時に現はれて、眞偽紛然たることありしかば、清の乾隆帝は、轉生説の妄と、其の弊とを看破し、金瓶を拉薩の大招寺と、北京の

雍和宮とに備へ、抽籤法を以て達賴喇嘛、及び胡士克圖を定むるに至れり。之を活佛の籤びきといふ。胡士克圖とは、達賴喇嘛に次げる大喇嘛なり。

(四六)

第七章 西藏鎖國の理由

西藏人は、外國人(Pe-yin)を拒みて、一切國內に入ることを禁ぜり。獨り印度の學者は能く西藏人に扮して、此の國に忍び入ることを得べしと雖ども、是れとても眞に猷身的事業にして、恰も虎穴に入るの思あり、マンニング氏の此の國に入りて、直ちに國外に護送せられし以來、歐洲人にして當國に入込みし冒險者は、多しと雖ども、何れも非常に冷遇せられ、如何に剛毅に、如何に術策を施こし、も、終に其の功を奏したるものなかりき。輒近に至りては殊に甚しく、其の門戸を鎖し、國內に入りしが爲に、慘刑に遭ひたる人あるは著名なる實例なり。西紀一千八百九十九年にヘンリー・サベージ・ランドル氏(Henry Savage Landor)の如き、又西紀一千八百九十四年六月にラインス(Rhins)の如き、何れも殺戮せられ、又西紀一千八百九十八年九月宣教師ビ

喇嘛及び
支那人の
猜忌

ーター、リジンハート氏(Peter Rijnhart)は、行方不明となりぬ。西藏人が、斯く外人を排斥する理由は如何。爰に粗、西人の説を紹介せん。

二人あり晝夜眠らずして西藏の國境を監視せりといはゞ、讀者は直に其の中一人は、支那人にして、他の一人は喇嘛なることを知らむ。然り、喇嘛は其の宗教の專賣權を守護し、支那人は其の商業上に自己の專賣權を守護せり。喇嘛は人民の信仰を維持せんことのみ汲々として、開明の思想を輸入することを喜ばず、殊に其の權力に抗抵するが如き競争的の信仰の代表者を入ることを許さざるは勿論なり。旅人及び宣教師に國の門戸を開放することは、我が權力の所依たる方便を破潰し、我が進路を切斷する害物なれば、之に向て激烈なる反對を試み、外敵を放逐し、緊しく其の門戸を閉鎖することは、彼の自護的本能と謂ふべきなり。

支那人は、其の商業上の關係の外に、政治上の問題あり。支那人は其の才幹遙に西藏人の上にあリ、且遙かに溫和なり、或人の説に據れば、西藏の實際の主人は支那人なりと、之を證明する事實は頗る多し、實に支那人は一旦緩急ある場合に至らば、忽ち出て、毫も油斷することなく、其の警戒を嚴にすれども、平時に至りては、常に黒幕

の中に隠れて、與り知らざる者の如し。支那官吏の外人に對するや、反覆極りなく、又不誠實なり。彼等は、旅行者に旅行券を與ふるに臨み、曰く國中到る處、卿の遭遇する人々は、卿の言ふ所に従ふべし。萬一のことあらば、刑法は卿を保護し、我が權力の有らん限りは、卿を助くべし。卿請ふ安んぜよと、斯くて領事よりの請求書の末に公然左の如き奥書を認め

大英欽命駐劄 管理本國通商事務領事官

爲給發護照事、照得天津條約第九款內載、英國民人准聽持照前往內地各處遊歷通商、執照由領事官發給、由地方官蓋印、經過地方、如飭交出、執照應可隨時呈驗、無訛放行、僱船僱人裝運行李貨物、不得攔阻、如其無照、其中或有訛誤、以及有不法情事、就近送交領事官懲辦、沿途止可拘禁、不可凌虐等、因現據本國教士姓名稟稱、欲由(地名)前赴(地名)遊歷、請領護照、前來據此、本領事查該人素稱妥練、合行發給護照、應請

大清各處地方文武員弁、驗照放行、務須隨時保衛、以禮相待、經過關津局卡、幸毋留難攔阻、爲此給與護照、須至護照者

右照給教士 收執

一千八百八十四年五月初二日

光緒十年四月初八日

給

大清欽命分守 整飭海防兼管水利兵備道加印限壹年繳銷

之に捺印し、親切の宣言をなして、之を旅客の手に交附すると同時に、又他の書類に捺印して、急使を出して、之を發信すべし。旅客が其の親切を謝して、踵を旋す瞬間に、彼は部下の人民に向て、此の旅人を防禦すべきことを傳達せり。故に旅客が、其の背を轉するや、其の通路は、各種の障害物を以て充滿せり。此の大官人は、拉薩府に其の衙門を置き、國內の主要の都市には、其の僚屬を派遣駐在せしめたり。印度方面にてさへ、該國の門戸は、總て兵士を以て嚴重に守護せらる。外國と條約を締結する事も、亦此の大官人の掌中にあり。此の大官人は、國中を貫通せる商業上の通路を通行する人々に對して、特許狀を與へて、往來人の調査に便せり。此の大官人は、又人民を侮蔑すること甚だしきに拘らず、西藏人は、殆ど之に臣從せるものゝ如し。故に外國人

にて、此の國に旅行せんとするものは、西藏人と共にするよりも、支那人と共にするを以て最も便利なりとす、護衛として伴ふときは、支那人の一人は西藏人の三人を伴ふに匹敵せり、同一の理由にて、若し支那人の護衛にして、途中反抗を試みることをあらんか、之を屈服せしめんには、非常の困難を感すべきなり、かくの如く、外國人を嫌忌する此の國にありては、外國人たるもの、争てか其の自由なる行動を遂ぐることを得んや。

外國人には、少しも權利なし、外國人は單に優遇せられざるのみならず、一朝發見せらるる時は、忽ち闖入者として取扱れ、暫時も留まること能はざるなり、此等の事實は、古今の旅客の皆實驗せる所にして、其の物語中、歴々之を證明せり。

余は、支那管轄の此の議論多き問題に就きて、正當なる判断を下すことに躊躇せり、此の國の政權の出づる所全く一途にあらざるは、其の例證枚舉に暇あらず、ウワツデル (Wardell) 氏著ヒマラヤ山中と題せる新刷の美しき書中に、左の記事あり。

西藏人が、外人排斥の政策は、輒近一層激烈となれり、支那人は自ら之を拉薩府に於ける喇嘛僧の行爲に出でたりと主張すれども、此の政策の根底をなせるものは支

那人にして、喇嘛は其の機械なるに過ぎざるとは、毫も疑を容るべき餘地なし、元來西藏人は、歐洲人に對しては、不親切なるものにあらず、喇嘛は該國の主要なる商賈人として、支那人より束縛せらるゝを嫌へり、之に反して、支那人は、自己の手中に西藏の市場を專管し、併て茲に其の政權を樹立せんことを希望せり、故に機會のあらん限り、西藏人を教唆して、反抗を外人に試み、拉薩府内に、其の權力を振はんとせしことは、ハック氏の此の國に入りし時より、既に明に其の鋒鏗を示したり云々。

前に清國北京に駐札せし、前の北米合衆國の公使にして、本國にありては支那及西藏文學者として、此の禁秘國の輓近の探検者中、最も傑出したるロックヒル氏 (W. W. Rockhill) は、其の著蒙古及び西藏旅行日記中に、左の一節を記せり。

西藏に於ける支那人は、外國人を世話して、爲に此の國の上流社會、即ち喇嘛の人望を失ふが如き所行を爲すことを好まず、其の權力を用ひなば、一二の外國人を保護するが如きは、随分彼等が爲し能はざる所にあざれども、奈何せん斯る事は、毫も彼等を益する所なし、若し支那人にして、其の必要を認めたる場合には、西藏に於て其の主權を固守すること、決して其の能はざる所にあらず、何となれば、西藏に於け

る支那人の位置は、其の君主權を有せず、其の官吏は存留せる清國人のみを支配するに止まるものと謂ふこと能はざればなり。

康熙帝 (K'ang-Hsi) 乾隆帝 (Ch'ien-Lung) 以來の出來事、拉薩府及び印度境界附近の輓近の事件に徴しても、歴史は明かに支那の西藏に於ける主權を證明せり、然れども、支那は腕力に依りて、西藏を經營することを願はず、是れ縱令干戈に勝つも、其の勞を慰むるに足らざればなり、今日西藏にて、支那が其の主權を保存することを得たるは、外交政界と、外交事務に於ける優勝の知識と、喇嘛を慰撫すること等に因るのみ云云。

支那勢力
の衰微

他の一方にては、余は同時代に、拉達克より西藏を通行したる、第一支那聯隊陸軍中佐ボーウエル (Bower) の説に據りて、大に便利を得たり。

中佐曰く、余が所感に據れば、西藏人は全然外國人と商議を要する場合には、常に支那人の後に隠れて局を了せんことを望むが如し、然れども支那の保護權は、極めて曖昧なり、若し支那人にして、真に西藏に對して、其の權力を有するもの、即ち西藏を以て支那の一部分なりとせば、天津條約に據りて、英國人は旅行券を携帶して、容易

に此の地に行くことを得べし、然れども、支那人は、西藏に於ける有力なる旅行券を發行するの位置にあらざること、何人も能く知悉する所なり云々。

以上の議論は、何れも英米人の所見にて、幾分の眞理を含有すべきこと勿論なれども、西藏領國の大理由は、蓋し斯る細事のみに基づけるにあらずして、國際的關係に出でたること明かなり、即ち英人が西金を占領せし事實は、實に其の主因たること固より辯ずるを俟たず、之に關する詳細の事項は、更に端を改めて公けにすることあるべし。

第八章 商業輸出入品

支那人が嘗て西藏の政治上に其の權力を有したりしは固より、明白なり、尙彼等は其の商業上にも大に興味を有せしこと疑なし、元來拉薩府は此の國唯一の商業地なり、喇嘛僧は俗人よりも、一層盛んに商業を營み、男子にまれ、女子にまれ、其の閑暇には、専ら商業に従事せり、但其の商業は、未だ進歩せずして、今日尙物品交換を主と

せり、拉薩には貨幣あれども、全國一定の貨幣制度なし、現下の國情は、國內は各州に分れ、各州は又各部に分れて、其の中或は拉薩政府の下に屬し、或は直接に支那監督の下に屬し、或は全く獨立せるものもあり、例へば著名なるゴロツクス(Golok)の如きは、何れにも服従せずして、定期に其の隣國に侵入して掠奪することを務とせり。是の如く全國統一の規模を缺き、各地方の住民互に敵愾心を抱き、攻伐起伏常ならざる不安靜不確實の世には、物品交易の外、真正なる貿易は決して行ふこと能はざるあり、隨ひて自然の儘なる金銀塊及び印度貨幣、タンカ(Tanka 英の六ペンス)と稱する銀貨は國內一般に流通すと雖ども、或る商品の如きは、物價の基本として採用せられたり、例へば長靴の一足、磚茶の一斤、犛牛の尾及び一定の長の布の如し。

第十圖



カンマの面

西藏は寒氣の酷烈なる外に、一般に山地に屬し、礫礫の地多くして、農業振はず、隨ひて其の食料品の多分は、之を他國に仰かざるを得ず、但此の地の富饒なる産物は、此の需用品を購買するに充分なり、即ち此の地の産物にて、國外に輸出する重要なものは、黄金、土耳其玉(Turquoise)食鹽、礪砂、犛牛、麝香の如き實

に無盡藏の富源にして、單に國境を接する隣國のみならず、雪深き通路を辿り、嵯峨たる岩石を攀ぢて、遠隔なる國民の商品をも吸收する勢力あり、是の商品に對して、國外より輸入するものは、大略左の如し。

蒙古人より柔皮及び馬具、支那人よりは茶、絹及び鐵器、西金(Silkim)及び不丹國(Bhutan)よりは米穀及び煙草、印度よりは、幅廣き上等羅紗、藍、砂糖及び香料を輸入せり、近頃は我國の雜貨も廣東、印度等の商人の手を経て少しく輸入せられたり。

支那人は、此の國の商權を主宰し、旅行券を看守し、各地より來る商品に對して、壓制的に關稅を課し、場合に依りては禁制的の重稅を課することあり、支那人は、西藏貿易の二大重要商品たる茶と絹との專賣權を有せり。

西藏人は茶を消費すること夥たしく、蒙古よりは數千の駱駝に駄して、チャン地方よりは一層多數の犛牛に駄して無量の茶を輸入せり、故に此の國を貫通する公道を茶道(Tea road)と云ふ、支那より輸入する茶は、其の質至つて悪く、特に佳品なりと稱するものにて、吾人の飲用するものに比すれば、極めて劣悪なり、其の製方は葉柄と共に茶葉を壓窄して固めたるもの、即ち磚茶にして、其の大きさは大小種々あり、

第二十圖



- (一) 瓦鑪製の茶瓶
- (二) 梳支那梳及容器
- (三) 磚茶
- (四) 銅鍋(青海地方の)
- (五) 銅の湯沸(T'ashih'amp)
- (六) 糝粉の囊
- (七) 木製の「バタ」容れ
- (八) 茶の攪拌器
- (九) 茶濾器

其の小なるもの、即ち通常のものと雖ども凡そ八「ポンド」の重野を有せり、斯く極めて粗悪なる茶なれども、西藏人は之なくしては一日も生活すること能はず、茶の煎汁に「バタ」及び大麥の粉(西藏にては之を糝粉(Tsamba)と云ひ、印度にては之を「Butto」と云ふ)を混和したるものは、實に西藏人の日常重要な食物なり。

各戸の家婦は、終日沸騰せる茶釜を擁し、或る地方にては、常に茶の煎汁を用意せり、煎汁を作るには、數時間曹達を加へて茶を煮、之を濾して其の液を保存し、新に茶を煎するに臨み、此の煎汁の少量を加ふることあり、普通の煎茶法は大略左の如し。

先づ磚茶の一握を革の囊中より取出し、之を釜中に入れ、臭氣ある「バタ」を加へ、凡そ十分時之を煮沸し、更に之を濾過して木管中に入れ、上下に動く木材の圓板を有する棒にて之を攪せ、最後に斯く調理したる飲料を碗に注ぎて飲むなり。

西藏人は、其の濶大なる衣服即ち羊皮製の着服の褶の中に二三の碗を藏せり、又麥粉即ち糝粉を入れたる囊を有せり、是れ我が嗜好に應じて、茶汁を濃くせんが爲めなり、碗には、再三茶汁を盛りて之を飲み、滿腹するに至らざれば止まず、而して此の碗を再び懷中する前には、必ず奇麗に之を舐め、決して洗滌することなし、其の脂切

りたる手指は、蓬然たる毛髪に摩り附くるか又は其の寛濶する袍に堅横十文字に塗り附くるなり、故に其の衣服は、一種の光澤を發し、臭氣堪ふ可からず、而して富める者も、貧しき者も、等しく此の一碗を以て、日常の食器とするなり、碗は赤き木にて製すれども、中には銀を以て其の縁を取り、非常に裝飾を施したるものありて、其の價二三十磅に上るものあり。

茶の商賣は加速度を以て進行し、幾分か強賣をなす傾あり、支那の官吏は、其の部下を強迫して、之を買はしむ、ロツクヘル氏は、此の國の人士にして、其の俸給の代りに茶を受取るを見たると云へり、是の如くして支那の歳入の多分を占めたり、斯くて印度方面よりは茶の輸入を禁止したれば、支那茶に向つて競争するものは一もこれあることなし、若し此の強賣と禁止となくんば、印度茶は直に入りて西藏の市場を壓倒し、支那より來る廢物を排擠して、直ちに其の位置を奪ふに至るべし、印度よりは距離近く、隨ひて運搬費も比較的輕少なり、獨吉嶺より拉薩まで、テレブラ(Telap-ト)を通行すれば僅に三週以内の旅程なれども、支那の境界よりは、六ヶ月を要し、剩へ其の通路は高低甚だしき險道にて、摩牛の隊商も其の進行至つて緩慢なり、斯の

支那茶の強賣と其の運命

如き不便あれば、西藏人も早晚必ず從來の迷夢を悟り、國民舉りて支那茶を廢止し、廉價にして上品なる印度茶を嗜好するに至るべし、されば、支那茶專賣の運命も、行末甚だ覺束なしと謂ふべし、支那人が外國人の入國を氣遣へるも、強ち無理ならぬことなり、而して、其の警戒の周到なるも、亦敢て驚くに足らざるなり、故に支那人の商業を脅すには、他の方面より茶を輸入することは是なり、是れ實に支那の西藏貿易に與ふる三十棒なりと謂ふべし。

絹綿布

又商品として絹布及び綿布あり、綿布は廣く用ひらる、皆支那より來れり、絹布は其の需用極めて多し、殺生禁斷の佛法の感情は、深く西藏人の頭腦を支配して、親しく養蠶することを得ざれば、支那は其の缺點を補へり。

哈達及び賄賂

此の國の儀式上、哈達(ハダ)と稱する絹布を用ひ、社界交際上、必須缺くべからざる媒介物として承認せられたり、總ての交際には、此の哈達を送り、又之を受け、之を交換するは、名刺、熨斗、水引を用ふる我國の習慣の如し、朋友は朋友に之を送り、客の訪問には必ず之を贈り、婚姻をなし、或は或る事項に付きて互に協議を要する場合に、其の結納若くは約束の徴憑として之を送り、時としては手紙の包みに之を用ひ、

遂に喇嘛の埋葬場に柩を導く所の挽綱として之を採用するに至れり。哈達は、白色又は淡青色の長方形の絹布の一片にして、極めて薄く、地合は殆ど紗の如く、其の周縁には褶襞をなし且ほつれたるは、ハンカチーフに似たり。其の地質は、大小によりて異なり、而して祝意を表するもの、詣を呈するもの、皆悉く之を用ふる事、宛も我國にて熨斗、水引を用ふるが如し、但熨斗水引は、他の物品に添ふるものなれども、哈達は單獨に之を用ふるの差あるのみ、故に此の地に旅せんとするものは、必ず先づ此の絹布の各種を準備して、危急の場合に應用せざるべからず。此の儀式的習慣にして、單に哈達の進物にのみ限るものとせば、西藏の旅行も幸福なりと雖ども、茶碗の如き日用品は勿論、天幕の類に至るまで、生活上必要なるものにて運搬し易きものは、一切之を携帶せざるを得ず。又途中は、各都市の會長より、天幕に住する轉住民に至るまで之を訪問して、夫々佳良なる禮物を呈せざるを得ず、而して其の返禮として、對等の物品を得ることは固より覺束なきことなり。會長より物品を贈らるゝことあるも、至つて輕少なるものなり。又凡そ此の國の官吏には、必ず賄賂を贈らざるべからず、旅行者の携帶品には、必ず進物用と云ふ文字を記入

すること、最も必要なる條目たり、讀者の想像するが如く、斯の如き賄賂の受授は、一定の度を越えて進歩すること能はざるなり、猜忌深き狗は常に旅行者の跡を監視せり、其の理由は何ぞ。西藏國の富は、之を二箇所に吸收せり、即ち第一は無數の暗渠と開放せる堀割ありて、飽くことなき喇嘛の寶藏に注入し、第二には、國境を越えて、支那の大金庫に注入せり。外國人は、其の流を酌むこと能はざるを以て頗る遺憾とせり。西藏の道路は甚だ險惡にして、平地と雖も寧ろ之を足跡と稱すべき程なり、今國境より首府拉薩に達する主要なる道路を擧ぐれば、第一官道即ち四川省打箭爐より、裡塘巴塘を経て、拉薩に至るものにて、長さ九百三十五哩あり、駐藏大臣の往復、達刺喇嘛の北京朝貢等、此の道路に由る。第二は、甘肅省西寧府よりするものにて、之を北道と稱す、其の長さ八百九十哩あり、此の兩路を以て支那交通の孔道とす。又北の方は羅布泊 (Lob-Nor) より、西の方は拉達克より、南の方は泥泡耳、西金不丹の諸國よりする小路ありて、拉薩府に輻湊せり。

遂に喇嘛の埋葬場に柩を導く所の挽綱として之を採用するに至れり。哈達は、白色又は淡青色の長方形の絹布の一片にして、極めて薄く、地合は殆ど紗の如く、其の周縁には褶襞をなし且ほつれたるは、ハンカチーフに似たり。其の地質は、大小によりて異なり、而して祝意を表するもの、諂を呈するもの、皆悉く之を用ふる事、宛も我國にて熨斗水引を用ふるが如し、但熨斗水引は、他の物品に添ふるものなれども、哈達は單獨に之を用ふるの差あるのみ、故に此の地に旅せんとするものは、必ず先づ此の絹布の各種を準備して、危急の場合に應用せざるべからず。此の儀式的習慣にして、單に哈達の進物にのみ限るものとせば、西藏の旅行も幸福なりと雖ども、茶碗の如き日用品は勿論、天幕の類に至るまで、生活上必要なるものにて運搬し易きものは、一切之を携帯せざるを得ず。又途中は、各都市の會長より、天幕に住する轉住民に至るまで之を訪問して、夫々佳良なる禮物を呈せざるを得ず、而して其の返禮として、對等の物品を得ることは固より覺束なきことなり。會長より物品を贈らるゝことあるも、至つて輕少なるものなり。又凡そ此の國の官吏には、必ず賄賂を贈らざるべからず、旅行者の携帶品には、必ず「進物」と云ふ文字を記入

すること、最も必要なる條目たり、讀者の想像するが如く、斯の如き賄賂の受授は、一定の度を越えて進歩すること能はざるなり、猜忌深き狗は常に旅行者の跡を監視せり、其の理由は何ぞ。西藏國の富は、之を二箇所に吸收せり、即ち第一は無數の暗渠と開放せる堀割ありて、飽くことなき喇嘛の寶藏に注入し、第二には、國境を越えて、支那の大金庫に注入せり。外國人は、其の流を酌むこと能はざるを以て頗る遺憾とせり。西藏の道路は甚だ險惡にして、平地と雖も寧ろ之を足跡と稱すべき程なり。今國境より首府拉薩に達する主要なる道路を擧ぐれば、第一官道即ち四川省打箭爐より、裡塘巴塘を経て、拉薩に至るものにて、長さ九百三十五哩あり、駐藏大臣の往復、達刺喇嘛の北京朝貢等、此の道路に由る。第二は、甘肅省西寧府よりするものにて、之を北道と稱す、其の長さ八百九十哩あり、此の兩路を以て支那交通の孔道とす。又北の方は羅布泊(Lob-Nor)より、西の方は拉達克より、南の方は泥泡耳、西金、不丹の諸國よりする小路ありて、拉薩府に輻湊せり。

第九章 喇嘛教の起原及び發達

喇嘛教は、西藏特有の佛教なり、多神教たる印度教の形式に依り、花を以て覆ひ、寶石を以て之を飾りたるものなり。

喇嘛とは
何ぞ

喇嘛とは、優勝無上の義にして、西藏語なり、故に其の適當の意味より云へば、僧院又は高位の僧侶に應用すべきなり、然れども廣く僧侶全般の稱號として用ふるに至れり、固より宗教の名稱にはあらざれども通常の慣用に從ひて、本書にも喇嘛教の文字を用ふべし。

喇嘛教の
起原發達の

喇嘛の起原は甚だ古く、大約千年の昔にありしか、幾多の變遷を歴來りて、遂に今日の發達をなし、其の間に顯著なる七階段の時期を経たるものなり。

第一期
起源

喇嘛の起源は、西紀六百三十八年より、六百四十一年間にありて、唐及び泥泡耳國より、二皇女の此の國に來り嫁せし時より、始めて佛の名及び其の名聲は、此の雪深き王國に入りしなり、是の時は、佛の寂滅後凡そ一千一百年を経過せり、當時の國王特

第二期
巴特
喇嘛
巴特
喇嘛

勤德蘇隆贊 (Dron Tshan Gampo) は、其の二妃を安慰せむとの目的を以て、三箇所の佛教地より佛書を輸入し、教師を聘し、又莫大の費用を投して、壯麗なる宮殿を建立し、此に二皇女の持參せる佛像を奉安せり、此の殿堂は拉薩 (Lhasa 赤地) に建築せり、Lhasa は其の後轉訛して Lha-sa (靈地) となれり、王は又印度に留學生を派遣し、數年間滞在せしめて、經典を研究せしめ、兼て靈地を巡拜して、已に發達せる佛教の神髓を吸收せしめしが、此の留學生は數多の典籍禮拜の器具等を齎らして歸國せり、留學生は歸國後、其の修學せる梵語に基きて、アルハベットを作り、爰に始めて西藏文字成りしかは、西藏語を以て許多の經典を反譯せり、是を喇嘛教發達の第一期とす。

然れども、新來の宗教は、此の國の往昔より存在せる、幽鬼崇拜宗より激烈なる反對を受け、凡そ一百年間は、其の進歩極めて遅々たりき、新舊兩宗旨の間には常に衝突のみありて、互に相憎悪したりしが、佛教の宗旨は、靜穩柔和なれば、此の有害なる幽鬼を辟易せしめ、其の犠牲たる恐怖心を一掃せんには、全然無勢力たりしなり、此の如き状態は、凡そ一百年間繼續せり、斯く微弱にして、殆ど一國の宗教と稱するに足らざる有様より、一躍して國民の信仰を得て、國中一般に傳播するに至れり、さ

れば、幽鬼派も亦奮然として起ち、大に抗争を試みたれども、大勢の趨く所、復た奈何ともすること能はず、漸次に佛教對幽鬼奉信の世態は、一變して佛教は幽鬼信奉派を吸収して、之を同化し、全く新面目を開くに至れり。故に其の宗教は之を嚴正に云へば、純質たる佛教にあらずして、印度教を混ぜるが上に、更に西藏固有の幽鬼崇拜の分子を交へて、所謂今日の喇嘛教とはなれるなり。是れ喇嘛教發達の第二期にして、研究上興味多く最も必要なる部分なりとす。而して、其の是に至りし因由を尋ねんか、吾人は先づ西藏國に於て、其の名佛菩薩と共に高き、巴特瑪織巴幹師(Padma-Sa-mpharn)の事蹟を知らざるべからず。師は克什米爾(Kashmir)の境上に住したる有名なる印度學者なりき。師は當時の西藏國王に聘せられて、西紀七百四十七年、西藏國に到着せしが、其の雷名は夙に西藏國に轟きしを以て、國民は雙手を舉げて、氏の來着を歡迎せり。西藏國王は、此の學者の畫策盡力に依りて、今尙不人望なる佛教の勢力を興起せんとするにありしが、王の企望空しからず、師は其の天稟の卓越せる意識と、萬事を處理する熱心とを以て、佛教の布教に全力を注げり。師は全國を行脚し、務めて外觀の美を裝うて、愚民を眩惑し、呪文を唱へて幽鬼の征服を公言せり。され

ば之に關する奇談も亦尠からず、左の一話の如きは、固より荒誕に屬すと雖ども、亦以て當時の状態を推想するに足れり。

師の幽鬼征服を標榜して行脚するや、一幽鬼は頑固なる抵抗をなし、兩山の峽間に氏を壓殺せんと試みたり。然れども、師は纔に高飛の手段によりて危難を免かるゝことを得たり。又他の幽鬼は、金剛(Diamond)即ち降魔杵と稱する武器を雨霰の如く、雪中より擲ちければ、氏は悉く積雪を融解して、湖水となしぬ。幽鬼は之を逃れんが爲めに湖水に投げければ、師は又湖水を沸騰せしめたり。幽鬼は骨肉共に糜爛するに至りしかど、尙ほ出て來らざれば、師は、金剛を投じて、幽鬼の眼を刺し通すかと見えしに、幽鬼は忽ち湖水を出で、猶ほ生命の存することを云ひたりき。又一日精靈は、師を苦めんが爲に、大なる白色の健き犛牛に化して、此の聖人を乗せしが、忽ちにして此の聖人は、獨り飄然として天に登りしに、犛牛は恍惚として、自ら其鼻と頸と脚とを結束せられて動くこと能はざりしが、やがて白き絹布を纏へる美少年に變じ、再び生命の存在を申告せり云々。

巴特瑪織巴幹師は、遍く國中を巡歴して、斯の如き奇蹟を演じ、大自在力を現はしけ

れば、其の周圍には、忽ち無數の弟子の群集し來りて、教を請ふに至れり。師は幽鬼派を拒斥して、之を撲滅するが如き、過激にして人心に逆へる過誤を、金剛即ちなさずして、却て之を利用し、巧に之を同化して、其の壘壁を撤せし降魔杵のめたるは手段の巧妙なること、恰も我が國の僧侶が、神道を利用し、て、垂蹟兩部の説を唱へたるが如し。師は幽鬼派僧侶の生命を救助し、自ら恩を賣りて、其の感情を損はずして、彼等をして自ら進んで、佛敎を採用するの有利なることを理解せしめ、從て人民をして之に歸依するに至らしめし所の秘計妙策は、着々其の効を奏し、古來幾百千年間人心に固着せる信仰を保存し、同時に僧侶の干涉の有益なることを説き、其の西藏國に在ること、僅かに二ヶ年にして、今日の喇嘛たる僧侶の秩序を整理し、初めて僧院を建設せり。其の寺院は拉薩府の東南凡そ三十哩の所に在るサムヤス(Samye)に於ける寺院にて、當時の建物の一部は、一千五百年を経過せる今日尙ほ現存せり。此の建物は國內所有建築物中最も舊く、其の由緒も亦是の如く尊重なるものなれば、政府より殊別に保管せられたり、堂内數多の佛像及び神聖なる器具は、悉く黄金より成れりと云ふ、西藏

第三十圖



金剛即ち
降魔杵の
圖

政府の如きは、此の寺院を以て、一種の銀行の如く思へりとぞ。巴特瑪繖巴幹の勢力に由來せる、珍らしき遺物を藏せる、此の寺院の斯く永久に保存せらるゝを見は、人民の信仰の確乎として、根底深きこと亦知るべきなり。巴特瑪繖巴幹二拾五人の弟子を有し、教法の外に、各種の事物を教授せり。彼は其の事業の計畫をなすに方りて、常に厚く國王に扶持せられたれば、忽ちにして數多の寺院勃興するに至れり。斯くて、師は功成り各遂けたれば、更に同様の勝利を得んが爲めに、他國に向て西藏國を出立せり。其の送別は頗る盛にして、數萬の群集は、此の聖師に別を惜まんが爲めに、遠近より來りしに、師の頭の周圍には、後光の虹霓起り、ハロ狀をなして、遍く十方を照し、極樂より迎の車は、空中を馳せ來りて、徐に師を乗せて去れり。群衆は眼を張りて之を凝視し、聲を放ちて泣けり。此の聖人及び其の隨行員の天に登りし後は、彗星及び燦爛たる星の如き光芒を遺したり。斯く確乎たる基礎の上に建設せられたる喇嘛敎は、漸次に盛大強固となりて、學生及び學者の四方より笈を負うて、西藏に遊學するもの頗る多きに至れり。是れ國王の獎勵大に至れりしとは云へ、巴特瑪繖巴幹師盡力の効に歸せずんばあらず。佛敎

の勢已に是の如くなれば、印度の書籍は益々反譯せられ梵語と西藏語との字書も出版せらるゝに至れり。然れども、此の社界の反面には、不平反亂の徒なきに非らず、幽鬼崇拜派の代表者たる此の國固有の僧(Bon)は、喇嘛のために其の地位と權力とを奪はれたるを恨めり、又唐より來れる純然たる釋徒は、佛法と魔法とを調和せる西藏佛教の外に立て、其の孤壘を維持せり。斯の如くして喇嘛教發達の第二期を經過せり、此の間凡そ一百五十年なりとす。

第三期
朗達磨王
(Lang ka
Tsun)の
破佛

第三期は西紀八百九十九年以來の西藏破佛時代を云ふ。喇嘛の保護者たりし當時の國王は、其の兄弟朗達磨Lang ka Tsunの爲に弑せられて王位を篡はれたり。朗達磨王は、喇嘛教を惡むこと甚たしく、之を根底より殲滅せんと欲し、三ヶ年間にして殆ど國內の殿堂寺院を破却し、經典を焼き棄てしが、後佛法信者に暗殺せられて、其の命を隕せり。一夜身を踏舞者に扮せる一人の喇嘛あり、黒色の馬に跨り、弓矢を濶大なる衣服の裏に隠して、拉薩府の門前に來り、馬より下りて、宮城前にて舞踏せしに、其の舞踏巧妙なりければ、遂に國王朗達磨の御前に召されて、視しく謁を賜ふに至れり。其の時舞踏者は、突然躍り出て、王の佩へる劔を奪ひ取りて、之を弑せしかば、宮中は上を

第四期
アチーサ
(Atisa)の
宗教改
革

下への騷擾に乗じて暗殺者は殿中を逃れ出て、前に乗り放したりし駿馬に鞭打ちて遁れ去り、賊は最近の河流に駆け込みしに、兼て煤烟を以て黒く塗りたりし馬は河を渡るの間に洗はれて白馬に變じ、全く別人の如くなりしかば、追騎の目を掠めて巧に逃れ去ることを得たり。喇嘛の教徒は、其の暗殺者を以て、宗門救済の慈善者と認め、之を聖列に加へたり。斯くて佛教は曾て失ひたる勢力を回復して、再び宗門の繁盛を見ることを得たり。此を喇嘛教史の第三期なりとす。

其の後凡百年を經過し、僧侶の數も増加して其の資財も豊富となり、隨ひて寺院の建立處々に勃興して、大に佛教の繁盛を來し、が、西藏國民の固有なる慍悍の氣質は、何時しか消耗して、卑屈忍辱となり、支那印度よりは奢侈の風俗を輸入して、人民遊惰に流れ、社會及び僧侶の道德、次第に衰へて佛教も亦漸く振はざるに至れり。是に於てか宗教改革の止むを得ざる機會を促せり。此の宗教改革こそ、實に西藏劇場の第四幕なれ。

此の宗教改革者は、有名なる印度の大學者アチーサ師 (Atisa) なり、師は印度ベンガルに生れ、西紀一千〇三十八年六十歳の高齡にて西藏に旅行し、此の處にて數多の

書籍を著述し、改革派の基礎を確立せり。是を今日の額爾德巴(Ge-lig-pu)即ち德行派教旨の起源なりとす。アチーサ師は此の地に十四年間の功績を積みしが、拉薩附近にて圓寂せり。

余は元帝忽必烈(Kublai Khan)の時まで、二百年間前進すべし。忽必烈の祖先は、有名なる蒙古王成吉思汗(Genghis Khan)なり。忽必烈は其の繼承せる廣大なる領土に、更に支那を合併し、歐亞二洲に誇れる絶大の版圖を統御せし賢明の君主なりき。忽必烈は、其の大帝國の多分を占めたる曠野未開の野民を統御せんが爲めに、宗教の必要を感じ、適當なる宗旨を得んことを希望せり。是に就きて一の面白き話あり。忽必烈は數多の宗教信者中に就きて、其の代表者を撰拔し、之を召集せしに、孔子の儒教は固より回々教、天主教より、更に西藏の西南なる薩斯迦(Sakya)寺院の長たる學識ある喇嘛も共に一堂に會せり。

忽必烈は、此等の代表者中に就きて、其の得失を較量せしに、遂に中原の鹿は薩斯迦僧院長の掌中に落ちたり。是に於て忽必烈は、喇嘛教を以て其の大帝國の國教と欽定し、薩斯迦喇嘛を以て喇嘛教の總管長兼外藩西藏の領主に封じたり。斯くて喇嘛

教は、一躍して蒙古支那の大部分に亘りて大に信仰せらるゝ至れり。其の時、忽必烈の信任を得たる喇嘛は、有名なる帕克斯巴(Phags-pa)にて、大元帝師の尊號を授けられ、忽必烈の命によりて、始めて蒙古字を制定したりき。忽必烈は、蒙古地方に數多の寺院を建立し、又北京に一寺院を建立したり、之より其の後嗣の各帝も喇嘛を信ずること深く、喇嘛の教力は殆ど其の頂上に達せり。是を喇嘛教發達の第五段階なりとす。

第六次に宗喀巴(Tson Kapa)の事蹟に及ぶべし。宗喀巴は、喇嘛教第二次の改革者にして、アチーサの改革したる宗教を更に改良せり。是れアチーサ歿後年所を経ること漸く遠く、僧侶の風儀次第に衰へて、頗るアチーサの理想と遠かりたりしを以てなり。是に於て宗喀巴は、當時の僧侶中より最も熱心なるものを召集し、二百三十五戒を守るべきを訓誡し、僧侶を寺院に宿泊せしめて之に嚴格なる訓練を施し、僧侶をして唯托鉢碗と祈禱用敷物(Prayer Carpet)及び印度に於ける托鉢僧の用ふる他の附屬品とを携帯せしめたり。宗喀巴は又宗教の儀式を新設して、人々の注意を喚起せり。斯くて此の僧院長は、旭日の勢を以て腐敗せる紅衣派喇嘛を壓倒して、新に

黃帽派の一新派を起し、喇嘛教の歴史中第六期を區劃せり。抑も宗喀巴は如何にして斯の如き大勢力を得たるか、今簡短に其の要領を記せん。

宗喀巴は、今の清國甘肅省 (Kau-Su) のクムバム (Kumbum) と云へる所に生る。即ち青海 (Kokonor) 附近の地なり。宗喀巴の理想は、天主教より得たるもの多しといへり。其の證として宗喀巴が第一の教師は、隆き鼻を有せりといへり。此の事實の報告に依りて、アツペー、ハック (Abbé Huo) 氏は此の教師は歐洲より來れる天主教の僧侶ならんと云へり。ロツクヒル氏は之が解釋を下して云ふ、唯鼻の高かりしといふを以て此の如きことを判斷するは其の論據極めて薄弱なりと謂ふべし。よし吾人は鼻を以て標準とすることを承認すとするも、韃靼人の鼻は、吾人より高からざるも尙ほ吾人に等しきものあるを發見すべきなりと、又曰くマルコポロ (Marco Polo) の說に據れば、第十三世紀に西寧 (Sining) に基督信者ありきと、余も亦第十四世紀に基督教の已に北京に布教せられたるを知れり、さればアツペー、ハックの論は頗る抱腹の至なりと雖ども、其の想像説は亦全く排斥すべからざるものあり云云。

宗喀巴は、齡十七歳にして西藏國拉薩府に至り、西紀一千四百九年に府の東方凡そ

三十哩の所に一寺院を建設し、之を甘丹 (Galdan) 即ち極樂寺と稱し、其の徒弟を甘丹派 (Galing-pa) 即ち極樂信仰者と云ひしが、其の國音の雅ならざるを以て、後に之を噶爾巴 (Ge-lug-pa) 即ち德行派と稱せり。噶爾巴派は、大に世間の信仰を博し、忽ち他宗を壓倒して、薩斯迦派即ち紅衣派喇嘛より法王の冠を奪へり。此の法王冠は、西紀一千四百三十九年に至りて、宗喀巴の甥根敦珠巴 (Gendun) 之を戴きたり。是れ即ち第一世達賴喇嘛なり。其の後六年、此の大喇嘛は拉薩府の西なる日喀紫 (Shigatze) に札什倫布 (Tashi Lhunpo) 寺院を開き、同時に色拉 (Sera) 即ち黄金寺及びデバン (Depung) の兩寺院を開基せり。以上四個の寺院を以て、本宗の主要なる本山とせり。根敦珠巴は實に活佛轉生即ち西藏語の所謂畢勒爾罕の種を下し、人なり。

喇嘛教發達の第六期より、最後の舞臺に通過するには、二百年の時期を経ざるべからず。此の時期を經過して、第二の蒙古戰勝者願實汗 (Gusri Khan) が西藏を征服せし時、即ち西紀一千六百四十年に到着すべし。願實汗はデバン僧院長ナワンロザン (Nawang-Lozan) の奸猾なる野心家にして、國の擾亂に乗じて主權を掌握せんとするを見て、彼に授くるに此の征服地の王權を以てし、達賴 (Da Lai) 即ち蒙古語大洋の義と

云へる蒙古の稱號を與へたり、然れども西藏人は此の稱號を用ひずして、ギャルワ、リンボチエ Gyal-wa Rim-pooche (陛下の大なる寶珠といふ義)の稱號を唱へり、ナワンロザンは自ら觀世音菩薩の權化なりと宣言し、先立てる四人の大喇嘛を、自己同等の位置に陞せり。從來轉生の説は、死の瞬間、聖人の精靈の他の身體に移轉し、連續として不朽なるものと考へしに、今は此の理想大に變化し、大喇嘛は、單に人間たる其祖先の靈氣を遺轉したるに非らずして、全く佛菩薩の人間に轉生したるものなりとせり。而して、蒙昧なる人民は彼が一片の虛榮心に驅られて此の荒唐不稽の説をなし、ことを感知せず、全く佛菩薩の權化したる活佛なりとして、大に之を崇拜したりき。

ナワン (Nag-wan) は、デバンより拉薩に遷居し、此に宏大なる宮殿を經營して、之を普陀落 (Potul) の宮殿と稱せり。普陀落は梵語の Pôlanaka or Pôlan にて、即ち觀世音示現の靈地なり。印度及び支那四明の普陀落と、當地とを併せて世界の三靈地と稱す。斯して其の相續者は、世々此に在りて、人々の精神界を支配せり。ナワンは第一世達賴喇嘛にして、噶爾巴派の第五世大喇嘛即ち法王なり。法王在位四十年、西紀一千六

第四十圖



第一世 達賴喇嘛

百八十年に圓寂せしが、秘して喪を發せず、位を空うすること十二年以上を經過せり。是れ彼の名聲を藉りて、部下の僧侶等が、圖かる處ありしに由りてなり。ナワンの相續者は、至つて放逸なりければ、其の職を褫はれ、遂に暗殺せられたり。是より國內大に亂れ、支那人之に乗じて、侵し來り、此れまで維持したる宗主權を、褫はるゝに至れり。

西紀一千八百十一年マンニング (Manning) 氏の視た

る達賴喇嘛は、即ち第九世なりき。第十三世即ち現在の達賴喇嘛は、西紀一千八百七十六年に生れたりき。西紀一千九百〇一年二月十六日附にて、ヤタン發テトラノ嬢の通信中に左の記事あり。

此の達賴喇嘛は、夏期巡禮者となりて、其の誕生地を訪ひ、歸途天然痘に罹り間もなく全快せしかども、其の看病に従事せし二人の兄弟も亦之に傳染したり。茲に又政治上の大擾亂ありき。達賴喇嘛の保護者にして、彼が晩年に至るまで攝政王として

行動せし西藏の一會長ありしが、此の會長は、法王を殺害せんとする意志ありと讒せられき、讒者の曰く此の目的を達するには、三要件を要す、就中其の二件は達頼の頭髮と齒垢となり、他の一は達頼の齒なり、此の會長は達頼八歳の時に已に一本の齒を抜き取りて之を所持せしが、頭髮齒垢及び齒の三を紙に包み、普陀落の地に秘密に埋葬したりしに、此の紙の小包は翼を得たりけん、何れへか飛去りて跡を留めざりきと、達頼を呪ひて殺すの義、保護者たる會長は、斯る笑ふべき讒誣の爲に、遂に捕縛せられ、四人の閹員は、之に死刑を宣告せんとせり、然れども達頼は之に賛成せざりしかば、已むことを得ず之を、獄に投せしに、終に獄中に死せりと云ふ云云。

達頼喇嘛に次て、權力あるものを札什喇嘛 (Tashilama) と云ふ、即ち札什倫布 (Tashi-lunpo) 僧院長あり、阿彌陀佛 (Amitabha) の權化轉生せる活佛として、大に世人の崇敬渴仰するものなり、蓋し知略に富みたりしナワンは、秩序維持の便法として、此の次位の法位を設けたるならむ、即ち達頼喇嘛は最上位にありて、最上權を有すると同時に札什喇嘛にも相當の權力を與へて、兩者の競争を避けんとするにありき、第三世札什喇嘛は西紀一千七百七十四年にジョージ・ボググ (George Bogle) と親交あり

札什喇嘛
の勢力

し人なりき、第四世は西紀一千七百八十三年にターナー (Turner) 氏の見たるものにして、第五世は西紀一千八百八十二年に圓寂し、而して現在の札什喇嘛は、西紀一千八百八十八年以來此の顯榮の位置を保てりといふ。余は未だ大喇嘛 (Grand lama) に就きて何の説く所あらざりしが、達頼及び札什喇嘛に次ぎて尙ほ四箇の大喇嘛あり、即ち次の如し。

- (一) 蒙古大喇嘛 (Mongolia Grand lama) 即ち喀爾喀 (Khalkas) に於ける庫倫 (Urga-Kuren) の喇嘛廟に居るもの。
- (二) ニンヤン (Nin-ma-pa) の大喇嘛即ち紅衣派にして、西藏薩斯迦の廟に居るもの。
- (三) 不丹 (Tibet) のダルマラジャ (Dharma Raja) にして、ダグバ宗派(紅衣派の一派)に屬せり。
- (四) ヤムドク湖 (Yam-dok lake) の著名なる僧院長。

以上の大喇嘛は、悉く佛菩薩の權化なりと雖とも、今之を一層詳説せんには、事専門の智識に涉りて、一般讀者には益する所尠かるべし、讀者は唯喇嘛教が西藏を中心

として、南は不丹^{ブタン}泥泡耳^{ニポウ}より、東は支那本部の西境より、北は蒙古西比利に至り、西は中央亞細亞の各地に涉りて、幾億萬生靈の精神界を左右し、其の勢力甚だ大なることを記臆せば足れり。

第十章 西藏神學

喇嘛の神學は、恐るべく且つ驚くべきものありて、恰も紛糾せる糸の如し、何れの端を引くも益々纏れを來たすが如く、容易に其の條緒を發見し其の歸趣を悟ること能はず。メーショア、ワッデル Major Waddell 氏は、此の問題に關して一書を著はし、か、其の所說正確、引證該博にして、喇嘛研究には、實に屈強の津梁たり、氏は此の書を著はさんが爲めに、指定せられたる一堂にありて、親切なる喇嘛の補助と説明とを得て記述せしにも係らず、尙且つ氏は喇嘛の系統を以て、佛、幽鬼、及び佛菩薩として、遍く渴仰せらるゝ、聖賢の渾純たる群聚なりと云へり。

西藏佛敎を研究せんには、甘珠爾^{カンジュル} (Kah-gur) と稱する戒藏を讀まざるべからず、甘珠

爾は一百八卷よりなり、各千頁の大卷にて、冊數一千八十三あり、各卷の重量千、ポンドにして、長さ二十六吋幅八吋、厚さ八吋なり、皆帙入となれり、此の巨大なる經典を運搬するには十二匹の犂牛を用ひざるべからず、其の木版を蓄ふる所の家屋は、數棟併列して、嚴然一村の觀をなせり、此の書は、主として支那及び梵語の經典より反譯せるものにして、其の最初の木版は、二百年を経たる今日尙ほ之を使用し、各寺院には其の全部を所有せり、此の原本の外に尙ほ注釋を加へたるもの二百二十五冊あり之を丹珠爾^{タンジュル} (Tanjur) 即ち雜藏と稱す、此の内には、哲學、文法學、修辭學、機械學、化學等を含む有り、甘珠爾、丹珠爾の二藏經は、西藏佛敎の二大寶典なりとす。

此の外に、尙ほ經典の大部あり、即ち巴特瑪^{ハタマ}、繖巴^{ウバ}、幹師^{カンシ}、及び守喀巴^{ウカバ}等高僧碩學の著書なりと云ふ、此等の經論に加へて、尙ほ十萬を下らざる詩歌を有する一書あり、其の一部は觀世音の配偶と稱する如來 Fatuagata 及び慈悲の女神の讚美歌等なり、西藏人は、經典を尊敬すること甚しく、之を神佛の如くに崇めり、されば甘珠爾の前には、燈明燒香を絶たず、縱令一片の經典と雖ども、寶物として之を保存せり、經典を印刷せる紙は、木皮を以て製したるものにて、記載する處の文字は極めて粗大なり、然れ

ども其の價は頗る高價にして、曾て北京出版のものは、六百、バオンドにて賣却せられたり、蒙古の或る種屬は、此の寫本を七千匹の犂牛^{ヤク}を以て買ひ取れりといふ、亦以て信徒の信仰極めて篤くして、費用を愛まざることを知るべし。

喇嘛の教旨の衆生濟度に在るは勿論なれども、自ら吾人の所謂佛教とは、稍其の趣を異にする者なきにあらず、喇嘛教は西藏を作り、西藏は喇嘛教を作れり、故に喇嘛の教旨を知らんと欲せば、先づ西藏人を知らざるべからず、西藏人を知らんと欲せば先づ其の心を知らざるべからず、西藏人の心は西藏の湖の如く、空氣は晴朗にして、各種の水禽は漪澱の上に漂ひ、幾多の粗毛獸は湖岸に直立せる黒岩と相掩映せり、佛教は來りて湖中に其の影を投し、光彩陸離たる光明を放ちて、永く十方を遍照せり、此の佛教は、徒に單純なる戒の宣言に止まるが如き質素なる佛法にあらずして、其の開祖の寂滅後幾多の星霜を経過したれば、自ら許多の分子を混じ、總ての外道と知らず識らずの間に一致聯合をなせる、^{ヨガ} (Yoga) 派の如きあり、或は女神 (Kali) 及び他の形狀に依り、天然力を崇拜する、^{タントリ} (Tantrism) 教あり、茲には此等の教旨及び儀式を詳密に記載することを省くべし、西藏佛教の志想も實行も、其の基く

所は、皆ヒマラヤ山を越えて輸入せられたる、是の佛教の旨趣にあらざるはなし、且つ此の國の往古より存在せる、幽鬼崇拜宗の行はれたる中に、其の聖徒傳と共に卸されて自ら之を合一したれば、加持祈禱は固より論なく、咒咀厭勝占ト等に至るまで一として喇嘛の管掌せざるはなし、實に喇嘛は、西藏人の精神界の全部を支配せるものなり。

喇嘛教は、印度佛教の全部を併呑せしも、所謂圓飲み込みにて、消化せざりき、然れども、佛教と喇嘛との間に各互に相連絡せる不易の觀念の存在せるを證す、例へば釋迦牟尼の如きは、前に世を去りし人間たる佛系の一人なりと云はれたり、又次に彌勒 (Jai-ma 梵語にて Maitreya) といふ慈悲の佛あり、首府拉薩には、彌勒の巨像ありて、三層の建物中に直立せり、巡禮者は此の巨像の周圍を巡りて禮拜す、其の順序は第一に脚下を、第二に胴部を、第三に寶石にて裝飾せる頭部を螺旋的に巡りて禮拜することを得べし、此の巨像は、粘土にて作り、黄金を以て被覆したる光輝燦爛たるものなり、極樂にて最も嗜好する物の記號として、印度より蓮を採用せり、其の意蓋し不潔の土地に接觸せずして、水中より起り、如何なる汚泥中に在るも染まらずして、少

しも其の固有の粹を損せざるを以てならん、又此の花の暗黒隱密中より美麗に成長するが如く、佛の誕生及び成道を寓意せるならん、視るべからざる且つ無限の佛ありて他に挺てり、之をアデ佛 (Adi Buddha) とし、沈思熟考して禪定 (dhyana) に入る五個の佛を創造せり、是れ即ち禪定佛 (Dhyani Buddha) にて五元及び五識の源なりといふ、次を菩薩 (Bodhisattva) とす、禪定佛の代理をなすものなり、此等の佛菩薩は世間に幸福を與ふるものなり。

本來の佛菩薩の外に、尙ほ佛菩薩の地位に墜りたる聖人あり、此の人は即ち涅槃の域に達したるもの、即ち大悲大慈の功德を施したるものなり。

(一) 文殊菩薩 (Manjisi) 智慧ある美聲の佛なり、其の右手には盤根錯節を切斷せんが爲めに準備せられたる智識の光赫々たる劍を持し、左手には蓮華上に於ける經文を支持せり。

(二) 金剛菩薩 (Vajrapani) 金剛を振ふ人の義、馬手には青色の金剛を持せり。

(三) 觀世音菩薩 (Avalokitesvara) 即ち觀自在菩薩、視察する人の義なり、其の西藏の名稱は江來孜格 (Chen raizi) と云ひ、其の畫像は如來 (Tathagata) の配偶の如く、蓮華上に坐

せり、時として十一面を有し、數多の眼を有することあり。

轉法輪 (Wheel of Life) 命の輪の義、即ち輪廻の模形は、全く佛法信者の觀念に非らずして、西藏の思想の多分を占有せり、此の輪は六個に區分せらる圓盤よりなり、其の表面には無量の生存及び其の状態を記載せり、此の六區分は更に六道即ち再生の六地方を示せり、此の輪は人の生命に着き纏ふ所の恐怖を意味せる妖怪によりて纏まるゝなり、其の中心には、願望の三像即ち鳥、蛇、及び猪あり、其の周圍の輪鐵を十二分して各種の繪を畫き、以て因果應報の輪廻を示せり。

六道即ち再生の六地方は、地獄あり、極樂あり、是れ取るに足らざる問題なれども、ギルモア (Gilmour) 氏の説けるが如く注意すべき事あり、即ち罪惡に對する處罰の適用なり、今一例を舉げんに、飲食の慾を恣にせし人は、死後の結果は饑餓を以て罰せらるゝなり、此の人は饑餓道に再生し、山の如き大なる身軀、洞窟の如き大なる胃腑を有し、之を満足せしむること極めて難く、常に饑餓に苦められ、恰も西比利亞の狼の如く食物眼前にありと雖ども、其の口甚だ少くして針孔の如く、其の咽喉窄くして髪の毛の如くなれば、思のまゝに飲食して其の慾を充すこと能はざるなり、生前の

食食の罪業に依りて、死後餓饑道に墮落し、此の饑餓の罰を受く、凡て生前の業因によりて死後相當の所罰を受けざるべからず、六道は即ち各人の受くべき結果を示したる輪廻なり。

(八四)

第十一章 僧侶及び僧院

僧服

僧侶は國中到る處に充滿して、宛も雨後の筍の如く、各所に繁茂し、西に東に到らぬ限なく散布し、隨所城壁然として峙ちたる僧院の宏大なるに驚くべし。黄教派僧侶の服装は、其の宗規に基ける暗淡黄色の衣服にして、暗赤色の不潔なる下衣の上に、相當なる帯にて結束し、其の上に刺繡せる外袍を着けたり。而して、此の帯よりは、革製の壘筆筒及び巾着等と共に神聖なる器械を吊下せり。長靴は、麂牛の毛皮を以て底とせる硬き赤色の獸皮よりなり、其の長さ殆ど膝に達すべし。下着及び外袍は僧侶たることを示し、帽子は其の形最も殊別にして、其の宗派の如何を示せり。

第十 五 圖



靴 及 び 其 の 組

帽子の形狀大小に就きては、其の種類極めて多し、茲に示せるは單に其の一種の摸形に過ぎず、重要な摸形は三個にして、其の色は、黒、紅、黄の三種なりとす。黒色帽は其の形圓く、頭巾形にして、何となく氣違じみたるものにて、之を被れる様は頗る異様に、眞に飛ばんとするが如き狀あり、而して各人の嗜好に依りて、羽毛等を以て之に裝飾を施せり、此の帽子は西藏固有の幽鬼崇拜即ち「ボン」派(Bon-pa)の帽子にして、形狀最も其の宗旨に適せりと謂ふべし。紅帽は、其の形歐洲の僧冠の如く、上方

(八五)

に向つて、ピラありて蓮花の形狀を取れり、支那傳來の佛教を其の儘に維持せる、ニ
 ン、派(Nin-ma-pa)の僧侶及び薩斯迦派の僧侶之を被ふれり。
 黄色朝も猶歐洲の僧冠の如くにして、其の頂光れり、長さ、ピラありて、
 兩側に長く尾の如く垂れたり、此の帽子を被ふれるものは、
 德行派即ち宗喀巴の開基したる宗旨にて、現在西藏の國教とな

第六十圖



通人常の朝

れるもの、所謂黄教の僧侶之を被ふれり。
 特別の色、殊に紅、黄は日常生活の各條款にまで及ぼせり、紅朝は紅教派にて、赤色の
 條文を現はしたる家屋内に生活し、赤き念珠を用ひ、赤色の蓮花を愛す、之に反して
 黄教派は黄色の朝を被ふり、萬事其の特有の黄色を用ひて、紅教派と對特せり。
 各人必ず念珠を手にし、此の外特に奇態なるは少兒の禪匣の如き形狀をなせる
 祈禱筒(Prayer Glinder)と稱するもの是なり、此の祈禱筒は始めて此の國に入りしも
 のには、特に奇態に感すべし、念珠を爪繰り、低聲に唱名することは、殆ど我が國の俗
 に似たり、聞き慣れざる西人は、其の聲を形容して、猫の如くグル／＼呻吟すといへ
 ども、是れ決して惡し様にいひしには非らずして、其の聲低き念誦の、自から騒音と

して聞かるゝによるなり、此の習慣的なる念誦することは、實に勉強の甚だしきも
 のにして、圓き珠を連ねて製せる念珠の各類も、瓜繰ることのはげしき爲め、薄き小
 なる管の如く磨滅せるものありといふ。

念珠を製する原料には、數多の種類あり、黄色の念珠は、中部支那の樹木を以て製し、
 紅帽派の用ふる粗なる蔞色のものは、外部ヒマラヤに産する某樹の種子を以て製
 せり、又人の頭蓋骨を以て基石の如く小圓板に製し、これを連ねて念珠とせるもあ
 り、各種の佛菩薩は、各其の好に應じて特殊の念珠を携帯せり、觀世音菩薩は具殼
 にて製せる白色の念珠を以て禮拜せられ、幽鬼は人間の頭蓋骨にて製したるもの
 を採用せり、此の外念珠の材料には、硝子、水晶、蛇の脊骨、象の頭腦中に有する硬き物
 質、赤檀香及び胡桃等の種々あり。

喇嘛族は、自ら、ゴムバ(Gompa)と稱せり、ゴムバとは、即ち隱遁の民の義なり、ゴムバは
 其の數極めて多く、西藏國にて無慮三千に達すと云ふ、ゴムバの家屋は、日光にて乾
 燥せる磚瓦、石粘土にて結構せり、支那人は是の如き家屋を廟と呼へり、木材は至つ
 て乏しければ之を用ひず、一般に寂寞の地を撰びて之を建て、容易に人の近接し難

き高地にあるもの多し、或る寺院の如きは全く人界より遮断せられたる絶所にあ
りて、好時季の時と雖ども、之に參詣するには、危険なる通路に依りて、纔に達するこ
とを得るのみ。寺院の宏大なるものに至つては、宛然都市の如く、幾多の庵寺は連り
て長き市街をなせり。其の家屋は二階若しくは三階のもの多くして、平屋なるは稀
なり。其の中央の重なる建物は會議堂及び本堂なり。屋根は何れも扁平なり。其の上
に犛牛の毛を以て織れる布にて製したる巨大なる祈禱筒、襪履及び旛幢を立て、
其の紐など周圍の壁に垂下せり。寺院の位地は山を背にせる清淨の地を擇びて之
を建て、必ず東方に面せざるべからず。寺院の位地に就きて充分の希望を云へば、其
の前面に風光明媚なる湖を扣へざるべからずといふ。

寺院に參詣するには、常に塔(Chorten)旗竿及び枯槁せる樹木の間を通過せざるべ
からず。塔は或る喇嘛上人の紀念碑にして、石を以て疊み、其の内に其の遺骸を納め
たり。是れ印度の窣堵婆(Siapa)に像りたるものなり。其の本來の形狀は上部は半圓
形をなして、恰も椀を伏せたるが如く、高き柱礎の上に在りて、王者の記號たる傘を
冠せる方柱の柱頭をなせり。其の後發達して十三天に像れる十三帶の鈍尖塔を此

に加へ、其の頂上には鐘、蓮華、新月、圓き太陽等を有せり。西藏人は此の普通の形質を
保存せり。然れども其の上部の半圓形なるを轉倒して、下部狭く上部に開けり。喇嘛
の舍利、經典及び他の遺骸は、各其の目的を以て製せる塔中の壁の凹處に安置せり。
旗竿と旗との形は、支那と印度との折衷式なり。各學校の兒童は、必ず印度の著名な
る阿輸迦(Asoka)即ち阿育王の有名なる敕令に就きて聽きしことあるべし。阿輸迦
王は、佛教のコンスタンチンなり。王は崇佛の願望と、經典より抜粹せる一二句と
を銘刻せる柱を創設せり。印度の各地にて王の建設せし柱甚だ多し。其の六本は今
尙ほ直立して二千年以上を經過せり。西紀前二百五十三年より二百五十一年に至
る中に就きて最も完全に保存せられ、其の原形を存せるものは、シャンバルン(Cha-
mparun)州のローリヤ(Lauriya)市にある獅子柱なりとす。其の高さ三十九呎と六吋あ
りて、柱頭の下部に、ブラス鷲の普通の花冠を有せり。阿育王の柱は石造なり。然るに
西藏の旗竿の木製なるは如何。蓋し西藏旗竿の制は、緬甸の影響を受けたるなるべ
し。緬甸の寺院は高き竿と旛幢とを備へり。各旗竿には、ブラス鷲を彫刻し、其の旛幢
には阿育王の柱に擬して、崇佛の語を記せり。緬甸にては木材は至つて安價にして、

石は極めて高價なり故に王侯等の少數の富者にあらざれば石柱を建つること能はず通常人は安價なる木材を用ひて満足せるなり。西藏人は緬甸人の如く木製の旗竿を使用し、其の旗の上部の一隅には獅子を書き、下部には鳥類を書けり、是れ即ち夫の獅子柱頭鷲鳥の花冠などの遺物あるべし。

西藏の旗は、其の中央に龍頭の馬を書けり、是れ實に支那の四不思議の動物の一にして、壯嚴の符徴たり。

重要なる寺院の別
蚌寺

喇嘛族中、最も權力強大にして、僧侶多きものを拉薩府の西方三哩なる別蚌寺(Dorje Pung)米の堆積の意なりとす、黄金にて葺ける殿堂の周圍に群集せる七千人の僧侶あり、大喇嘛の遺骸は、其の附近の塔中に葬れりと云ふ。

校補者云ふ、拉薩附近の大寺は、府の東南八十清里に甘丹寺、西北十六清里に布雷峯廟、北八清里に黄金寺、南に桑蔴寺あり、西十五清里に別蚌寺ありて、別蚌最も盛大なるが如し、又其の里程も三哩と云へるに合へば、デブン寺を以て假に別蚌寺に宛てたり、而して別蚌、色拉、甘丹、桑蔴を藏の四大寺と稱す。

其の二黄
金寺

次に主要なる寺院を、拉薩府の北方一哩半なる色拉、即ち黄金寺なりとす、色拉は覆

其の二札
什倫布寺

の意なりと云ふ者あれども信し難し、此の寺院には五千五百の僧侶と、數多の恐ろしき頭をなせる佛像とあり、又殆ど近く可からざる所の岩角に孤立せる數多の小房あり、此は世乘人の隱遁せる所なり、三大殿堂の壁は黄金を以て被覆せり、此の寺院は著名なる金剛、即ち降魔杵(Dorje)あるを以て特に有名なり、此の金剛は印度より空中を飛び來りしものとして、本寺の堪布役僧之を珍藏し、西藏に於ける金剛の根本的模範なりと稱し、毎年一回開帳して人民の參拜を許せり。

一年之を拉薩に運び來りて、衆庶の禮拜を許せり、達賴喇嘛は之を敬して其の頭上に置き、支那大人(Amban)以下重なる官吏も、順次に之を禮拜したりき。

第三に位するものを札什倫布寺(Tashi Lhunpo)名譽の集りの義なりとす、拉薩府の西南凡そ五百三十三清里を隔てたる雅魯藏布河の南岸日喀紫より、一哩の所にありて、全然一都府をなせり、市の壁には五箇の門を穿てり、東方には禁喫烟の制札あり、四千の僧侶は壁内に住し、其の本堂は宏大にして百本の柱を建て、二千人の説教聽聞者を坐せしむべし、札什倫布寺に於ける珍奇の建物は、キクタムサ(Kiku Tamssa)なりとす、其の高さ九階にして、頂きは楔形又は斧の廣大なる刃の如し、此處は喇嘛

の食堂にして、僧的卓上には羊躰牛及び山羊の死躰を以て滿てり、又此の建物は宏大なる黑板即ち衝立ヒトチユアシゴキにして、其の目的より斯の如き異形を呈せり、年々六月十一月の兩度此の寺院に佛畫の展覽會を開催して、此の建物の表面に絹地に畫ける大佛像を懸け、無數の群集は之を拜せんが爲めに來り集へり、此の佛像は長さ百尺ありて主要なるものを彌勒慈愛の佛の像なりとす、巡禮者は遠近より來り集り此の畫を視其の絹の總に接吻せんとして、互に壓し合へり、此の佛像は西藏人の悲哀を慰め、其の靈魂を訪問すること、恰も耶蘇教に於て、一婦人が神の後に至り神の衣服の縁に觸れて、其の病を癒しといふ話に似通ひたり。

名ある他の僧院を薩斯迦寺黃褐色の土地と云ふ義なりとす、ヒマラヤ山中の最高峯エベレスト峰の北方、凡そ五十哩の所にあり、元の時、帕克斯巴ハクスバ以來、紅衣派喇嘛の大本山にて、紅數の始祖昆貢確嘉コンフンチンキヤト Kon-Dkon-meh'ogrgyal-po 西紀一千〇七十一年頃之を開けり、世襲の住持ありて、仁育菩薩の後と稱す、數千の喇嘛常に此の中に修業す、本寺は西藏國中最大最一の建物なりと云ふ、大圖書館を以て名あり、其の書籍は非常に多く、書中の文字は黄金又は銀を以て彫り上げられたるものありと云ふ。

普陀落より西行半月程に、珍らしき一湖あり、雅木魯克ヤンドク Yandok 蠍の義湖と云ふ、其の形蠍の形に似たるを以て此の名あり、此に假名サムヂン (Sanding) と稱する僧院ありて、數多の比丘尼と僧侶とありて、此に住し、一人の女胡土克圖之を統督せり、世に北斗の精の化する所と稱す、西紀一千九百〇一年に此の婦は齡方に四十五歳なりき、サラト、チャンドラ、ダスは拉薩の旅行に之を見たりしと云ふ、當院は蠍の頭の前兩手の爪の相對せる中間に當れる島に面し、高さ三百尺の屹屹たる岩石上に建てり、長さ石の階段ありて、其の兩側には壁あり、此の階段を登り詰むれば、當尼寺の門に達す、寺内には常に嚴重に閉鎖し、誰も入ること能はざる秘密室ありて、茲に従來斗精の權化たりし者の遺骸を安置せり、現在の僧院長たる貴女も、他日必ず死躰防腐法を施されて、鬼氣陰々たる此の幽室内に奉置せらるべきなり、各僧院長は、一生涯に一度は必ず此の物凄き骨堂に入りて、修繕を加へ、其の法祖を弔ひ、定例の式に依りて禮拜するを義務とせり、此の貴女は金剛石の牝豚 (Diamond Sore) 即ち金剛豬の稱號を以て通く國中に知られたり、讀者決して笑ふこと勿れ、是れ名譽の名稱なり、二百年前當僧院蒙古會長第巴桑結ダバサンキョウ のために攻撃せられし時、其の第一世僧院長

は不思議の妙力を現はして、其の寶物の掠奪を防禦せり、蒙古兵の寺門内に侵入するや、唯數匹の牝豚ありて守護せるを見たりしが、之を追ひ拂ひて掠奪せんとするや、蠢爾たる豚は忽然變じて、イトモ尊敬すべき僧侶と比丘尼とに現して、莊嚴なる容貌を示ししかば、流石貪慾無慚の蒙古人も、俄に畏敬の念を生し、其の毒手を收めたりとぞ。現在の貴女は決して横臥して、就眠すること能はず、終日椅子に凭りて眠り、夜は沈思默考の状態にて、長時間座せり、時に拉薩府に來ることあれば、人々最敬礼を以て之を迎ふといふ。

其の六
雍和宮

北京の僧院を雍和宮と云ふ、其の寺格甚だ高し、僧侶一千を住せしむ、悉く蒙古人なり、主要なる殿堂には佛の木像あり、高さ七十呎、足指二十一吋あり、兩手に大なる蓮花を持ち、其の胸部には寶石類を装へり、行廊は其の周圍を繞り、青銅の二個の大獅子は其の兩側に立てり、此の建物は、絹の幕及び西藏産の絨繒を以て、華麗に裝飾せり、往年我が國に來朝せし阿嘉胡士克圖は此の雍和官の高僧なりき。

其の七
クムバム

寺院は、青海 (Kokonor) の附近にある、宗喀巴の生誕地に於て、其の紀念の爲めに建築せしものなり、之を青海地方の大本山とす、此に有名なる白檀香

其の八
ウルクガ即ち喇嘛廟

其の九
ヒミイス寺

あり、宗喀巴の生まるゝや、此の樹不思議に成長し、十萬の葉、悉く其の肖像と神聖なる文字とを現はせりと云ふ、ハツク (Hec) 氏は實際に之を目撃して報告したれば、其の樹のあることは疑を容れざるなり、氏の報告する所は、大略下の如し、曰く其の文字は、葉脈等木葉固有の部分より成りて、其の位置各葉皆異なれり、但嫩葉の如きは唯其の一部分を示すのみなり。

此の最も愉快なる物を視し時は、何となく一種の感覺に打たれて我知らず流汗面を沾したりき、尤も他の旅人は、此の記事を證明するに聊か困難を感ずべし、何となれば、唯確乎たる信仰者のみ、此の葉上の文字を認識し得べければなり云々。

外蒙古ウルクガ (Urga) にある大喇嘛の寺院は、北京の西方四十日の行程に在り、茲には二十八個の大學校と、一萬四千の僧侶ありて、四周の曠野は常に巡禮者の天幕を以て充滿せられたり、是れ蒙古地方の大本山なり、此外、内蒙古の多倫諾の廟、滿洲盛京の實勝寺、山西省の歸化城、五臺山、陝西省西安府の廣仁寺等は大喇嘛の住持せる著名の寺廟なりとす。

西藏の西隣ラ達克國 (Ladakli) に於ける、ヒミイス (Hemis) 寺院は、首

府ノ一 (Teh) より十八哩の所にあり、毎年夏期觀世音の祭日にはヒミイス市は克什米爾國より來る巡遊者、市内に填咽し、假面を着けたる舞踏は終日舉行せられ、僧侶は恐るべき異様の装をなして整列し、院本の一節を演じつゝ、諧謔の狂言をなし、俗人の頭腦に喇嘛の教務と、共に一種の印象を與ふことを努めり。

各寺院の中央部は、即ち殿堂なり、通常の民家にては、各種の室の外に、毎日の禮拜に供せんが爲め、少くも必ず一箇の佛壇を有せり、寺院の殿堂の内面は、奇麗に彩色を施し、壁には壁畫を繪き、赤色の梁には蓮華等の花卉を畫けり、轉法輪は通常其の玄關前に書けり、佛壇上には三箇の寶物即ち佛法僧の寶あり、此を佛の三位一體とも云ふべきか、此の三者の記號は、禮拜をなす際には、何れの所にてても之を見ざるはなし、佛像は佛を代表し、書籍は法を代表し、寶塔は教旨を代表せり。

喇嘛の本堂にては、毎日各種の物體を模造せるものを供へて佛に手向けり、其の模造品は、麥粉又は米の粉を捏ねて造りたるものなり、喇嘛は之を佛前に供へて繁瑣鄭重なる儀式と、念佛とを以て供養するなり、儀式終れば左の如き祈禱をなせり、總ての萬物に幸福を與へ給へ、我々をして煩悩の域を脱せしめ給へ」と。

(九六)

圖七十第



人の頭
蓋骨二
個にて
製した
る鼓

圖八十第



人の大腿
骨にて製
したる喇
嘛の喇叭

圖九十第



(九七)

堂内の坐次は、秩序誠に整然たり、通常の僧及び新參の僧は、本堂の兩側に位序を正して、長くして低き曲祿カマドに坐せり、曲祿の右方彼方の一端には僧院長の法座ありて、其の次に役僧の坐あり、其の反對の側には、此の營造物の管理者及び其の助手の坐席ありて、何れも一齊に讀經するなり、門に接して禮拜の間ありて、佛に手向くべき茶を置くべき卓あり、此の入口には祈禱桶(Prayer Barrels)ありて、塲所の許す限りは、大く之を作れり、禮拜の間の一側には祭壇あり、其の祭壇は、簡易なるものにて、高低二列をなせり、低き方の棚には水、米、花及び燈明の供物をなし、高き棚には二三の經典、金剛、御水鉢、金屬の鏡、鏡ミタマ、法螺具、長き望遠鏡様の號角、人の大腿骨にて製したる喇叭、及び大鼓を置けり、大なる鼓は架に懸け、時としては其の一極に孔を穿ちて之にて支ふることあり、小鼓は其の形我が國の小鼓に髣髴たものゝにて、革の緒を結び付けたる球頭の抱かかにて之を撃つ、其の他人の頭蓋骨にて製したる鼓もあり、喇嘛教育の科程は、長くして且つ嚴格なり、八歳にして寺院の學校に入學せしめ、體格検査をなし、アルハベットAlphabetより始め、次第に古人の金言、及び日常義務の一端を暗記せしむ、其の親族は、一ヶ月間に一度、此の小兒に面會することを許さる、斯の如く

して二ヶ年を経過するなり、此の間を試験生(Darma)即ち喝食と稱せり、其の後保護者は之を學友に紹介し、仲間入りをなさしめ、姓名を僧録に謄録して搦印せしめ、袈裟には銀貨の如き徽章を附し、剃髮して嚴格なる宣誓式を擧げ、始めて法名を得るなり、而して自費若くは兩親の費用を以て、寺僧全體に茶の饗應をなす、斯くて初めて僧見習(Dharma)即ち沙彌Shamiとなる、尙ほ進んで住職となるには、更に十二ヶ年間の研學をなさざるべからず、其の課程は、加持、祈禱に關する書籍、高僧傳、及び夥多の經典よりなれり、試験は頻繁にして、公開の問答、論難に勝を得ざるべからず、此の問答法は、頻々之を行ひて、其の修行を研く一方法とせり、時としては二千人の學友たる聽衆の目前に直立し、一生懸命の勢力を奮ひて、問答をなさざるべからず、但眞に熱心ニに此の問答法によりて學を研き、膽を練るものは少くして、多くは唯形式的に之を行ふに過ぎざるなり、然れども、喇嘛の食物を喫するものは、鐵の顎を要すとの諺を玩味せば、自から幾分の消息を發見すべきなり。

第十二章 西藏の人情風俗

(100)

不潔の習慣

西藏人は、遊惰を好む人民にして、又極めて不潔なり、其の衣服は一度着用すれば廢棄するまで之を脱することなく、又之を洗濯することなし。此の國は寒氣特に甚だしくて、毛髪は其の面上に凝固し、人は溫暖を保たんが爲めに、厚き外套に包まれ、其の狀恰も歩める蒲團の如し、蓋し懶惰と不潔とは、人民の性質にもよるべけれども、寒氣の甚だしきより、自ら動作の不便を來たし、遂に此の厭ふべき習慣をなしたるならん、特に西藏婦人は、不潔なる蒼色の繪具を以て其の兩頬を塗りて裝飾とせり、此の繪具は、印度に在留せる歐洲人は、豚の血なりと云へども、恐くはさにあらず、此の習慣の起源は詳かならず、或人の説に由れば、昔一人の嫉妬深き喇嘛ありて、其の婦の、他人に對する愛嬌を殺く目的より出でたるむ仕業、遂に一般の習慣となれりと、實に其の醜りたる如く視ゆる面貌は、其の醜惡なることは此の上もなく、吾人はこれ以上に嫌惡すべきものを想像せんとするも能はざるなり。

家屋

然れども、斯く醜惡ならしむる實際の理由は、全く寒氣を防ぐにあり、唐書吐蕃傳に弄讚王は、文成公主が國民の赭面を惡みしかば、令して之を禁ぜし由を記せり、以て其の由來の久しきとを察すべし、又男子は自ら、*パタ*を以て其の面を塗ることありと云ふ、此の如き習慣は、寒氣甚しき所の蕃民に多く見る所なり。不潔なる所には幸福なし、西藏の家屋と、其の人民の不潔なるとを見れば、其の人民の如何に不幸に沈淪せるかを知らん、家屋は、粗石又は日光に乾燥したる磚瓦等にて結構したる粗造の二階建のもの多く、其の屋根は皆扁平なり、粗慥なる階段は、外部より其の頂上に達すべし、屋根は、恰も倫敦市中の洗濯日に於ける後庭の如く、襤褸の綱を軟風に翻せり、是れ即ち有名なる祈禱幢 (*Prayer flag*) なり、而して家畜は一家中の土間を占有し、人は其の上部の室を占有せり、寒氣甚たしければ窓戸少く、採光法不完全にして、單に屋根に小孔を穿ちて、採光と烟突とに充てたれのみなれば、室内は薄暗くして、不潔に源因せる異臭鼻を撲ち、其のいぶせき様は、人をして徐に古代の囚獄を想像せしむ、此家屋を稱といふ、支那四川、甘肅の諸省の邊徼、青海地方等皆同一様の構造なり、住民の過半は、遊牧を業として、天幕中に住せり、中には獸皮に

て蔽ひたる陋屋中に住むものあり、又漁網に似たる蓬牛の毛を以て織りたる囊よりなれる黒き天幕に住するものあり、天幕の形は六角形にして、恰も胃腑を地面に



第二十圖

附し、瘠せたる長き脚に依りて、直立不動の姿勢を取れる蜘蛛に髣髴たり。されば其の構造は以て寒氣を防ぐに足らず、又暴風の爲めに容易く吹き倒さる憂あり。而して、此の黒き天幕を黒帳と稱し、之に住するものは、蒙古種の遊牧民なり。支那國境にある喇は、内部の中央に高さ泥土の平き臺ありて、之を「炕」(Kiang)と呼ぶ、即ち韓國の「溫突」と同様にして之を以て竈、暖爐、及び寢臺に兼用せり。西藏人は、其の家屋に白粉を塗りて裝飾する風あり、然れども内面は否らず、カビテン、ウエル

チユムルン
(Tumlung)
に於ける
ツヤ (Taya)
Hs) の宮殿

ピー氏 (Captain Wellbey) 青海のクンバム (Kumbum) 地方に滞在中、其の方法を観察せしが、土人は先づ白粉をとりて能く水に混和し、屋根に登り、壁に沿うて之を注下するなりといへり。

家具と守り神

西藏人は家具と稱すべきものを有せず、唯二三の箱、壺、碗、皿、鞍、乾燥肉及び糧を貯ふる獸皮製の袋あるのみ。

然れども、各戸其家の守り神あり、そは甚だ不愉快なる妖怪の種類にて、支那の厨庖の神の如く豕の頭を有せり。此の神は、常に一定の所に靜止することなく、屋内の一隅より一隅に遍歴動坐して、家人の心配と苦痛との原因たり。此の神の一隅に立てる間は、其所を掃除すること能はざるは、勿論之に觸るゝ時は、神を瀆すの恐ありとせり。此の神の動坐方位は、悉く曆中に記載したり、但神體は固より之を視る可からざれば、何時何れの所に出現したるや、日常の事なれば、頗る忘却し易くして、忽ち神怒に觸るゝの恐あり、是を以て西藏人は常に惴々として大に之を警戒せり、萬一之を過てば、神怒に遭ひて、忽ち其の崇りに逢ふの不幸あり。然れども、此の神は、伶俐にして極寒の時季には、常に座を爐邊に占め、夏季には、戶外に其の位置を占むといふ。

普通人民の氣質は溫和にして、往々快活なり、殺人の如き慘酷なる所業は、蕃族を除くの外、殆ど之を知るものなし、是れ佛教入りてより、人の生命を大に尊重すべきことを知りし効果ならずんばならず、然れども、毫も信義を重んずるの念慮なく、彼の術數に富める支那人との交通ありしより、益々此の惡むべき性質を助長せし傾きありて、其の沒道念なるに比すれば、支那人は尙信義の觀念に富み、西藏人に取りては、實に親切懇篤なる朋友たるなり。

西藏の家族制度は極めて異様なり、一婦多夫は此の國に普通にして、然も其の夫たるものは必ず兄弟なり、妻は兄弟數人の共有物なりと雖ども、同時に兄弟數人相同居すること殆どなし、一人家にあれば、他は悉く家畜と共に外に出て、若しくは商用の爲めに他方に出づるを常とす、美人は多く其の兩親より之を買ひ取る、其の價至つて高く、三十四の犛牛を以てせざれば買ふこと能はざるものあり、西藏人は、一妻多夫の制を好みて此の習俗を保存せり、其の見解に由れば、經濟的にして、家族親密に、家産を増殖するに便なりとし、婦女も亦數夫に事へて、一家輯穆の誼を完くするを以て名譽とせり、且つ此の制は、男子をして交代に外に牧畜せしめ、又交代に長時

間の旅行を爲すことを得しむ、若し此の制微りせば、妻たるもの、保護場を發見すること困難なり、殊に婦女子も亦唯一夫に事へて、若し其の夫死なば、己れ忽ち寡婦たる不幸を蒙らざるを得ざれども、多夫なる時は、決して寡婦たる不幸を見ることなしと信ぜり。

此の國の人は、旅行先にありても、通常其の地の婦人と豫め時を限りて、一時的の婚姻をなせり、其の時期は一ヶ月定めのものあり、或は一年若くは二年繼續するものあり、此の婚姻は其の時期の繼續する間は、互に其の約束に束縛せられざるべからず。

又南部地方に於ては、富貴の者は印度の習慣に感化せられて、間々一夫多妻なるものあり、又純然たる一夫一婦の者もありて、世界のあらゆる婚姻法は、此の國に於て見ざることなし。

結婚法は甚だ緩漫なり、男女は正式の婚姻の契約をなす前に當り、其の相適合するや否やを調査せんが爲めに、或る時期の間、共同の生活を營み、意氣相投合すれば嫁娶の約を結び、黃道吉日を撰びて、親戚知己を招く、親戚知己は相集りて、絹の哈達を

以て親郎新婦を裝飾し、宴を張りて之を祝す。然れども此の結合は、自然的にあらずして、婦人は更に富める者を撰びて現在の夫を棄て、走り、夫は亦妻の容色衰ふる時は、直に之を棄て、更に新婦を求めんとす。姪奔俗をなし、不義密通は、殆ど當然の事として人の之を怪しむ者なし。

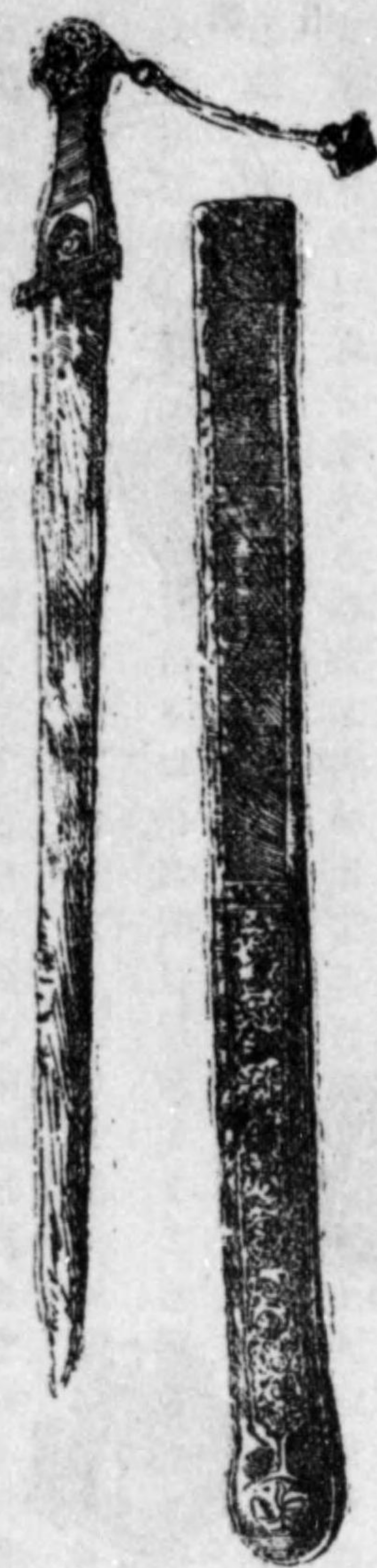
校補者云ふ、西藏は隨處俗を異にすれば、此の婚姻法は、某地方の習俗なりと思ふべし、全國の婚姻法を列舉せんは、煩雜にして此書の能くする所にあらず、讀者諒せよ。

西藏婦人の地位は、一方より見れば甚だ卑賤なれども、一方より見れば甚だ尊貴にして、一家の女王なり、日常自ら勞働に服して、自己の財産を有し、一家の全權を掌握せり。

祭日の婦人の盛装は極めて華麗なり、讀者は或は西藏婦人の頭髮を見たることあらざるべし、此の國の邊徼未開の部にありては、頭髮は亂れたる布箒の如くなれども、他の稍都會めきたる所、及び殊に首府拉薩の附近にては、流石に幾分の手入届き婦人は百條許の辨髮をなして、肩より背に垂れ刺繡せる絹布の上狭く下廣き領巾

の上に懸れり、此の領巾には、金銀寶石を以て裝飾を施し、金銀珠玉の耳飾をなし、其の額には寶石にて裝飾せる布を纏ひて、其の状恰もラジャ (Rajah) 佛の像に施せる銀の裝飾に等し、兩手にはさも重からんと思はるゝ程の銀の指環を箝め、又耳飾を着けたり、金銀寶玉を用ふること贅澤なるは、西藏婦人は蓋し世界屈指の一なるべし、貧民と雖ども其の裝飾の華麗なるを見れば、如何に此の國が貴金屬に富みて、金銀の産出無量なるかを知らむ。

第二十圖



金銀にて裝飾したる西藏の刀劍

托、銀製の蓋及び銀製の匙子にて茶を喫する男子を視たりと、ロツクヒール氏曰く、男子も女子と同じく、許多の金銀寶石にて其の身邊器具に裝飾を施せるを視たり、即ち銀を以て刀劍の柄及び鞘、鞍、銃、火打箱、及び木の盆等を裝飾し、又耳飾、指環、魔術箱等は、此等の金屬を以て製し、珊瑚及び土耳其玉を鑲めて之を飾れりと。

西藏にて、凡そ人に見ゆる時は、其の人に向て、我か兩臂を地平に伸すを以て普通の禮とせり。唐書に拜は必ず、手地に據り、犬號をなし、再揖して身止るとあるは、當時の禮なりしならむ。西部阿里地方にては、官長に見ゆるに帽を脱せず、只右手を以て、額上より指し、唵嘛吽と三度念誦するのみ。土人が官吏に遇ふ時は、帽を脱し、兩手を垂れて、路傍に立ちて拜す。土人の官吏が、駐藏大臣又は他の支那派遣の官吏に對する禮も、亦是の如し。最も奇なる禮式は、舌を出すことなり。是れ土人の最敬禮にて、土人の官吏たる者より、下一介の人民に至るまで、達賴喇嘛若しくは札什喇嘛に謁する時は、皆帽を脱し、合掌して舌を長く口外に伸し、頂禮すること三度、手を垂れ、足を聚め、氣を殺し、鞠躬如として法座の前に詣るなり。此の時達賴班禪は、拂手を以て其の頭を拂ひ、或は手を以て其の頂を摩すといふ。斯く達賴班禪より親しく其の頂を摩

圖二廿第



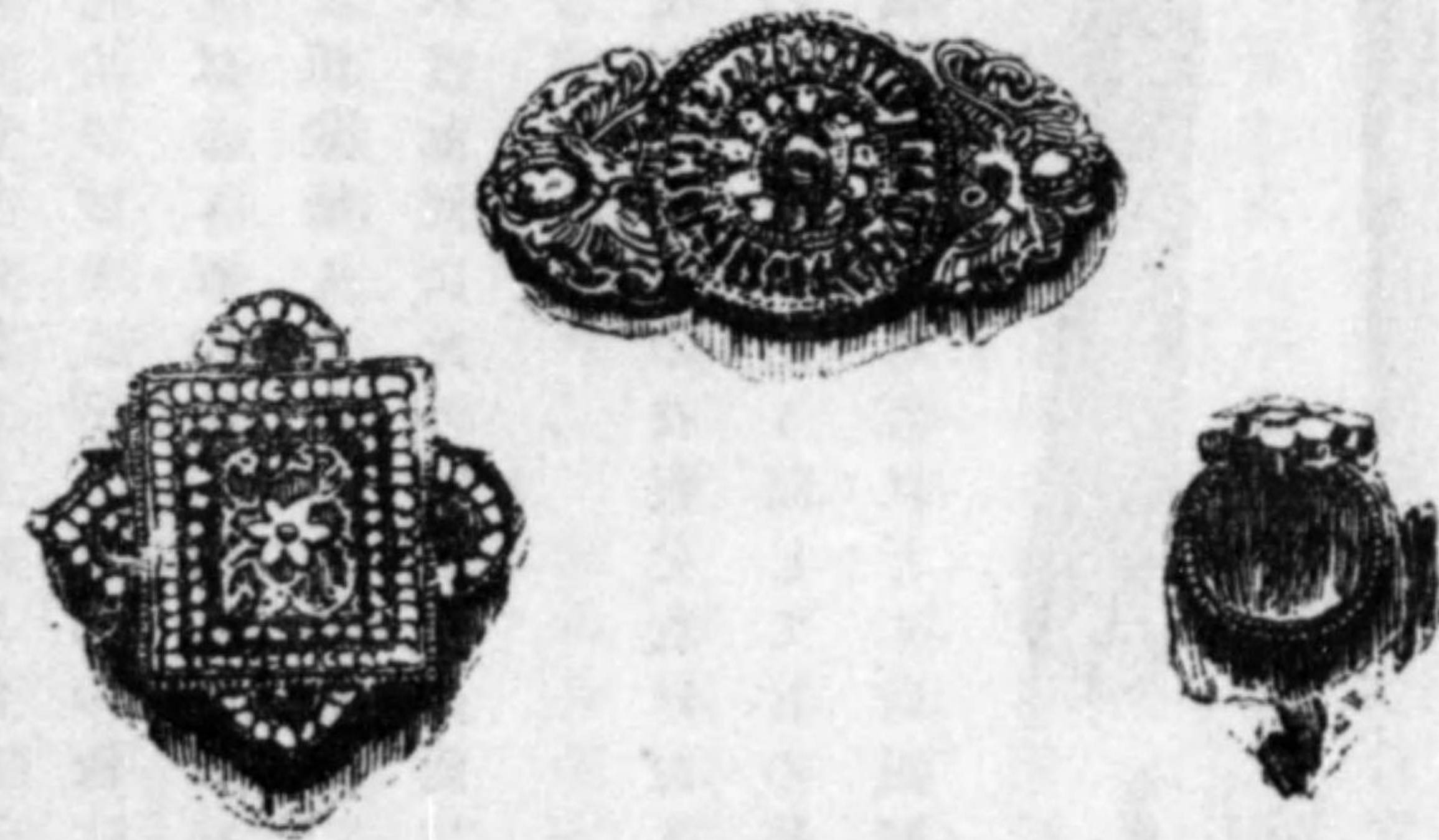
環耳の銀

圖三廿第



金銀を鑲め
たる銅殼の
火打箱

圖四廿第



品飾裝用人婦

小兒に對する風

せられたる者は、至大の榮譽にして、幸福の兆とし、人皆之を羨望すと云ふ、大唐西域記によれば、印度敬禮の法に、足を舐め踵を摩する法あり、西藏人舌を出すの禮法も、或は之に基くものならんか、若夫れ哈達贈答の事は、既に前に述べたれば此に省く、西藏人は、大に小兒を好愛せり、之に反して老人を冷遇する風あるは、全く支那の俗と相反せり、西藏は、他國に比すれば小兒は至つて乏しきが如し、而して父母の其の小兒を愛する様は、唯其の無邪氣なる愛らしき斤言交りの言語を聞きて、笑ひ戯るるに過ぎず、即ち一種の玩弄品視するに過ぎざるなり、男兒は父親に屬し、女兒は母に屬す、少兒の生るゝや、先づ獸脂又は油を以て全身に塗擦すと雖へども、頭部には之を塗らず、是れ少兒をして、死に至らしむるの恐あればなり、沐浴は生れて十五日目に始めて爲さしむといふ。

女兒生れたる場合には、生後二日、男兒生れたる場合には三日、朋友知己及び近隣の人々來りて其の慶を述べ、*Chung* (西藏の酒)と稱する酒と、幸福を祝する爲めの哈達とを送くるなり、其の哈達の一は生兒の頸に纏ひ、他は兩親に與ふ、次で祝宴を張り、或は歌ひ、或は跳り、人皆醉倒るゝに至るまで夜を徹して鯨飲す、若し其の母に

兒童教育

して伶俐なる者は、是の如き醉醜をなすに至らず、僅かの酒を味ひたる後、直に其の寢所に就きて睡眠すといふ。

少兒稍成長すれば、火を吹くこと、一種の鞣にして、小羊皮にて作り、其の一端に鐵の嘴管を附着したる不器用なる器械なれども、其の効用極めて多大なり、井水を酌み來ること、釜中の食物を攪き拌すること、薪炭を採集すること、及び家政の一部分を教育するなり、漸く長すれば、出て、家畜を監視す、其の僧院に行くべき運命を有するものは、之を學校に入學せしむ、此の學校は、兒童を遇すること極めて嚴酷にして、讀書の覺え悪しきか、或は習字に過ある時は、教師は、扁平なる革の鞭を以て、横さまに其の胸部を打つ、石盤は、黒塗の木板にして、膏を塗り、之に粉末の白粉を撒布したるものなり、習字には木筆を用ひ、筆を運ぶに従ひて、白墨を剝き去り、其の黒地を現はす、懶惰なるか、又は成績不充なる時は、其の保護者たるものは、公に笞罰を受けざるべからず。

輪廻即ち轉生の説は、深く國民の腦裏に印し、日常の生活に應用せられたり、故に詩歌に物語に、一々之を證明せざるはなし、此の輪廻は、單に人類の間に行はるゝのみ

喇嘛の變

ならず、人と下等動物との間にも親しき關係あるものとせり。此説は喇嘛に苦痛と壓制との恐るべき機關を供せり。喇嘛は人々の吉凶を占考せんが爲めに、一種の雙陸盤を有し、其の上に骰子を置けり。盤面には過去、現在、未來の三世を示さんが爲めに、種々の書を繪けり、而して骰子と此の盤面の繪畫と符合する様に造れり。骰子を振りて出てたる數は、即ち怖るべき先途の運命を卜するものなり。迷信者は其の怖るべき運命を解除せんが爲めに、僧侶の保護を得んと欲する餘り、漸次に其の財産を褫き取らるゝを知らざるなり。

人々皆神佛御守護の符を身に附け、又一般に經典の一片を色系にて緊縛するか、或は金屬の小箱に容れて之を懷にせり。其の他佛舍利、佛の着けたる衣服の一片、又は佛像に被せたる衣服の一片、或は孔雀の羽を所持せり。家族の護符として神秘の組合せ文字あり、之を魔紙をて包み、狗、山羊、羊の毛を以て捻れる糸にて縛り、更に其の全部をツカネ鼠の皮にて包みたり。此の如きものは家内の護符にて、其の觀念は家族的元素の一致を祈るなり。又獐猛なる番犬の攻撃の豫防策として、各旅人は足ソコ械口網を施こし、金剛に繋ける犬の書を護符とせり。道に踏み迷へる旅人、及び暴風雨に遭

遇したる時、之を救濟せんが爲めには、馬を繪ける紙を風に飛散することあり。咀法は尙是に止まらず、一人の政府の魔術家は、毎年華かなる行列をなして拉薩府に至り、當年中の豊凶、其の他出來事を豫言す。彼は達賴喇嘛を訪問するのみにて、其の他を訪はす、却て官吏の方より之を訪問せざるべからず。西藏人は此の豫言者を以て、國家の經濟上、必須缺くべからざるものと思惟せり。若し之に一事件の判斷を依託するには、謝金として十「タンカ」(Tanka、六「ペンス」の價)乃至一萬「タンカ」を呈し、並せて其の願意を紙面に認めて呈せざるべからず。數多の請願者の來り集るを見て、豫言者は徐に帷幄を開き、暫し神に念し、請願者に供米を投し、やがて其の身體顯ひ出し、遂に無我無中の有様となり、請願者の間に答へて、其の吉凶を開示するなり。若し人ありて、如何にして私の用地に雨を得べきかと問はば、其の答は、曰く祈禱を立つてよと。

西藏にては醫を厄木齊イムチといふ。其の療法極めて幼稚なり、而して土人は醫の投藥よりも、寧ろ喇嘛の呪法、脈勝を願へり。殊に奇異なる習俗は、若し家内に病人ある時は、家人は大に注意し、百方を盡して患者の日中の睡眠を妨害せり。是れ患者日中に

睡眠する時は死亡の恐ありと信するが故なり、患者の家に喇嘛を請すれば、喇嘛は汲々として悪魔を退治せんか爲に晝夜鏡鏡を打ち、大鼓を打ち、恐ろしきまで喧騒せり、疾病には、護符を買ひ求めて之を以て治し得べしと想像し、或は護符を飲ましめ、或は鏡上に護符を反照せしめて、之を洗ひ去るあり、或は神佛に供へたる水を飲ましむることあり、セウカー氏 (Shaw) の話に依れば、某患者は護符として佛典の數頁を飲み盡せしことありといふ。

喇嘛は、射利に就きて大に其の權力を振へり、セウカー氏曰く人あり金錢の支拂をなす能はざるか、又は支拂を好まざる時には、喇嘛は其の人を咒咀して痿縮せしむと云々、又惡慮非道なる人の掌中に落ちて憐むべき有様に陥らんことを感ぜしめ、或は我が收穫は大に不足し、家畜は死亡し、自己及び家族は厭ふべき病の爲めに困めらるゝならんと感ぜしむ、斯くて喇嘛は世人に愛重せらるゝにあらずして、唯其の權能を恐怖せらるゝのみと。

律法

律法は極めて横暴なり、喇嘛は腰掛に坐すれども、犯罪人は勝手次第なり、其の刑罰は罰金を科せられ、或は手足を斷たるゝことあり、重罪犯も其の處罰を金錢にて償

葬禮

ふことを得べし、國內普通の犯罪は竊盜ありとす、西藏人は其の誰たるを問はず、決して我が室内に他人を留むることを好まず、又其の兄弟と雖も決して之を信用することなし、小盜は西藏人の巧妙なる技術なり、拉薩府内乞食の一半は一手一足、若くは一眼を失へるもの多し、是れ曾て犯せる罪ありて、加へられたる體刑の結果なり、盜は時としては荆棘を以て笞ち、又は裸躰として山中に放逐することあり、囚人は慘酷に之を拷問し、重罪犯には水中に浸溺せしむる法あり、斯く慘酷なる刑あるに拘らず、血を濺ぐことを嫌惡せり、是れ佛教の觀念に基けるなるべし。

人民は、芝居、行列、及び各種の興行に狂奔せり、特に悲愴の音樂を嗜好す、此の性情は大に喇嘛教の發達擴布に必要な機會を與へたりと謂ふべし、喇嘛の重なる收入は、亡者ある家より得る處の布施なりとす。

西藏人死すれば、喇嘛來りて靈魂を抜き取るまでは、其の遺骸を動かすこと能はず、少しにても之を動かせば、靈魂逃れ出て、妖鬼に捕獲せらると信ぜり、故に白布を以て亡者の面部を蔽ひ、徐に喇嘛の來るを待つ、已にして喇嘛の來り到るや、極めて靜肅に亡者の枕頭に坐し、悉く戸牖を閉鎖し、然る後西方淨土即ち極樂 (Sukhavati) に

至るべき方位を示せる歌を唱ひ、最後に己か食指と拇指とにて、亡者の帽より垂る三四本の毛髪を握りて之を抜き去るなり、是れ頭骨に孔を穿ちて、靈魂を逸せしむる方法なりとす。

喇嘛の卜者は、天體を窺うて、埋葬の時日及び其の方式の種類を定め、然る後遺骸を坐禪せしめ、綱を以て緊く之を縛り、室の一隅に安置す、かくて親戚故舊には、埋葬の時日を通知し、此に響應始まりて數日繼續するなり、宴席にては各自其の皿に盛れる所の食物の一部を以て必ず亡者に供せざるべからず、而して其の間數人の喇嘛は終日終夜紙數を分ちて、分業的に讀經し、再三再四之を反復せり、是れ讀經の分量如何によりて、亡者に與ふる功德に多少ありと信すればなり。

喇嘛の狡猾なるものは、亡者の貧富によりて往て宣言して曰く、憫むべし此の亡者の靈魂は、地獄に墮つべし、之を救ひ出すには若干の費用を投じて、其の回向を營まざるべからずと、遺族は其の言ふが儘に費用を給し、やがて、此の儀式を終れば、彼は復た曰く、未だ完全ならずして、靈魂の一部は尙中有に迷ひ、一部は尙ほ體內にありて出づること能はず、之を導きて淨土に赴かしめんには、更に回向せざるべからず

と、斯くて再三回向供養に托して、僧侶は其の衣囊を肥すことを得るなり、埋葬の日至れば、更に饗宴を張り、宴畢りて行列は進行す、會葬者は、哈達を亡者に呈し、其の一端を遺骸に附着し、或は親族のものは、哈達の一束を其の背に負ひ、喇嘛は哈達を以て道案内をなし、鼓を鳴らし、大腿骨にて製せる喇叭を吹き、徐々と進行し、屢々後邊を顧みて、遺骸と共に出立せし靈魂を招けり、若し亡者にして生前喇嘛たりし時は、斯の如きことをなすの必要なし、何となれば喇嘛は本能的に其の通路を知りたればなり。

行列は丘陵の項に攀ち登り、此處に遺骸は或は埋葬し、或は火葬にし、或は斬り裂きて鷲の餌食に供せらる、鷲は之を見るや卒然飛び下りて之を掴み食ふ、土人は鳥類の體內に埋葬せらるゝを以て名譽と思へり、此の習慣の由來は固より印度に在ること論を俟たざれとも、一は地面の堅く氷結したる時は、普通の方法にて之を埋葬すること極めて困難なると、茶毘の烟とせんにも木材なき地方にては、其の費用多くして、到底通常人の堪ふる所にあらざること益々是の如き奇習を助長せしにはあらざるか、ヤムドク(Yam-tok)湖地方に於ては専ら火葬行はれ、又水中に放棄する

ことあり、又犬に與ふることあり、或る喇嘛族の如きは、此の目的に供せんが爲めに、數匹の糞狗を飼養せりと云ふ。

以上は、死亡者ある場合に、親族の費用にて、法に據りて執行せる儀式の一端を示せるなり、若し夫れ喇嘛を火葬したる灰、及び喇嘛の畫像を焼きたる灰は、之を粘土に和して捏ね、大賞牌として所有するを以て無上の名譽とせり。

西藏人中には、陶器師、肖像の鑄造師、金工及び石工等あり、今より三百年の往時に、某技師は、雅魯藏布江に、八個の鐵鎖よりなれる吊り橋を架設したることありしが、其の中の二三は今尚ほ存在せり、此の技師は、西藏人の今尚神として崇敬する所なり、此の國には、斯の如き卓絶せる天才にて、適當の評價もなく、又保護もなくして、靜に潜伏したりしことは論を待たざる所なり、殿堂の屋根を葺く黄金板は、需用多くして、其の製造巧なり、ハツク氏の記載する所に據れば、拉薩府には、梵鐘の鑄造所及び佛像を販く大商店あり、此の地は、偶像に富みて、到る處岩石の上に立ちたり、而して各家屋も、夫れ／＼佛像を安置して、概ね寺院たるの觀あり。

畫像も亦夥し、佛畫師は殆ど喇嘛なり、畫像は繪絹に畫けとも、或は石灰若くは一種

の粉末を塗布せる綿布にも之を畫けり、其の方法は、小孔を穿てる形付板を用ひて輪郭を畫き、其の上に木炭の粉末を篩ひて畫くなり、彩色は凡俗にして濃稠なり、之に膠を施して、濕氣に逢ふも、其の畫像の消滅せざる様に注意せり、是の如き畫像は、尙我が國の懸物の如く、之を佛壇に懸け、其の一隅には、畫者自ら盛裝したる自己の肖像を畫けりと云ふ。

喇嘛の美術中、最も珍らしきものは、バタに着色し、之に薄肉彫を施したるものにて、最も有名なり、此の美術品は、クムバム地方に多し、バタは全國何地も、各種の物品を塑造するには好材料として用ふれども、此の地は最も其の名を博せり、ロツクヒル氏の記載に據れば、此の薄肉彫のものは長さ三十、ヒート高さ十呎許にして、之を架構にて支持し、別に、バタを滿てる小き眞鍮の碗數十百個を併列し、其の各個に木綿の燈心を挿して之に點火せり、其の彫刻せる所の題目は、固より宗教的にして、各種の神佛の像を彫り、或は極樂地獄の光景を現はせり、而して其の中央にあるものは、他よりも四呎許高くして、其の後邊には長き行列戰爭等の如き、種々の模様を彫りたり、又高さ八呎若くは十呎を越えざるものは數百ありき、此のバタの大板上に施

六字の陀羅尼

したる微妙精巧なる細工と、其の間を逍遙徘徊せる、喇嘛の華麗なる装とは、相掩映して光彩燦然たり、此の薄肉彫りの一個を仕上ぐるには、殆ど三ヶ月の勞力を要す。而して製造人を獎勵せんが爲めに與ふる賞は、只一言の褒詞に過ぎず、されども、其の細工の最も精巧を極めたる者には、僅かの金錢を賞賜することあり、此の職人は、年々歳々新工夫を凝らし、嶄新なる技倆を振へる、卓拔なる技師も輩出すと云ふ。達頼喇嘛及び札什喇嘛より、其の禮拜者に對して、粘土製の大賞牌を下賜することあり、石に彫刻したるものは至つて乏し、然れど六字の陀羅尼^{マニ}、又は六音の呪と稱するものは、間々之を視ることあり、其の陀羅尼とは

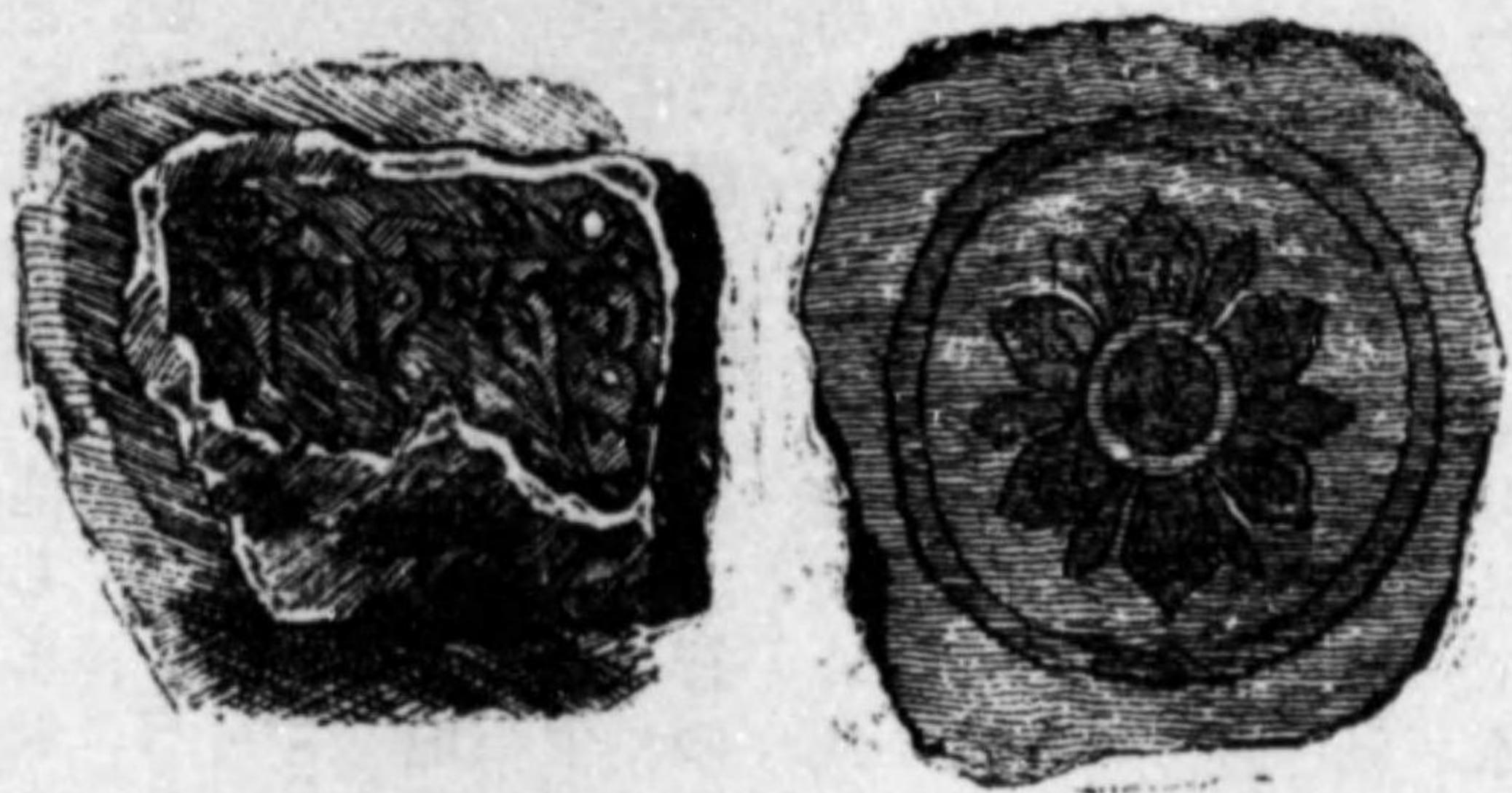
ཨོཾ་མཎི་པདྨེ་ཧུམ་

Om mani padme Hum.

唵 嘛呢 叭嘛 吽

にして、此の語を染め出せる綿布は、隨處に高く翻れり、其の高さは固より區々にして一定ならず、又祈禱筒の周圍に銘刻し、老若男女は朝に晝に晩に之を念誦し、山の

圖 五 十 二 第



○六字の陀羅尼を石に彫刻したるもの
 左方は普通の形状
 右方は蓮華の形状

側面、壁、家屋の門戸、路傍の岩石にまで之を彫刻せり、其の意味の如何を問へども誰も之を知るものなく、然れども此の陀羅尼の御利益に就きては、人々驚くべき信仰を有して、何れの時にても幾度となく之を書き、之を讀誦し、之を反覆せり、此の陀羅尼を文字上より直譯せば *O Jewel in the Lotus!* 即ち嗚呼蓮華上の寶珠となれども、原語の意味よりすれば單に「嗚呼蓮華上」と謂ふべきのみ、此の單純なる語にして、斯の如く神聖に、此の如く功德あるは、殆ど解すべからざるなり、蓋し西藏人は、彼の蓮華上に安坐せる觀世音菩薩に祈禱することなりと思考せるならん、西藏人は、觀世音菩薩は權化して達頼喇嘛となれりと信仰せり。

達賴喇嘛は、西藏語にて、ギャル、ワ、リンポチエ (Gyal-wa Rin-po-ch'e) といふ、即ち大寶法王と云ふ義なり、而して札什喇嘛は、寶珠と云ふことにして、其の稱號は西藏語にては班禪、リンポチエ (Pan-ch'en Rin-po-ch'e) と云ふ、即ち普覺眞智如意寶珠と云ふ義なり、モニア、ウヰリヤム氏 (Monier William) の話に據れば、此の陀羅尼の起原、及び其の眞意の如何は、姑く問はず、地球上何れの地方にても、人として斯の如く再三再四反覆して、祈禱をなす者を見ず、西藏人は此の陀羅尼を以て、災難を拂ふの萬能藥、總ての智識の撮要、總ての才智の倉庫、總ての宗教の摘要なり、として之を信仰せりと、其功德の實際の秘訣は、此の陀羅尼の六字は、人類の未來に當れる、六個の門戸の何れにも潜勢力を有するものなり、換言すれば、全生活物の通過すべき、輪廻の六道の何れにも潜勢力を有すと云ふことなり、故に此の陀羅尼を數々反覆すれば、反覆するほど、其の進路益々短縮して、各道の苦患を免かるゝことを得るなりと思へり、此の陀羅尼は、綿布又は紙の巻物に記して、祈禱筒の周圍に纏へり、此の祈禱筒 (Prayer Cylinder) は、桶狀にて水か、風か又は器械仕掛にて廻轉す、其の狀は大なるものあり、又小なるものありて、數個を排列し、縦軸より突出せる凸縁ありて、恰も糸卷の如

祈禱筒

圖六十二第



祈禱筒を廻轉するの圖

し、參詣者は、其の前を通行する毎に之を廻轉するなり、參詣者は常に尊敬の符徴として、右方に通行すれども、喇嘛は之に反して左方に通行し、以て俗人と區別せり、或る寺院にては、大なる祈禱筒、及び此の祈禱筒の模形百萬を有せり、シエーウヰリヤム氏曰く、若し西藏國に蒸氣力を輸入せば、必ず先づ此の祈禱筒を廻

轉するに應用せらるべしと、

祈禱壁

祈禱壁 Mani wall は、特別に彼の神聖なる陀羅尼を銘刻せる板を貯藏せんが爲めに、長さ低き石の線にして、斯の如き壁を建築するを以て功德とせり、喇嘛は國內を遍歴し、人々の需に應じて、岩石又は板上に此の陀羅尼を彫刻したれば、全國到る處に之を見ざるはなく、隨ひて其の形狀も亦様々なり、

第十三章 言語文字

言語

今ロツクヒル氏の調査せし所によりて、左に東部西藏の言語、即ち青海地方の發音の特性を示し、并せて拉薩巴塘^{バダ} (Bat'ang) 及ツアロン (Ts'arong) 地方の發音に關する字音譜を舉ぐ、以上三者中に在りて、拉薩音は其の高尙なるか爲めに、輒近標準語として國內一般に之を採用せらるゝに至れり。

青海地方の發音は、國內他の地方よりは鋭し其の理由は、博言學者の研究を待つもの極めて多し、此の地方の語集及び句法は、實際拉薩と異らず、勿論支那語、土耳其語、及び語源の明ならざる數多の土語はあれども、拉薩の土人は直ちに之を理解し得る所より見れば、其の特性の著るしき相違あるを見ざるなり。

博士ターリエン (Terin) 氏は、東部西藏の種屬に就きて曰く、支那境附近の東部地方には、ギヤールン (Gyarung) 即ちチェンツユイ (Chen-tui) と稱する數多の種屬ありて、其の言語はホヂソン氏 (Hodgson) の研究に依れば、ヒリツピンのタガルス語に酷た類似

○文字

西藏の文字は、通密織善喇が印度「デバナガリ」文字に擬して製作したるものにて、其の數三十字母あり。其の内母音と稱すべきもの二字、子音と稱すべきもの二十八字なり、今左に其の發音字跡を示す。

ཀ	ཁ	ག	ང	ཅ	ཆ	ཇ	ཉ	།
ka	k'a	ga	ŋa	ča	č'a	ja	ña	
ཏ	ཐ	ད	ན	པ	ཕ	བ	མ	།
ta	t'a	da	na	pa	a	ba	ma	
ཅ	ཆ	ཇ	ཉ	ཐ	ཕ	བ	མ	།
tsa	tša	dsa	wa	zà	za	a	ya	
ར	ལ	ཤ	ས	ཏ	ཨ			
ra	la	s'a	sa	ha	a			

母音は如くなれども、其の用所を異にし此の三十字母の外に四個の記號あり、之を用ひて音に種々の變化を與ふ、其の記號とは

「i」即ち「イ」にて之を吉固といひ、
「u」即ち「ウ」にて之を紗補佳といひ、
「e」即ち「エ」にて之を微ト
といひ、
「o」即ち「オ」にて之を納囉といひ、此の記號の上若くは下に引ける横線は、只此の記號を文字の上若くは下に附くべきことを示せるまでにて別に意味あるにあらず、即ち四種の記號中唯「ウ」のみ文字の下に附くべきものなり、今此の記號を用ひて音の變化の一斑を示せば左の如し即ち母音「ア」字に此の記號を附すれば「イ」「ウ」「エ」「オ」となり(1)又子音「カ」に之を附すれば「キ」「ク」「ケ」「コ」となり(2)更に其の下に母音「オ」を添ふれば其の長音となる。

又此の四記號の外に。點を字頭に加ふればm即「ム」又は「ン」の發音を示す例は「om」即「オム」となるが如し、以上述べたる所によりて「本郷區」と綴らば左の如し而して「キョー」「リョー」等の如き音を表すには文字を重ねて之を表示す、例は「キョー」にて「キョー」なるなり仍て「リョー」即ち「rōy」は「リョー」を變じて記號として用ひたり、字の右肩に「v」を附するは綴字を表する記號にて之

ཨ	ཨ	ཨ	ཨ	ཨ	(1)
a	i	u	e	o	
ཀ	ཀ	ཀ	ཀ	ཀ	(2)
ka	ki	ku	ke	ko	
ཀ	ཀ	ཀ	ཀ	ཀ	(3)
kā	kī	kū	kē	kō	

「シャット」の前には「ツェツ」を附けざるを例とす、但「v」の字に限りて之を兩用し「v」
と記するなり。今左に五六の演習の例を示す。

を「ツェツ」と名く、又一は英語の「コンマ」「セミコロン」「コロンの」に等しきものにて之を「シャット」といふ、「シャット」の前には「ツェツ」を附けざるを例とす、但「v」の字に限りて之を兩用し「v」と記するなり。今左に五六の演習の例を示す。

ཀ་ར་	ka-ra	ཀ་	kar	སྒྲིབ་	sock	གོ་	got	ཐོབ་	top	ཀྱི་ར་ཀྱི་ར་	kyir-kyir	ཀྱི་	kyi	ཀྱུ་	k'yu	ཕུག་པོ་	č'ug-po	བུ་	du-wa	ཐོན་མི་སམ་བྷོ་	Tonmi sam bhota	སྐྱོང་པོ་བཅོམ་པོ་	šrom-tsan-gam-po
ཀ་	ka	ཀ་	kar	སྒྲིབ་	sock	གོ་	got	ཐོབ་	top	ཀྱི་ར་ཀྱི་ར་	kyir-kyir	ཀྱི་	kyi	ཀྱུ་	k'yu	ཕུག་པོ་	č'ug-po	བུ་	du-wa	ཐོན་མི་སམ་བྷོ་	Tonmi sam bhota	སྐྱོང་པོ་བཅོམ་པོ་	šrom-tsan-gam-po

(注意)西藏は中央東西等地方に隨ひて其の發音に變化あるとを知らざるべからず例は「v」の前にある「v」及び「m」は東部西藏に於

て「m」「ム」と發音するが如し即ち部西藏にては「bé-ma」と發音するが如し。此の他地方によりて少異同ありと知るべし。

せりと云へり、然れども此の語はチエンチユイより來る、マンヤカ語にして、巴塘打箭爐、カンゼ、ゼクンドーの住民の如きは、一樣に西藏語を談話せり、就中教育あるものは、拉薩人の如く容易く自由に發音せるなり。(卷末の表參看すべし)

第十四章 政治

西藏は、清國の保護國と謂ふ可し、國の主權は、固より達賴喇嘛の掌握する所なれども、外交、兵事は、北京政府より派遣せる駐藏欽差大臣の手中にあり、駐藏大臣は、理藩院に屬し、正副二人ありて、參贊の大官二人、會計官二人ありて之に屬し、拉薩及び日喀紫に駐在せり、尙此の次位の官人三人、屬員三人ありて、各所に分駐せり、西藏に駐屯せる軍隊は、滿洲旗軍四千五百人なりしが、時に綠旗漢軍を用ひしことあり、凡そ三年を以て交代せしむ、此の駐屯軍人は、拉薩にありて土人の婦を娶り、商業に従事せるもの多しといふ、兵員は時によりて増減あれば、一定の數を掲ぐることはせず、此の清國派遣兵の外に、尙土兵若干あり、四川總督は、直接に西藏の行政上に干涉す

る權能なけれども、接壤の地にあれば、北京政府の内命によりて、監視の地位に立てり。
 達頼喇嘛の政府は、民政及び宗教事務を管掌せり。然れども達頼喇嘛の權力は、擧げて之を噶倫ト(Gyalpo)に委任せり。噶倫トは四大寺院の住持中より撰び、清國政府の認可を得て就職せるものにて、終身官なり。噶倫トは名は達頼喇嘛の宰相なれども、實は西藏國王にて、達頼喇嘛幼穉なるときは、攝政の位地にあり。
 此の一種の國王の下に五人の大臣ありて、戸部、司法、大藏及び宮内の事務を分掌し、其の一人は特に喇嘛より採りて、専ら宗教の事務を掌らしむ。地方には地方官あり、烏ニ藏(Tsan)阿里(Nari)喀木(Kham)の四縣には知事を置き、他の各地方には此の四縣の知事より稍低き地位の官人を置けり。又數多の土司(獨立の小酋長)ありて、其の四人は殊に嚴然一小王國の觀ありといふ。札什倫布も亦此の土司の一なり。土司は何れも駐藏大臣に直轄せらる。
 人口の上より見れば、西藏の中心は、中帶及び南方の二部にありとす。而して中帶最も主要なり。之を四縣に區分せり。西より數ふれば第一は阿里(Nari or Gnar)といひ、次

政治上の
地方區分

を烏(三)及び藏といふ。此の二者は通常相合して烏藏或は烏斯藏と稱す。最東の四川省に接する處を喀木といふ。阿里は即ち小西藏と稱する所にて、拉達克及びバルチを含み、英領印度に接して、コルスン(Khorsum)あり。泥泡耳に接して、マンガイユール(Mangyul)あり。

烏藏は、雅魯藏布の沿岸、最も肥美なる地を占め、實に此の國の中心たり。主要なる市街寺院皆此の内にあり。今西より重なる都會寺院を數ふれば、雅魯藏布の南岸にNgalyheあり。此より河流に沿うて下ること八十五哩にして、日喀紫の都邑ありて、此に札什倫布寺あり。此より更に流に従ひて下れば、其の支流に沿うて、首府拉薩あり。喀木の首府は察木多(Chamdo)といふ。其の東南に原野あり。又巴塘(Batang)裡塘(Litang)の兩邑あり。従前は其の東なる打箭爐も西藏領なりしが、今は四川省に屬せり。然れども其の居民は人種學上、純然たる西藏種なりとす。

第十五章 人種 史畧

人種學上の見解に依れば、西藏人は蒙古種に屬す。然れども全國皆然るにはあらず、身長は西方殊に矮し、カンニンガム氏の説によれば、平均身長五呎二吋なり、中央部は稍之より高し、其の体格を概論すれば、強壯の方にて、四肢細く、目は僅に歪みて黒く、髭鬚なく、皮膚は褐色にして清らかなれども、何となく野卑なる面貌を有せり、然れども英敏の相を備へたり。

西北部には土耳其種あり、之を「ホル」(Hor)と云ふ。東北に住める蒙古種を「ソク」(Sok)といふ。是れ支那人か古來西蕃(Sinan)と稱し、又西藏人、蒙古人とを合せて「西戎」と稱せしものなり。支那の境に接したる東部には「Gyarung or Chentui」と稱せる野民あり、而して南部には「緬甸種」と同族なる「羅々」(Lolo)、「Lisa」及び「摩些」(Moso)の種屬あり、殊に「アルチントグ」(Altyn Togh)地方に於ては、今尙石器時代に近き蠢愚の野民ありといへり。西藏の歴史は、また充分明かならず、往昔此の國東北の遊牧人種は、支那人の所謂羌(Kiang)として、文字なく、木に刻し、繩を結ひて記號に供せり、支那の文化は、西紀第六世紀までは此の人種の間、に波及せざりき。唐書吐蕃傳に記する所に據れば、西藏の古も亦同様なりき。西藏の文字は、特勒德蘇隆贊の時始めて成りしものなれば、其の

以前の事は、逸として考ふ可からず、西藏の史家は、其の王統の祖を曲解して、印度の釋迦より出でたりと説明すれども、其の妄誕なることは固より辯論を要せず、故に其の往古の史實は、一に支那人の記載に據らざるべからず、西藏族の一人樊尾(Fan-wei)は、西紀四百三十三年に今の甘肅より黄河を渡りて、國を羌中に建てたりしが、其の治世中泥泡耳國より佛徒の反抗を招きしことありといふ。

其の後、論贊素(Gnam ri strong-btsan)に至りて、支那より數學、醫術を輸入せり、論贊素、西紀六百三十年に歿し、子特勒德蘇隆贊立つ、此の人英明にして、雄才あり、貞觀八年、唐に通し、西紀六百三十九年、拉薩城を建て、之をShin-tanと稱せり。王は泥泡耳國王の公主邦木薩(Bri-sham)を娶り、又貞觀十五年、西紀六百四十一年に、唐の文成公主を娶りて、印度及び唐より佛教、其他の文物を輸入せり。王自國に文字なきを憂ひ、印度文字に依りて、字母三十字を作らしめたり。蒙古源流考に曰く、汗年十六歲壬辰に次す、唐貞觀六年、西紀六百三十二年、通密阿努の子、大臣通密織布喇(Tonmi-sam-bho-las)并に其の友十六人を額納特珂克印度に至りて、參究せしむ、是に於て、彼處の班迦達名は、德幹必特雅星哈に隨ひて、音韻の學を傳へ、土伯特の三十字母を證し、云云、以て定めて

三十字母とし、各音韻を分ち、又八大經を編成す、是に於て汗甚だ喜悅す云々とありて、實に西藏の文學、宗教の祖と稱せらる。王は斯く文學上の功績あるのみならず、屢々兵を用ひて東征西伐し、大に版圖を開き、其の疆域、北は于闐に、東は唐に、西は拉達克に接し、南は雪山を越えて印度方面に及び、ベンガル灣の如きも當時は西藏海と云へりとぞ。今日西藏人の最も嗜好物たる茶も、王の時始めて支那より輸入せりと云ふ。王年八十三歳、西紀六百九十八年歿す。次子恭蘇隴立ち尋て歿す。

某書に次王 Mang-srong-mang-bstan は西紀六百六十三年に青海附近の種屬

を征服し、且つ支那を攻撃せしに、又支那人に襲撃せられ、且つ拉薩の宮殿を燒

かれたりとあれども、かゝる王名は唐書及び蒙古源流等に見る所なし。

吃嚙雙提贊王は西紀七百三十年に生る、四十六年間佛教の振興に盡力し、有名なる巴特瑪繼巴幹を印度より聘して、大に經文を譯せしめ、又此の國固有の、ボン教を折服せしむ。王歳六十九歳にして西紀七百九十八年歿す。王は佛教の保護者を以て西藏王中著名なるものなり。王の子及び其の繼承者は、佛の平等觀に基き、社會貧富の別を廢せんことに努力し、三回まで其の命令を發せしかども、終に其の効なかりき

とぞ。

喇勒巴展(Ralpachen)王は西紀八百十六年即位す。佛教を崇ひ、大に譯經の業を興す。時に西藏極盛の時にて、唐と戰ひて之に克ち、國內殷富なり。國人稱して大力金剛手菩薩の化身とす。西紀八百二十一年唐と和し、西唐二國の語を以て記したる碑を拉薩に建つ。德宗の時に建てしものなり。

王は僧侶寺院の制度を釐革して、其の位置を高尙にしたり。王は西紀八百三十八年縊殺され、其の兄立つ、之を朗達瑪王(Glang-dar-ma)とす。朗達瑪王は西藏のチュリアスシーザと稱せられ、大に佛徒を虐待し、廢佛の舉に出でしかば、堂塔寺院一時に破却せられ、西藏無宗教の時と稱す。王佛徒に弑せられ、嗣王兄弟又位を争ひて、東西の二國に分れ、争亂已む時なく、國勢漸く陵夷し、西紀九百二十八年頃に至りては、支那も五代争亂の世なりしかど、西藏は全く西隅に屏息して、復た往時の勢なく、支那人も大に之を輕侮し、其の文書の如きも、支那にては讀む者もなきに至れり。

西紀一千〇十三年達磨波羅(Daharmapala)といふ者來りて主權者となり、佛教大に興る、之に繼ぎし者を有名なる宗教改革者アチーサ(Atisha)とす。アチーサは其の宗

教上に大に勢力を振へり。西紀一千二百四十六年薩迦班廝達(Sakya-pandita)と云ふ者、元の忽必烈に招かれしが、其の後數年、忽必烈は西藏の東部を征服して、烏斯藏都指揮司を置きたり。薩迦班廝達の甥帕克斯巴(Phagspa)忽必烈に用ひられて大に喇嘛教を擴布し、其の歸るに及んで、西藏の主權を委せられ、西紀一千二百七十年より同一千三百四十年まで、凡そ七十年の間、薩迦派の僧侶は、西藏の主權を掌握したりしが、遂に衰へて他の王朝之に代り、凡そ百年間繼續したり、是の時支那にては元既に滅びて、明興れり、明は西藏の八大寺院の最も勢力ある者に其の主權を承認せり。西紀一千四百四十七年、甘丹寺の根敦巴(Gedunpa)札什倫布寺を創建せしが、是の人は即ち最初の大喇嘛なり。次の繼承者は、西紀一千四百七十五年より同一千五百四十一年まで、西藏を統轄したり、後、索諾木嘉穆錯に至りて、蒙古の庫々諾爾(青海)王に招かれ、西紀一千五百七十六年に達賴喇嘛の稱號を與へられたり、之を達賴と稱する始とす。

校補者云ふ、本文は前文達賴號の起源と異なれり、須く此に云ふ所を以て正とすべし。

其の後蒙古王テンギルト(Tengis)西藏の内政に干涉し、且つ之を襲撃せしかば、西藏は清の太祖に書を上り、方物を貢して、其の援助を求めたり、然るに蒙古は再び襲來りて、全國を平定し、第五世達賴喇嘛を擁立したり、尋て西紀千六百五十三年清の世祖は、達賴喇嘛の權力を承認し、封して西天大善自在佛領天下釋教普通鄂濟達賴喇嘛とし、天下の佛教を統領せしむ。

然るに西紀一千七百十七年、康熙五十六年、準噶爾の王策妄阿喇蒲坦の兵侵入して、拉薩を陥れ、達賴喇嘛の繼嗣に干涉せしかども、清兵に撃退せられ、而して清政府は遂に西藏現今の制度を樹立したり。

西紀一千七百八十二年、乾隆四十七年、泥泡耳の廓爾喀(Gorkha)は、札什倫布寺の財寶を掠めんとて突然入寇し、幼冲なる札什喇嘛は、拉薩に逃れ、財寶は皆廓爾喀に掠奪せられたり、是に於て清廷兵を遣りて之を征し、大に廓爾喀を破りしかば、廓爾喀は其の掠奪せし所の物を返し、且つ歳貢を納むることを約して、事漸く平きぬ。然るに廓爾喀は英の同盟國にて、其の兵は英人の訓練する所なりとの理由より、英清の葛藤を惹起したり、是より清廷は不丹及び泥泡耳の國境に哨兵を置き、印度人を西藏

より放逐し、歐米人は勿論ベンガル人、印度人の國內に入るとを嚴禁するに至れり。西紀一千八百八十八年西金の邊境に於て、英人と衝突を起し、まては、西藏は泰平に謳歌せしなり、此の争は一千八百九十年三月十七日、其の局を結びて疆界を確定せしが、通商、牧場及び英西兩國間の公文書の受授等に關する事は、未定の問題として、當時何の決定する所あらざりき、而して是れ尙今日に至るも未定にして、歐米人が一步も此の國に入ること能はざるは實に此の因由あるに由れり。

第十六章 輓近の旅行者

西藏の旅行者は、多く耶蘇教の宣教師なり、今其の輓近の旅行者に就きて、其の旅行の一斑を掲げ、以て後の此の國に到らん者の參考に供す。

「モラビアン」派の傳道師は、殆ど五十年間西藏の西境に在りて運動し、絶えず入藏の時期の到るを待てり、此の驚くべき傳道者中、最も早きもの二人あり、即ちヘード氏 (Heye) 夫婦なり、夫婦は今尙ほ其の地にありて、熱心布教に従事せるは、敬服の至なり。

歐米の旅行者

り、他日西藏に耶蘇教の行はるゝ時期あらば、此の兩人及び其の同人等は、先鞭の功を著けたるものとして、大に其の道の者に賞讃せらるべきなり。

次に宣教師テラー嬢は、支那の國境なる洮州 (Taichuan) より出發し、其の目的は拉薩府を経て、印度の獨吉嶺 (Darjiling) に出でんとするに在りき、然るに滞在數日の中に遂に拘留せらるゝの厄に遭ひて、反對に引き返さざるを得ざるに至れり、嬢は已むことを得ず、其の來りし路とは異なる方向を選び、洮州の南方凡そ三百哩なる四川省打箭爐 (Ta-chieh-lu) に歸れり、嬢は此の禁制地を旅行すること總計一千三百哩、其の中には未だ曾て歐米人の足跡到らざる地方多かりしといふ。

嬢の拉薩府附近の原野に到着せし時は、恰も西紀一千八百四十六年に、佛人ハック氏及びガベール氏の入藏に後るゝこと四十六年、又西紀一千八百十一年に英人マニング氏の入藏に後ること八十一年なりき、此の間、拉薩の眼界に來りたりしもの一人だもなかりき、若し拉薩府を中心とし、百七十哩の半徑を以て圓を畫かば、從來の旅客は、皆此の圏外に達せしのみ、西紀一千八百八十五年には、魯國の陸軍大佐ブレゼツ・スキーク氏 (Prejevalsky) 同一千八百九十年には、佛人ボンパロー及びオルレ

アン公アソリの兩人、同一千八百九十一年には英人ボーウエル氏、同一千八百九十二年には米人ロックヒル氏の如き、何れも此の圏附近まで來りしものなり。然るにテラー嬢は此の線を横斷して、其の到着の終點は、拉薩府まで僅に三日程の所なるナグチユカ(Nagchuka)まで進入せり。

テラー嬢の後一年、佛人ド、ラインス及びグレナルドの兩氏も亦同一の點に到達し、西紀一千八百九十五年には、英人リッ、ツルダール氏、其の妻及び甥と俱に拉薩府の前四十哩の點に達し、附近の丘陵の頂に登り、望遠鏡を以て此の市の模様を眺望せしが、遂に拉薩府を望むこと能はずして止めり、其の後同一千八百九十八年にリジンハート氏は、其の妻と俱にテラー嬢の足跡を追へり。

有名なる大旅行家スヴェン、ヘ、デイン(Sven Hedin)博士は、西紀一千九百〇三年、即ち明治三十六年に西藏探險に成功し、學術上最も有益なる材料を蒐集して歸り來り、佛京巴里地學協會に於て幻燈演述會を開き、精細なる旅行談を試みしが、博士は近々五冊より成る書籍を出版して旅行の顛末を公にせんといへり。

博士の旅行は、茫漠廣大なる新國土を踏破せしものなれば、其の結果は從來行はれ

スヴェン
ヘ、デイン
氏

中央亞細亞の
地圖の
變更

西藏高原
の横斷

たる中央亞細亞の地圖に一大變更を加へしむるに至るべし、博士は千四百四十九枚より成れる長千尺の地圖と、三千枚の寫真とを携へ歸へり、又從來學者間に於て紛々論争したる往古の羅布泊コプの所在問題も、博士の探險に依りて解決せらるゝに至れり、此の湖の沿岸に於て荒廢せる市街、佛閣及び第三世頃頃の西藏の政治並に地文學に關する有益なる古文書を發見せしと云へり。

この旅行は、徹頭徹尾困難ならざるはなかりしが、博士の一行數十人は姿を喇嘛僧に扮して高山を越え、砂漠を涉り、三年と三日の旅行中、二年六ヶ月は、全く他と交通を絶ちたる無人の地を旅行せり、殊にチャクアリクより拉達克ラダクに至るまでの旅行には八ヶ月を費したり、この旅行は、即ち西藏高原の横斷ともいふべきものにて、平地と雖も歐羅巴の最高峯白山モンブランよりも高ければ、空氣稀薄にして、一行は呼吸の切迫を覺ゆること甚だしく、遂に全く呼吸する能はざる者あるに至り、隨行人の中四人は哀むべしこの高原の露と消え、二人は駱駝の背に伏して絶息し居たりしを程經たる後發見せり。

歩行するものは、空氣の稀薄と寒氣の凜冽との爲めに、先づ足の爪先より凍り始め

馬背に伏
して行く

遂には足部全く凍りて捧の如くなり、次第に腹部に及び、胸部に及び、頭腦の感覺を失ふに至りて萬事休す。博士は幸に身體非常に強健なりしと、終始騎馬旅行をなしたるとにより、苦痛を感ずるに至らず、併も馬上にて姿勢を整ふるなどの事は思ひも寄らず、終始馬上に伏して、少も身體を動かすこと能はず、心臓は今や破裂せんとするかと思ふ程の痛を覺ゆる時もありきとぞ。

率る行きたる馬、並に駱駝も害を蒙むること多く、馬四十五頭の中、博士の跨りたる一頭を除くの外は、悉く斃れ、駱駝は其の全部を失ふに至れり。當時の有様を回想すれば、博士は感慨自ら禁ずること能はざりしと云ふ、大抵の冒險旅行を十回するよりは、高原の横斷を一回する方遙に困難なりといふ。

ヤンデクルよりチエルチエンダリアに至る百八十里の砂漠を歩きしも、亦非常の困難にして、人類の此處を通行せしもの、實に博士を以て嚆矢とす。この間の旅行に三週間に費せしが、寒暖計は零度下三十度に下りしも、一行は一人の損傷を受けず、只一頭の駱駝を失ひたるのみ、博士が第一次の旅行には、この砂漠に於て同行者二人の外悉く死滅せり。砂漠中には無論飲水薪炭無きを以て、駱駝四頭に氷塊と樹木と

馬死して
駱駝斃る雪中の砂
漠に行く

を積み行きしが、砂丘の高き所にては、駱駝の足一尺以上も砂中に入りて、進行非常に困難となり、加ふるに携帯の水も漸く盡きて一行何れも其の骸骨を砂漠に曝すことと覺悟し、兎にも角にも枕を並べて砂漠の中に寝ねたりしに、半夜眠覺むれば偶然柔きものゝ手に觸るゝあり、こは不思議と一行相前後して蹶起すれば、四圍の状況全たく一變して、一面の銀世界となれり、嗚呼天雪を下せるなり、一行躍り上りて盡きたる飲料を補ひ得たるを喜ぶ。されど天幕の用意なかりし一行は、この喜び忽ち變じて、雪蒲團の裡に眠らざるを得ざるの悲みを生じたり、併も飲料を得たる喜びは雪蒲團の悲を壓倒して、一行は無事に砂漠を通過するを得たり、この砂漠はゴビの砂漠の一部分なり。

博士が西藏の都府拉薩に入らんとせしは、この旅行中に於て前後二回に及び、初めは博士自ら一行より分れて、二名の従者と馬四頭、驢五頭を率ゐて拉薩府に向ひしが、此地は宗教上及び政治上の關係より、一切他國人の入ることを禁じたれば、若し露顯せば直ちに殺さるべし、博士は黒き眼鏡をかけて、其の顔貌を包み、如何にも喇嘛僧らしく装ひて進みたれば、大抵目的を達し得べしと思ひしに、圖らざりきこ

拉薩府に
入らんとす

の荒原に住める獵師等は、早くも博士等の拉薩府に向つて進みつゝあることを官吏に密告せり。されば博士は拉薩府を眼前に望み得べき處に達したる時、忽然一群の西藏兵士に圍まれたり。

博士等の一行は、拉薩府に近づくに従ひ、原野に遊牧せる西藏人の甚だ多きを見しが、彼等は博士等の一行を珍らし氣に打ち見やりて、不思議さうなる顔をなし居りしも、親切にいろ／＼と世話するを辭せざりき。斯くて博士等は、今日にして拉薩府に入るべき夜、天幕の裡に明日の樂みを夢みつゝ、眠に就きしに、夜半の頃四邊俄に騒々しくなりたれば、一行はいづれも何事ならんと眼を覺せしに、數百の西藏兵士は一行を包圍し、其の中の指揮官らしき者、博士に向ひて若し一步たりとも前進せば、身首處を異にすべしと告げ、兵士の中より數多の喇嘛出て來りて、博士に向ひ其の眼鏡を取らんことを求めたり。蓋し彼等は博士の綠眼なるべきを思ひてこの請求をしたるならんも、博士は黒眼の人なりしを以て、彼等の目的は外れたり、されど博士等は此の日より番兵に圍まれて、捕虜の待遇を受け、番兵等は毎夜篝火を焚きて、嚴重に警戒せり。

西藏軍に
圍まれる

再び拉薩
進入を企
つ

一行はオクチエの地方長官の來るまで、此處に待たざるべからず、五日の後彼れ地方長官は、華美なる服裝をなし、多くの兵士に護衛せられて到着せしが、彼れ博士に告げて云ふ、達頼喇嘛の親諭ありしを以て、出來得る限り御身等を優待すべきも、一步拉薩の方向に進むに於ては、遺憾ながら斬に處すべしと、こゝに圍を解き、兵士二十五名を附して、一行をナツチュカの境界外に送還せり。

博士は、尙懲す、第二回の拉薩進入を企てたり。今回は全旅隊を率ゐて他の方面より進入せんとせり。然に今回もまた其の途中に於て五百の西藏の騎兵に支へられぬ。彼等は曰く若し御身等が飽くまで拉薩に入るに於ては、御身等は勿論、我等までも盡く斬らるべしと、依つて博士は其の何故に拉薩に入るを許さざるやと問ひしに、彼等は答へず、拉薩府内の狀況の如きも毫末も説く處なし。蓋し彼等は宗教上及び政治上の關係より、拉薩を以て禁府となし、絶えて外人のに入るを許さざるなり。而して五百の騎兵は、博士等の更に拉薩に進入せんことを防ぐ爲め、博士の退却に尾行すること十日の久しきに及べり、斯る有様なれば、歐米人は如何に巧妙に其の身を扮装すとも、拉薩に入ることは到底不可能の事に屬す。

名高き羅布泊は、今や全く水涸れて凹みたる一帯の荒土を成し、住民なく樹木無く、其の北岸に於て廢滅したる市街の跡を發見せしが、此處は其の昔し井然たる市街をなし居たるものゝ如く、其の規模も甚だ壯麗なりしと思はる、中央とも思はるゝ處に、高塔の殘跡ありて、車輪鐵斧大甕等を發見せしが、こは何れも千六百年以前のものなり、博士は支那文字にて認めたる數種の書籍をも發見せしが、記する所は、將佐四十名の率ゐたる一軍隊はロブノルに到着すべきを以て接待の準備を爲すべしとの意味を記しありしとぞ、此の地は、北京よりカスガルに到るべき道路の在りし處にて、この道路の今尙保存せられ居たらんには、實に世界の最長道路なるべし、東部西藏に一死海あり、博士は輕舟に乗りてこの湖面に遊びしが、湖水には非常に多量の鹽分を有し、湖底は全く鹽塊を以て固められたる程なれば、舟も人も鹽の爲めに眞白となり、試に一滴の水を舟中に落せば、直ちに凝結して鹽となる、若しまた湖水の上部の水を、他に流せば、湖水は全く鹽塊となるべし、博士は此の湖上に於て暴風に遭ひ非常の困難を極めたり。

因に記すスツェンヘデイン博士が、巴里の地學協會に於てこの演述をなすや、

外務次官は大臣の代理として、博士に面會を求め、佛國政府の名を以て博士に勳章を贈れりといふ。

本邦人にて入藏を企てし者多し、能海寛氏は曾て打箭爐より入りしが、此に四年を経れど杳として消息なし、陸軍大尉成田安輝氏は行商に扮して支那より入り、拉薩に滞留すること十八日、達賴喇嘛の大堪布に面會して、印度に出て一昨年無事歸朝せられたり、吾人は歐米人が斯く熱心に入藏を心掛けて屢失敗せるにも拘らず、我が同胞の二人まで其の目的を遂げしを見て、雀躍の情に堪へざるなり、特に我河口慧海師が明治三十年印度に渡り、爾來三年の間、幾多の艱苦を嘗めて、遂に入藏の目的を達し、首府拉薩に留まること三年、客年五月無事歸朝せしは、我が同胞の一名譽なることを忘るべからず、而して師が旅行談は客年六月より十一月に亘れる時事新報に詳かなれば、茲に省き、茲には只二三人の外人、特にテトラ等が旅行に關する一斑を述べて、参考に供すべし。

此等の旅行者中にて、テトラ嬢の外、歐米人にて單獨の旅行をなし、者は唯二人にて、其の人は魯國の陸軍大佐ブレセツルスキ氏と、米人ロツクヒル氏と二人あ

(一四四)
 るのみ、吾人は我が政府より清國政府に交渉して、速に入藏の途を廓平せられんことを希望す、而して各種の科學者より組織せる探險隊を派遣し、各種の方面に向つて、精密なる調査あらんことを希望に堪へざるなり。
 ボウワー氏の旅行は、英國印度總督の助力を得、自ら隨行の醫官を指定し、豊に従僕家畜及び旅行器具、衣服等を準備して出發せり。ナイト氏 (Knight) は、ボウワー氏のレ (Trell) より出發する時の有様を目撃し、記して曰く、ボウワー氏の旅行は、王侯の旅行の如しと、魯人ブレゼウルスキイ氏の拉薩地方探險には、如何なる旅装をなせしかは、今得て知るべからずと雖も、ロックヒル氏の語る所に據れば、氏の東部西藏の前の遠征には、十四人の哥隆克兵と、六十五頭の駱駝を伴ひたりきと。又リッルタヌメ氏は、全然武裝せる商隊を率ゐたりしが、其の語る所に據れば、曰く余の計劃は、西藏に到達せんが爲めに、出来るだけ多量の食物と、之を運搬すべき動物とを伴ひて、拉薩に到らんと努力せり。是れまでなし、他人の遠征は、其の到着前に、多くは旅費の缺乏を告げて失敗せしこと少からず、西藏人は賄賂を用ふれば、何等の事も曲げてなさしむることを得るものなれば、吾人は、賄賂の目的に向て、金錢を充分

に準備せざるべからずと。
 是の如き周到なる準備を要するに拘らず、テラー嬢は唯十頭の馬と、二個の天幕と、二ヶ月分の食料として精粍 (Tsunba) 即ち麥粉を準備して出發せり。又嬢は輕便なる寢臺と、酋長に贈るべき物を容れたる箱とを携へ、銀貨の數、オンスと、若干の支那綿布とは、實に嬢の財源たりき。此の外には、印度に到着の上にて着更んが爲めに、僅許の英國製の布片を用意し、卓上の道具入れには、二個の薄き碗と、一二の木椀、銅の皿、ナイフ、フォーク及び匙子を容れたるのみ。然れども、此等の物品は、途中に於て、大抵賊の掌中に歸し、嬢は之を使用すること殆どなかりき。其の携帯せし圖書は、「デーリー・ライト」と云ふ書籍と、新約全書、讚美歌類、日記用手帳の四冊なりしと云ふ。嬢は、此の旅行中、風雪吹き荒む原野に露宿すること二十度の多きに至れり。されば其の洞窟中に眠ることを得しなどは、此の旅行中に於ては寧ろ贅澤なることにて、吾人が大厦高樓に安臥するが如き至幸の事なりきと云ふ。其の衣服を着更ることもなく、隨行せし三人の支那人中、其の一人は途中にて背き去り、一人は斃れ、一人は嬢を殺害せんとせしが、唯ポント (Poutso) と云へる西藏人のみは、終始嬢に隨從し

たりき。

嬢に隨行せるリュコツチエ (Leucotze) と呼べる、至つて強壯なる支那人ありしが、寒氣の酷烈に堪へずして遂に途中に斃れたり。嬢は口癖に「神は余等を守れり」と唱へて、如何なる境遇にありとも、常に其の心意の平靜を保てりと云ふ。

一行の拉薩府に接近するや、危機漸く切迫し、嬢を護衛せし二人の西藏人は、頗る恐怖の念を抱けり。嬢は當時の苦心を記して曰く、余の最も困難を感ぜしは、彼等の恐懼の念を絶たんとすることにてありきと、前面には一行を要せんとて待てる支那の官吏あり、一行は敵地の中心にありて、避難の所なく、四面楚歌の裡に包まれて、疑懼の中に苦しみしが、嬢は天を仰て曰く、總ての信仰は汝に止まれり、總ての救助は汝より來る、汝の翼の影にて、我が防禦なき頭を覆へよと、纖弱なる一婦人にて従僕二人の甚だしき恐怖心を去り、懦夫を起たしめたる豪氣は、實に企て及ふべからざるものあり。

嬢は、始終頓智と、剛毅と、寛大とを以て部下を率ゐ、衆人に接したりしが、途中兩度の狙撃に遭へり、其の第一は、思ひもよらず劫盜 (Chink-pai) の狙撃に遭遇したり、始め

強盜に襲はる

賊等は、馬より下り、地に踞して靜かに茶を喫する風を裝ひ、暫くして引火奴に火を點じ、馬に騎り、不意に襲ひ來れり、其の火繩銃は、彼等の思の儘に發火せしも、幸にして毫も損害を與へざりき。

第二には、二百名餘の賊徒一行を取り圍み、數多の彈丸は、雨霰と降り來りて血液石と俱に飛散せり。一行は蒙古の同勢及び荷物を駄したる犛牛と共に在りしかば、犛牛は或は走り、或は射殺され、蒙古人二名は前方に面して倒れたり。

斯る危難を冒して、拉薩府の前三日程なる最高點に到達せしに、嬢は果然西藏官吏に抑留せられたり。嬢は十五日間、いぶせき倉庫の内にありて、己が生命と、二人の西藏人の生命とのために戦へり。最初は、下級の酋長來りて豫審をなし、最後に肥大なる官人ナグチユカ (Nag-chi-ka) より來りて判決せり。法廷は大なる白色の天幕にて、其の前面には青色の縫をなし、其の内部には別に幕を垂れ、其の一方には、二三の官吏、高き椅子に坐し、高位の官人は、一段高き椅子に着坐せり。各官人の前面には、茶卓ありて、支那焼の茶碗を据え、之に近接して炭を燃やせる青白き火鉢あり。廷丁は火上の釜より、再三茶を酌みて、判官の茶碗に注げり。憐むべし囚人の運命は、此の悠

最後の厄難

然として茶を喫せる判官の裁判に委ねられたり。而して天幕の後方には、兵士及び官吏の従僕群集して、喋々嘯々せり。

ティラー嬢は天幕の中央に坐したりしが、外國人にして、慢りて此の國に侵入したりといふ罪に問はれ、拉薩府に入るの許可を得ず、又印度の獨吉嶺に行くことを許されざりしが、嬢は途中にて西藏人の爲めに、財物を奪はれたれば、西藏政府は奇特にも、其の報酬として、天幕、馬及び支那に歸るに充分なる旅費を與へけり。嬢は其の虎口を逃れ、數多の危険を冒して、西藏の内部に一年中最も悪き時期を過して、西紀一千八百九十三年四月十三日に、四川省打箭爐に歸着せり。

附録 青海地方の風俗及び喇嘛

ティラー嬢は、西紀一千八百五十五年十月十七日英國「チェンヤ」(Cheshire)の「エグレメント」に生る。此の有名なる旅行をなし、は、恰も其の三十六歳の時なりき。其の父ジョン、ティラーは、其の長命なる一生涯の多分は、世界漫遊のために費消

せりと云へば、嬢も其の感化を受けたりけむ。幼時より旅行を好み、遂に此の顯著なる探検をなし、なり、嬢は幼少の時は、身體虚弱なりしが、年長するに隨ひて、漸く強壯となれり。常に困難と戦ひ、唯僅許りの教育を受けたりきと云ふ。後宣教師となりて、西紀一千八百八十四年十月、支那内地傳道協會の命を奉じて、支那に出發し、支那に居ること三年なりしが、初めは楊子江口の鎮江 (Chin-kiang) に居り、後は長城と西藏境との中間、青海の東方なる甘肅省 (Kan-sen) の首府蘭州 (Liang-chau) に住せり。茲にて支那官吏の家庭醫となり、其の間に熱心に西藏の研究をしたりしが、偶々クムバム僧院の所在たる西寧 (Sining) 附近にて、開催せる有名なる西藏大市の視察に赴けり。英國陸軍中佐ボーエル氏が、西藏に精通せる第一人なりと推稱せるロツクヒル氏は、西紀一千八百八十九年二月にクムバムを視察せり。然れども、嬢は其の前二年即ち一千八百八十七年七月に、此の視察をなしたりしなり。當時嬢の手記せる所の視察記は左の如し。茲に記して參考に供す。

達里珠の西藏市の見物

達里珠及び大喇嘛の轉生

達里珠は、西藏大僧院の一にして、西寧府を距ること五十里の所にありて、ルザル(Lusar)と稱する支那の一市邑に接せり。二千乃至三千の喇嘛あり、此は第拾五世紀に宗教の改革を實行して、現在の黄教を廣布したりし宗喀巴の生誕したりし所にて、現に生ける佛の住所たり、此の大僧院の住持たる大喇嘛圓寂する時は、國內を巡歴して、同時に生誕せる孩兒を搜索し、之を僧院に伴ひ來りて、之に先住持の所有物を示し、之を試験す、孩兒之を見て、若し喜笑せば、其の孩兒は之を認識するもの、即ち前住持の轉生せるものとして、之を養育し、之を教育して、更に住持たらしむるの法なり。若し其孩兒喜笑せざる時は、幾回も之を示して、正しき笑を呈するに至るまで、種々の方法を用ひて、其の喜笑を求むと云ふ。

達里珠の殿堂及び喇嘛の家屋

西紀一千八百六十七年に回回教の反亂ありし時、達里珠は破壊せられて、其の掠奪に遭へり、當時は四千の喇嘛此に居り、其の主要なる殿堂の屋根は黄金の板を以て葺きたりしが、爾後衰へて、現今は黄金を鍍金せるものを以て葺けり。數多の殿堂は、一見したる所にては、其の内部はサも充實して、人の住むべき室ありとも見えざるなり。其の建築は、高くして頂近き所に、一列の窓あり、築建法は全く印度風にして、毫も支那に類する所なし。且つ喇嘛の家屋は、幾分か清潔なる一點、殊に目立ちて見ゆ、各室は庭の周圍に建築せられ、室には格子窓ありて、薄き紙を糊にて張れり。室内には煉瓦を疊みて寢臺とし、其の上面は木板にて之を蓋ひ、自由に取り去ることを得しむ。牛の糞の乾燥せるものを取りて、寢臺を温めんが爲めに其の下に容れて焚くなり。

沙彌及び僧服

黄朝喇嘛は、獨身生活にて妻子なし、故に其の法嗣は必ず徒弟たらざるべからず、而して西藏人の宗教に心酔せる、其の家族の總領は必ず僧侶たるべきものとし、

齡十歳に至れば之を僧院に送りて、讀み書きの稽古をなさしむ、此等の場食は剃髮して沙彌となり、赤き綿布及び毛布にて製したる婦人用の袴の如きものを着け、袖なくして胴衣に似たる服の立て領子あるものを着て、袴の上に垂れ、帯を以て、之を腰部に結束せり、此の服裝の外に、尙ほ長さ殆と一ヤード半、幅四ヤードの袈裟あり、最も優美に之を肩より懸けて、其の手を隠せり、靴は高くして亦赤き布にて製せり。

格隆

喇嘛は、殊別の僧院に住せる四人の格隆 (Kalon) 即ち支配人にて管理せらる。余が達理珠に住みし間に兩度之を見しが、其の年齢は五六十歳に見えたり、格隆は常に其従者を伴ひ、其の行歩には、長き鞭索ある二本の鞭を以て其の前方を拂はしむ、格隆の衣服は、他の喇嘛よりは聊か上等のものを着けたり、喇嘛の風は、一見したる所にては、總て智慧ありとも見え、徒に其の念珠を爪繰りて、念佛するのみなるが如し。

男子の風俗

西藏人は、筋肉の發達逞しき種族にして、其の顔は目小く、頬骨高く、鼻隆く、口は大方なり、一般に其の顔を剃り鬚髯を蓄へず、粗毛の「セルジ」又は羊毛皮の衣服を着けたり、衣の長さは膝に達し、帯を以て腰部に結束せり、鞍上にある時は、其の長き袖をまくりて、手を外に出し、胴部の衣服は垂れ膨れて帯の上にかゝり、又木綿の股引を着け、長き靴を穿てり、其の帽子は、羊毛皮を以て圓く、其の周邊を縁どり、赤色と青色との綿布を以て其の中央として、密に頭部に被ぶれり、腰には刀劔と、食事に用ゐる小刀とを佩ひ、旅行する場合には、粗造の銃を携帯せり。

女子の風俗

婦人は、男子に比すれば身長短くして、肥満し、黒赤色の「セルジ」にて製せる一枚の服を着け、赤色の同質の織物にて縁をとり、領子は羊毛皮にて之を外方に折り返したり、衣服には鈕を用ひず、前面に褶をなし、帯を以て結束せるは男子と異なら

ず、若し勞働に服する場合には、袖より右手を出し、其の胸を露出せり、祭禮の時に用ふる盛装の服は、大にして且つ高尚なり、其の制は一種の硬き囊より成れり、此の祭服は各色の絹糸を以て刺繡し、其の中央には直徑凡そ二、三インチ許の三個の凸飾プロトタイプの銀の裝飾品あり、衣服の周縁には不透明なる貝殻、牡蠣の貝殻ならんのの細片、及び肉色の玉髓を附着し、其の手頸には寶石、珊瑚及び玻璃の珠玉を連ねたる糸を纏ひ、金銀の耳環をはめたり、余の目撃したるものは、赤珊瑚を鏤めたる銀の環にして、右耳より左耳に連続せる珊瑚の糸ありき、婦人は儀式の場合には、男子の如く長靴を



婦人の通常服
婦人の祭禮服

穿てども、通常は跣足なり、頭髮は許多の細かなる辮髪にせり、或る婦人は辮髪の數六十四の多きに至れりと云ふ、髻には巾着の如き褶ある布片にて之を包めり、辮髪の態は様々にして、中央に二十許の大なる辮髪をつくり、其の西側に小なる辮髪をなせるもあり、其の被ふれる帽子は、男子用と異なる所なし。

市場の有様

市場はルサル (Lusar) と、達里珠ダリジュとの間の丘陵に在りて、支那人の開催せる露店相并びて自ら市街をなし、外國品、支那品、リッポン男子の帽子に少しく裝飾を施したる男子用形の婦人帽を販賣する呉服店あり、綿針、鈕、眼鏡、櫛、珊瑚珠、婦人用飾帶に用ゆる各種の裝飾品、刺繡せる絹布等を販賣する小間物店あり、醬袋ソリスを容る、器、ランプ等、法會に用ふる各種の眞鍮製の佛具商あり、小包にせる香を販賣せる露店あり、最も多きものは飲食店にして、天幕を張り、其の内にて料理したる食物、及び其の原料品、及び支那酒を鬻ぐ、西藏人は此の天幕中にて、飲食を恣にし、夜に至れば賭け酒を飲み、酌婦之に待し、丘陵に團坐して放歌せるなり、飲酒の惡習慣は支那より輸入したるものなりといふ、丘陵の側面には、手桶、桶、攪茶器、西藏にて茶を煎する前に使用するものを鬻ぐ店あり、西藏人は自製の粗造なる木具、及び食物を容る小盆、羊毛、羊馬等の家畜を販賣せり、牡犢一頭の價英貨一、二ポンド、食物は五、シルリング以上、十、シルリングなり、羊一頭は一、二、シルリング、若くは其

の以上を買取ることを得べく、馬一頭は凡そ一「ポンド」なり、然れども一頭十「シルリング」の廉價にて得らるゝことあり、羊毛の如きは百斤五「シルリング」を價せり、此の價は直接に西藏より買得る直段なり。

西藏人は、丘陵に駐屯し、其の周圍には家畜を置き、其の中央には羊毛皮堆積せり、余は一日數多の部落を巡視せしが、天幕は多く白色にして通常英國にて見るもの、如し、幕内には家具なく、西藏人は地面に羊毛を堆積して、其の上に、睡眠せるのみ、又厨庖の道具としては、只大なる銅鍋木製の杓及び輪の一對あり、輪は羊皮製にして、鐵管を有し、始終火上なる鍋を吹けり、薪には柴を使用し、柴なき所にて、犛牛の乾糞を用ふ、西藏人の食物は奇にして且つ粗なり、其の製法は多量の水を以て磚茶を煮、之に「バタ」を加へ、其の羹を碗に盛り、之に大麥の碾割粉を混じて糊状をなしたるものを指にて摘み食ふなり、時としては麥粉と羊肉數斤とを以て羹を製し、充分煮たる後之を取り出して、後食するなり、余は西藏の老人より二個の碗を三「ペンス」にて買ひ求めたり、老人は余に其の革囊を祛ヒッきて、貯藏せるものを示し、大麥の粉、乾豆、麥粉と水とにて製したる細かなる「ビスケット」甚だ臭

氣ある「バタ」を盛れる皮製の容器及び少許の磚茶となりき。

言語、氣候、物價、家屋

余の聞く處に據れば、西藏は牧草を産するの土地なり、然れども西藏人は支那境の田野に殖民し、支那服を着け、支那語を語りて、自ら幸運のものなりと云へり、西藏より羊毛を運びて市場に來れる家畜、及び駱駝は此處より麥粉、及び大麥の碾割を充てる革囊を携へて歸るなり、達里珠附近の丘陵、及び此の地方は一圓に雨多きが爲めに、草木繁茂して綠色を呈すれども、寒氣甚だしきが爲めに、植物の發育遲緩なり、羊肉牛乳及び「バタ」のみにて生活するものは、西藏は誠に幸福の地なり、但植物乏しく、隨ひて果實は一層稀なりとす、鶏一羽の價三「ペンス」、十四個の卵一「ペンニー」、英國にて半「ペンニー」位の大さの麵麩六個にして一「ペンニー」なり、牛乳は一「クワートル」、我六合三勺の價四分の一「ペンニー」なり、家賃の如きも極めて廉なり、西藏人と親密なる回回教徒の話に據れば、西藏村落の小屋は一ヶ月十「ペンス」にて借ることを得べしと、達里珠より二日旅程の所までは、家屋の構造悉く

支那風なれども、其の以外に至れば窓もなき粘土製の陋屋にして、入口には唯一片の帷帳を垂るのみ、而して此の陋屋、若くは天幕の側には、必ず羊の血を以て飼養したる犛猛なる養狗ありて、其の門を守れり。

家族の有様

一人の回教信徒あり、余は其の家族のものと親密の間柄なりしが、其の語る處に依れば、一人の西藏人ありて、其の父及び祖父は家畜の中買ひを業とし、家畜を購求せんが爲めに此の地方より西藏に赴き、數日各所に滞在せしに、取引せし二三の西藏人は其の家を訪ひて答禮せんが爲めに見舞へり、然るに其の家には二十歳前後の未婚女、其の祖父及び他に二人ありて、狹隘なる一室に同居せり、人あり其の女に支那菓子と與へしに、老人は之を遮り取り、曰く、汝は吾が言語を使用すること能はされば、此の菓子を食ふ可からずと語れりと、此の少女は固より支那語を語ること能はざりしなり、以て如何に彼等が支那語を尊重せるかを知るべし。

婚姻及び夫婦の愛情

西藏の女子は、自ら好む者に非らざれば之と結婚することなし、一婦人にして三四人の夫を有するは稀ならず、夫婦の間は頗る親密にして、夫は大に其の妻を愛し、散歩するには其の手を執り、之を先立たしめ、妻笑へば俱に笑ふ、其の有様は支那の男尊女卑の風とは大に異なれり、婦人は外國人を見慣れざる故にや、外國人を見れば大に恐怖して、之を避くる風あり、曾て余の一婦人の側近く接せんとするや、該婦人は、忽ち踵を旋して逃げ去らんとしたりき、又或る男子は、余が其の妻に向て名刺を呈せんとせしに、余を打たんとしたりき、是れ蓋し余が耳環を附けざりし故に、誤りて男子なりと思ひて、一種の邪推をなしたるに過ぎざるなり、然れども其の事情は直に明白となりしかば、余は忽ち其の親友となり、余は丘陵の側面に、彼等の團欒せる中央に誘はれしことありき、かゝる中にもある一人は、余を見物せんがために、特更に余が旅宿を訪ひしことありき。

余か借りし家

當時余が借れる室は、屋上に於ける鳩箱の如きものにして、極めて不潔なる一室なりき。内には家具なく、只煉瓦の寢臺あるのみ、食物の調理は直に室内にて柴を焚きて煮熟したりき。

人は慢に人を害せず

支那人は、西藏人を未開人民なりと云へり、余が西藏の部落を訪問したる時、余が従僕は余の害せられんことを心配せしに、案外に、西藏人は余を其の幕中に招し入れ、殊更に食物を調理して饗應したりき、余は我が名刺を出し談話を試みんと思ひしに、遺憾にも唯西藏語の一二を拾ふのみなりければ、愉快なる談話を交ふること能はざりき。

西藏人は宗教的人民なり

西藏人は、宗教的人民なり、男女ともに頸の周圍に小箱を繫けたり、此の小箱は黃銅製にて、内には佛像を納めたり、余が漸く達里珠に近くや、路傍に數多の男女の平伏せるを視て、一驚を喫せり、此等の善男善女は合掌して或は額に或は胸にし、ながら地上に膜拜し、額を地につけ、兩手を頭上に延はし、地上に其の痕跡を残すに至れり、かくて再び起ちて其の痕跡を踏み、更に身をひれ伏し、幾度となく反覆禮拜して、寺院の周圍を廻れり、中にも婦人は跣先詣りをなし、顔面衣服は塵に塗れたるも更に顧る所なく、絶えず六字の陀羅尼を唱へ、或は念佛したりき、道の辻には小なる祀堂ありて、白、赤、黃、黒の各色にて裝飾せる女神の畫像を安置し、或は祈禱輪の周圍を繞れる神佛の團練あり、此の祈禱輪は巡禮者の通行する毎に之を廻轉するものなり、參詣者は二三回堂を廻り、毎回一度此の祈禱輪を廻轉せり。

西藏婦人に誘はれて達里珠殿堂を視る

一日、余の旅宿に來りし二三の西藏婦人ありき、之に茶菓を饗せしに、此の婦人連

は歸途余を同道して達里珠最大の佛殿に參詣せんことを勸めぬ。余は其の言に従ひ、第一に佛像を掲げたる廊下を通行せり。此の佛殿には二個の黒門ありて、此には頭蓋骨を書けり。其の内面には旗及び虎皮を懸けり。之が爲めに内部は大に暗黒となれり。門に面して卓あり。卓上には、*バタ*の燈明及び清淨なる冷水を盛れる圓き眞鍮の鉢あり。其の後に帷帳ありて、其の一方には將に飛付かんとする如き虎と小き熊とを置き並へ。他方には、虎、黒き山羊、鹿の像及び、*バタ*の燈明を所せき迄並べ、前面には魔鬼の塑像を置けり。其の中には火焰に取圍まれたる幽鬼の像もありき。又壁上に白く畫ける骸骨あり。幾多の信徒は此の像の前に平伏禮拜せり。而して其の壁後には、喇嘛は茶を喫して、悠然自ら樂めり。喇嘛の言ふ所に從へば、此の佛殿内には、祭禮の際に使用する有名なる茶釜ありて、其大さ小なる部屋の如しと。然れども余は終に之を視ることを得ざりき。次に余は前の佛殿よりは、稍小なる堂に赴けり。堂内には鍍金したる、又は眞鍮製の佛像數多を安置し、喇嘛は其の側に坐を占めて、*バタ*の燈明に注意せり。參詣人は、像の前面なる卓上に賽錢を投じて禮拜するなり。喇嘛の舞踏 (*Maquerade*) ありて、定期市の第五日目に

演ぜらるべき筈なりしも、都合に依りて興行なかりき。

少女の火傷を療す

第六日目には、宗教行列ありき。余輩は地板上に排列したる許多の頭蓋骨ある側を通行せし時、一婦人其の少女の腕を診察せんことを謂ひぬ。其の瘡は前夜熱湯にて火傷せしものにて、其の爛れたる所に牛糞を塗抹したりしかば、余は大に驚きて容易に得らるべき亞麻仁油と麥粉とを混じて其の局部に塗り替へて、上に綱帯を施し、かば、其の母は大に感謝し、又之を目撃せる西藏人及び喇嘛も等しし余に對して敬愛の情を表せり。

宗教行列

余等は道を急ぎしかば、行列の僧院を出づる時は、恰も達里珠の入口に到れり。行列は第一には質素なる装せる喇嘛先頭にありて、次に二人の喇嘛は長さ凡そ六呎許の角を吹きつゝ、歩めり。角は銅製にして重々しき種々の音聲を發せり。次に

は數本の幃幡を樹てたり、其の布は旗竿の頂上なる小なる輪の周圍を纏へり、其の内六旒は白布に縦横に黒條を引きて、恰も十字架の模様をなせり。喇嘛は、頭上に天鷲絨の如き毛織物を以て製せる大なる黄色の兜狀の帽を頂きしが、其の帽は甚だ重く見えたり、最後に佛あり、頭上に金製の僧帽を頂き、長き錦の外套を穿てり、群聚雜踏し來れば、一喇嘛躍り出て、鞭を振りて之を逐ふ、余は童男童女の之が爲めに負傷し、悲哀の聲を發して泣き叫ぶを見たりと云々。

西紀一千八百八十七年七月

クムバム僧院に於てテラー誌す

附言

テラー嬢は、クムバムに到て、一ヶ年滞在せしが、病の爲めに此を去り、歸途舟人の酒を飲みて不注意なりしが爲に、漢水の激流を下るとき、船は岩礁に衝突して沈没せり、然れども嬢は幸に岸に達することを得て、萬死中に一生を拾ひて、歸りき、當時嬢の父は濠洲に旅行したりしを以て、嬢は一時保養のために父の許に到

りしが、間もなく濠洲を去り、印度の獨吉嶺^{グッレ}に立寄り、英國に歸航し、斯くて病氣も大に全快しければ、再び印度に至り、西藏に入らんが爲めに、獨吉嶺附近のグウム^(Ghum)にて、土人の陋屋中に五ヶ月滞在し、西紀一千八百九十年三月西金なるサチエン^(Sachen)の村落に至れり。

嬢の此の國に入るや、大に政府の爲めに嫌忌せられて、此の村を退去すべきことを命ぜられ、チュムロン^(Tum-long)の寺院内に一室を借りて住せしに、村民は嬢に食物を賣ることを禁せられたり、流石の嬢も殆ど困じ果て、一時は行商の後を追ひて、其の驛に駄せる荷物の小孔より漏れ出る炒米^{イゴ}を拾ひて、纔に飢を醫したることもありしと云ふ。

嬢の此の僧院に在る時、初めて西藏の青年ボンツ^(Poutso)に對面せり、ボンツは年齢十九歳、西藏に於ける其の主家を逃走し來りしものなりしが、足部の病氣治療の爲めに嬢の許に來りしなり、此の青年は其の後從僕となりて、嬢が西藏旅行の間、終始誠實に隨行せり、嬢は西金に滞在中、大に西藏語を研究したり、西紀一千八百九十一年三月一夕、支那に行けと云ふものあり、乃ち嬢は行季勿々印度のカル

照參章三十第

性特の音發方地カナバび及ワドムア

西藏音綴	英 譯	和 譯	發 音	備 考
Dus	Time	時 間	Du	佛蘭西ノ du
Ch'os	Law	法	Ch'ua	拉薩ニテ ch'ü
Dzus	Asked	乞ヒ求ムル	Dzu	
K'ro	Anger	忿 怒	Cho	拉薩ニテ tru
Gus	Garment	著 物	Gü	
K'rag	Blood	血 液	Chak	拉薩ニテ tra
Nyid	Self	自 己	Nyit	高 調
T'us	Heard	聞 キシ	T'ü	佛蘭西ノ tu
Dag-par	Purely	純 粹 ニ	Dak-war	
Legs-par	Well	能 ク	Lek-war	
P'an ch'en rin-po-ch'é	Atitle	官 稱	Han ch'en rin-po-ch'é	或ハ p'an 蒙古音ナラン
P'ug	Cavern	洞 穴	Huk	
P'ul-nas	Having given	與ヘマシタ	Hul-né	
T'eg-pa	Carriage	車	T'é-wa	
Chi smos	Why speak of	何ト云フカ?	Chirmé	拉薩ニテ chimö
Bu gehig	One child	一人ノ小兒	Vu ebik	
Sha stag	Only	唯 ヲ	Shartak	
Ma mt'ong	Not seen	見マセン	Mamt'ong	
Mi ldan	Not having	持チマセン	Mir-dän	第一綴リハ英ノ mere ノ如シ
Mi gyo	Unmoved	動カザリシ	Mir-yo	
Zak-pa	Sorrow	悲 哀	Zak-hua	
Zlawa	Moon	月	Dava	
Os	Proper	適當ナル	Eu	
Shig	Louse	虱	Shiek	
Grol	Free	自 由	Drol	
Gtso	Chief	酋 長	Rtso	
Gdzan	Other	他 ノ	Rdzan	

西 藏 終

コッタに下り、支那行の船を待合せて、再び支那に航せしか、上海の宣教師等、西藏にボンツを伴は、彼は斬首せられんのみ、之を伴はざるに如かずと忠告せしかども、遂に之を伴ひて上海を出發し、進みて洮州タウチウに到り、此に一ヶ年の月日を経て、後、主従相携へて西藏に徒歩旅行をなせしと云ふ、嗚呼、纖弱なる一婦人の身を以て、此の大事業をなす、有髯男兒豈奮起せざるべけんや。

譯者いふ、嬢がクムバム僧院にて記したりし西藏風俗談は、青海地方に移住せる西藏人の風俗にて、純然たる西藏内地の風俗にはあらず、純然たる西藏内地人の風俗も大同小異なれば、之を以て唯青海地方の風俗なりと思惟するは誤なり、是れ余が特に譯出して、此に附記したる所以なり。

四藏音綴	英 譯	和 譯	發 音	備 考
Brgya-ba	The hundredth	第百ノ	Rgya-wa	又 rya-va
Bzla-par	Spoken	話シタ	Rdā-par	
Bkra-shis	Good luck	好運	Chua-shi	拉薩ニテ tra-shi
Bkag	Forbade	禁セシ	Kuak	
Bsgral-wa	Cut	切ル	Bral-wa	
Bgegs	Hindrance	障害	Hgek	
Brnyan	Reward	報酬	Rnyan	
Brtseg	Built	建築スル	Rtsek	
Mk'as	Learned	學ブ	K'ua	拉薩ニテ k'é
Mk'an-po	Abbot	僧院長	Kuan-bo	
Mngon	Evident	明瞭ナル	Won	
Mt'ah-ya	Endless	限リナキ	Mt'a-yé	拉薩ニテ t'ā.yā
Mk'ah-hgro	A kind of fairy	鬼神ノ種類	K'ua-dra	
Mngah	Might	シ得シ	Mua	
Hdi	This	此ノ	Dé	
Hk'ral	Mistaken	誤リシ	Chul	
Hdi hdra vai	This kind	此ノ種類	Dendravi	
Hdus-byas	Compound	複雜ノ	Dub-ché	
Hp'os-na	If he died	彼ガ死ヌ ナラ	Hu-na	
Hjog-pa	Placed	置キシ	Jok-pa	又 wa
Hbar	To burn	焼ク	Bar	
Hkrug-med	Peaceful	平穩ナル	Chuk met	拉薩ニテ tru-mé
Hbyang	Clean	清潔ナル	Hjyang	又 ayang and psyang
Migtsang	Unclean	不清潔ナル	Mirtsang	
Sdng-bsngal	Misery	不幸	Rduk-rnal	
Legs-par	Well	能ク	Lakwar	
Sprin'ung	A lot of clouds		Drin p'ung	

四藏音綴	英 譯	和 譯	發 音	備 考
Gso	To cure	治療セヨ	Rso	
Gsum	Three	三	Rsum	
Gzugs	Figure	肖像 模標	Rdzak	
Dkah	Difficult	困難	Rka	
Dgra	Enemy	敵	Rja	
Dpag	Fut of dpog		Huak	拉薩ニテ pa
Dpal	Glory	名譽	Huel	
Dpé	Example	例	Hué	
Dper-na	For Example	譬令ヘバ	Huer-na	
Dbus-nas	From the midst	真中カラ	Dwa-né	
Dugos-po	Reality	實際	Rnyö-po	
Dkyil-hk'or	Circle	圈	Dehyil-k'or	拉薩ニテ chi k'or
Dpung	Host	主人	Hung	
Dben	Solitude	孤獨	Wen	英ノ when
Dbyangs	Song	歌	Ryang	
Dbul-p'ongs-pa	Indigent	貧乏ナル	Wul-p'ong-Va	
Dbye-dzing	Being divided	分タレテ	Djé dzäng	拉薩ニテ jyé- dzin
Dmah	Low	低キ	Ma	
Bral	Deprived of	褫取ル	Jal	
Bkra	Good	善	Ja	亦 tra ト聞ユ
Bkah htsal	Spoke	話セシ	Kuar-tsal	
Bakyod	Moved	動キシ	Rshyot	又 Kyot
Brla	Thigh	股	Vla	
Brjod	Spoke	話セシ	Ryot	
Bgyis	Made	爲セシ	Rjye	
Byams-pa	The merciful one	慈悲深キ者	Chuam-pa	又 suam-pa
Brgyan-pa	Adorned	飾ザリシ	Rgyan-pa	

西藏音綴	英 譯	和 譯	發 音	備 考
Sgrogs-pa	Comrade	伴 侶	jok-wa	
Sgo	Door	門	Rgo	
Sngar	Formerly	正 式 ニ	Rnar	
Smas-pa	Spoken	話 セ シ	Rmā-wa	
Skrag-pa	Frightened	驚 カ ス	Drak-hua	拉薩ニテ tra-pa
Slob-dpon	Teacher	教 師	lob-huon	.. bopūn
Sgoms	Meditated	沈思スル	Rgom	
Ltar	Like	好 ム	Rtar	
Lta	to see	視 ル	Rta	
Rta	Horse	馬	Sta	
Rten-lhrel	Cause and effect	源因及結果	Ten-brel	拉薩ニテ teund- rel
Rgyal-wa	Victorious	打 勝 ヲ	Yal-ra	
Rgyal-po	Prince	大 守	Yaro	
Rdjing-bu	Pond	池	Rdjing-vu	
Rgan-po	Old	老 年	Rgan-po	
Rdju-lprul	Witchcraft	妖 術	Rdjum-chul	拉薩ニテ dju- t'rul
Rzyal-mts'an	Trophy	戰勝紀念碑	Ryam-ts'an	拉薩ニテ jyal- ts'ün
Rgyum	Continual	連 續 ノ	Ryun	
Rdjogs	Finished	結了セシ	Rdjok	
jiskad	Thus	斯ノ如ク シテ	jir-kad	拉薩ニテ ji kit

西藏音綴	英 譯	和 譯	發 音	備 考
Baidūrya	Lapis lazuli	璃 瑠	Betriyé	拉薩ニテ bende- rya
Od-lpro	Light	光 線	Od-cho	拉薩ニテ wō-tro
Ting-nge-hājin	Meditation	沈 思	Teng-en-dzin	
Dyak-hts'al-lo	Saluted	敬禮スル	Shyak-ts'alo	
Hbrug-sgra	Thunder	電	Druk-lra	
Gtsang-p'nd	Tuft of hair	髮ノ總	Tsak-hut	
Bkah drin ch'e	Thank you	有 難 フ	Kua drin ch'e	
Bkah hbum	Title of dook	書籍ノ名稱	Kuam bum	
Bkah hgyur	Title of dook	Kuan jur	
Bkur-sti	Homage	隨 身	Kur-ti	
Blun	Stupid	痴鈍ナル	Hlun	
Ma ste	is not	有リマセシ	Marté	
Shākya t'ub-pa	Shakyamuni	釋迦牟尼	Shakchal'uba	拉薩ニテ sacha t'upa
Mihjigs-pa	not afraid	驚 カ ス	Min je-ra	minsterノ minノ如シ
K'ri-stan	Seat	坐	Chir-tau	
Sra-lrtan	Firm	商 館	Sar-tan	
Kyang	Also	又	jang	拉薩ニテ jyang
Hjam-dpal	Name of God	神ノ名	jam-lual	
Hjog-pa	To place	置 ク	jok-wa	
Hp'ags-pa	Exalted	稱揚セシ	Hp'ak-wa	
Sku	Body	身 體	Rku	
Skyong	Defect	缺 乏	Schyong	
Sgyu-ma	Illusion	幻 影	Ryü-ma	
Sgrai	of the Voice	聲ニ付テ	Dri	又 gri
Sgral	to Cut	切斷スル	jal	拉薩ニテ dral
Sgrigs-te	arranging	整 理	Drik-te	
Sna	nose	鼻	Rna	

音發ノソロアツンタバ薩拉ビ及表音綴藏西

西藏音綴	拉薩	バタン	ツアロン	西藏音綴	拉薩	バタン	ツアロン
inga	na	nga	nga	gzah	za	za	za.
icha	cha	chia	chia	gyah	ya	ya	ya.
ija	ja	jya	jya	gshah	sha	ha	shia.
ita	ta	ta	ta	gsah	sa	sa	sa.
ida	da	da	da	dkah	ka	ka	ka.
ipa	pa	pa	pa	dkya	chya	chya	chya.
iba	ba	ba	ba	dkra	tra	tra	tra.
ih'a	h'la	h'la	h'a	dgah	ga	gā	ga.
ska	ka	ka	ka	dgyah	jya	jya	jya.
skya	chya	chya	chya	dgra	dra	dra	dra.
skra	tra	tra	tra	dngah	na	nga	nga.
sga	ga	ga	ga	dpa	pa	pa	pa.
sgya	jya	jya	jya	dpya	chya	hsia	hsia.
sgra	dra	dra	dra	dpra	tra	tra	tra.
snga	na	nga	nga	dbah	ba	ba	ba.
snya	nya	nya	nya	dpra	dra	dra	dra.
sta	ta	ta	ta	dbya	jya	ya	hsia.
sda	da	da	da	dmah	ma	ma	ma.
sna	na	nha	na	dmya	nya	nya	nya.
spa	pa	pā	p'a	btah	ta	ta	ta.
spya	ch'ya	hsia	hsia	bkyā	cha	chya	chya.
spra	tra	trā	tra	bkra	tra	tra	tra.
sba	ba	ba	ba	bkla	la	la	la.
sbya	jya	hsia	hsia	brka	ka	ka	ka.
sbra	dra	dra	dra	brkya	chya	gya	chya.
sma	ma	mh'a	ma	bska	ka	ka	ka.
smya	nya	nh'a	nya	bskya	chya	hsia	chya.
smra	ma	mh'a	ma	bskra	tra	tra	tra.
stsa	tsa	tsa	tsa	bgah	ga	ga	ga.
gehah	cha	chia	chia	bgya	jya	jyā	jyā.
goyah	nya	nya	nya	bgra	dra	dra	dra.
gtah	ta	ta	ta	brga	ga	ga	ga.
gdah	da	dā	da	brgya	jya	jyā	jya.
gnah	na	nā	na	bsga	ga	ga	ga.
gtsah	tsa	tsa	tsa	bsgya	jya	jya	jya.
gzah	dza	dza	dza	bsgra	dra	dra	dra.

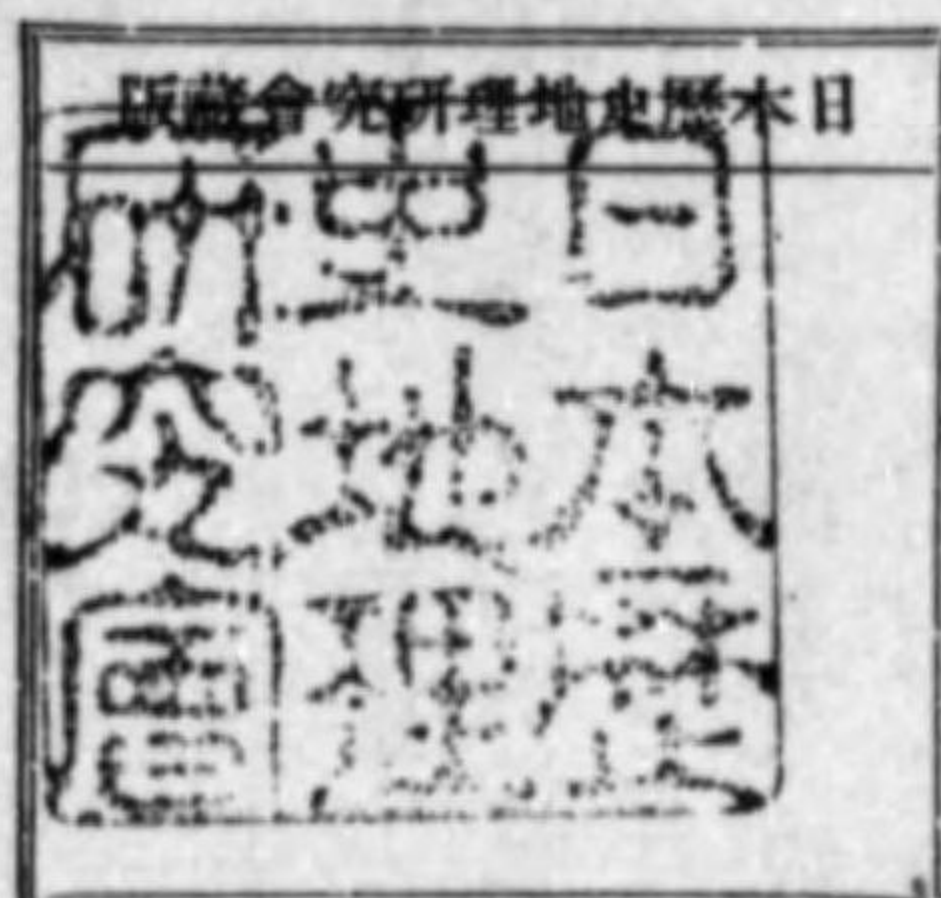
西藏音綴	拉薩	バタン	ツアロン	西藏音綴	拉薩	バタン	ツアロン
ka	ka	ka	ka	mya	nya	nya	nya.
k'a	k'a	k'a	k'a	kra	tra	tra	tra.
ga	ga	ga	ga	k'ra	tr'a	tr'a	tr'a.
nga	na	nga	nga	gra	dra	dra	dra.
cha	cha	chiā	chiā	tra	tra	trā	trā.
ch'a	ch'a	ch'ia	ch'ia	t'ra	tr'a	tr'a	tr'a.
ja	ja	ja	ja	dra	dra	drā(soft)	drā.
nya	nya	nya	nya	nra	na	sha	na.
ta	ta	ta	ta	pra	tra	tra	tra.
t'a	t'a	t'a	t'a	p'ra	tr'a	tr'a	tr'a.
da	da	da	da	bra	dra	drā(soft)	drā.
na	na	na	na	mna	ma	na	ma.
pa	pa	pa	pa	sra	sa	sa	sa.
p'a	p'a	p'a	p'a	h'ra	h'a	sha(soft)	h'a.
ba	ba	ba	ba	kla	ba	la	la.
ma	ma	ma	ma	gla	la	lā	la.
t'a	t'a	t'a	t'a	bla	la	bū	la.
ts'a	ts'a	ts'a	ts'a	zla	da	da	da.
dja	dja	dja	dja	rla	la	la	la.
wa	wa	wa	wa	sla	la	la	la.
dza	dza	dza	dza	rka	ka	ka	ka.
za	za	za	za	rkyā	chya	ekya	ekya.
a	ā	ā	ā	rga	ga	ga	ga.
ya	ya	ya	ya	rgya	jya	jya	jya.
ra	ra	ra	ra	rnga	na	nga	nga.
la	la	la	la	rja	ja	ja	ja.
sha	sha	shia	shia	rnya	nya	nya	nya.
sa	sa	sa	sa	rla	ta	ta	ta.
h'a	h'a	h'a	h'a	rda	da	da	da.
a	ā	ā	ā	rna	na	na	na.
kya	chū	chia	chia	rba	ba	ba	ba.
k'ya	ch'a	ch'ia	ch'ia	rma	ma	ma	ma.
gya	jya	gyā	gyā	rtsa	tsa	tsa	tsa.
pya	cha	hsia	hsia	rdza	dza	dzā	dzā.
p'ya	cha	hs'ia	hs'ia	ika	ka	ka	ka.
lya	ja	hsia	hsia	lga	ga	gā	gā.

13774

(大賣捌)

東京市 東亞堂 名古屋 川瀬代助 京都市 大黒屋書店
 京都市 若林書店 大坂市 吉岡平助 鹿兒島 吉田幸兵衛
 熊本市 長崎次郎 仙台市 前川善兵衛 新潟市 北光社 長野市 西澤書店

不許複製



編輯 西 藏 研 究 會
 發行所 東京市日本橋區通二丁目十三番地 小 林 慶
 印刷所 東京市京橋區四番屋町廿六七番地 嵩 山 房
 株式會社 秀 英 舍

明治三十七年九月一日印刷
 同 三十七年九月五日發行

四 藏 奧 附
 定價金四十五錢



9810

24

西藏音綴	拉薩	パタン	ツアロン	西藏音綴	拉薩	パタン	ツアロン
brnga	na	nga	nga	mga	ga	nga	ga.
bsnga	na	nh'a	nga	mgya	gya	gya	gya.
behah	cha	chiä	chiä	mgra	dra	dra	dra.
brja	ja	jä	jä	mngah	na	nga	nga.
brnya	nya	nyä	nyä	mch'ah	ch'a	ch'ia	ch'ia.
bska	ka	ka	ka	mjah	ja	nja	ja.
brah	ra	ra	ra	anyah	nya	nya	nya.
brten	tu	ta	ta	mt'ah	t'a	t'a	t'a.
blta	ta	ta	ta	mdah	da	nda	da.
lsta	ta	ta	ta	muah	na	na	na.
bngah	na	nga	nga	mts'ah	ts'a	ts'a	ts'a.
bdah	da	d'a	da	mdjah	dja	dja	dza.
brda	da	da	da	hk'ah	k'a	k'a	k'a.
blda	da	da	da	hk'ya	ch'ya	ch'ya	ch'ya.
bsda	da	da	da	hk'ra	tra	tra	tra.
bsna	na	na	na	lgah	ga	ga	ga.
brna	na	na	na	hgya	gya	gya	gya.
bt'ah	tsa	tsa	tsa	hgra	dra	dra	tra.
brtsa	tsa	tsa	tsa	hch'ah	ch'a	ch'a	ch'a.
bstsa	tsa	tsa 又 sa	tsa	hjäh	ja	nja	ja.
brdja	dja	dja	za	ht'ah	t'a	t'a	t'a.
bdzah	dza	dza	dza	hdah	da	nda	da.
hzah	za	za	za	hdra	dra	dra	dra.
bzla	da	da	da	hp'ya	p'a	p'a	p'a.
brla	la	la	ba	hp'ya	ch'a	hsia	hsia.
bshah	sha	ha	shia	hp'ra	tr'a	t'ra	tr'a.
bsah	sa	sa	sa	hbah	ba	ba	ba.
bsra	sa	sa	sa	hbya	ja	hsia	hsia.
bsla	la	lh'a	da	hbra	dra	dra	dra.
mk'ah	k'a	k'a	k'a	hts'ah	ts'a	ts'a	ts'a.
nk'ya	ch'ya	ch'ya	ch'ya	hdja	dja	dja	dja.
nk'ra	tr'a	tr'a	tr'a				

八

H-61

△新刊廣告▽

佐々木綱先生題詠 三宅克己先生畫
渡邊武先生題詠 齋藤松洲先生畫
黒岩周六先生序 萬朝報記者茅原華山君著

動中靜觀

洋裝美本全一冊

定價金四十錢

郵税金六錢

曩に黒岩涙香先生、萬朝報紙上に「冥想の樂み」と題し、「華山君の趣味の博きより思へば、殆んど題として著筆せざるは無く、從て人として讀む可からざるは無からん」と稱せられたる本書は、今や盛裝して江湖に見ゆる事となれり、浴、沂、風、舞、雩、詠、而、歸の八篇、或は宇宙觀あり、或は人生觀あり、諷刺あり諧謔あり、修養談あり、人物評あり篇々活躍、字々生動、其趣味の多様なる、詢に黒岩先生の推獎に背かざるを看る、矧んや華山君の文の雄麗なるは世既に定評あり、青燈の下、綠蔭の邊、家居に、行樂に袖中無二の好師友たるは、復た贅辨を須ひざるなり

發行所 東京市本郷區本郷一丁目 東亞堂
大賣捌 全 市日本橋區通二丁目 嵩山房